女鑑

第拾三年第廿壹號

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

塚原澁柿園著

歷史小說

山崎合戰

菊判洋裝

定價 卅九錢

郵稅 四錢

毛利征伐、高松水攻、中國引返、山崎大合戰是れ我神州空前絶後の英雄豊臣秀吉があらん限りの智惠と力とを振ひし化も實もある大戰爭なり。之を例の戰鬪小說に獨特の妙ある塚原澁柿先生が汀戶案の粹且高尙にして押出よく、色も艷も古今獨歩の彩筆を執て叙述されたるものなれば、猿面冠者の羽柴筑前、虎領猿頰の惟任將軍を始め敵には吉川小早川齋藤四王天味方には堀尾蜂須賀加藤木村の豪傑ども入り代り立代り眼前に來て各自得意の技倆を演するが如く、雲霞々、雷殷々、砲火閃き劍光迸る、舞臺一轉すれば衣冠束帶の豊臣秀吉悠然として現れ來る、實に是れ山崎大合戰のパノラマ、大德寺燒香場の活動寫眞。

幸田露伴編

四季物語

袖珍總クロース頗る美本

定價金五拾錢　郵稅金四錢

柳浪氏の鏡のうらは春曉鶯を聽き、素影氏の歸省は夏雲奇峯多く、煙村氏の傑作は秋風索寞鶴伴氏の初陣は雪華繽紛たるに似たり、編者露伴子題していふ、これは不老門中の春夏秋冬なれば、見る人心ゆたかに欣賞し玉へかしと、以て本書の內容如何を知るべし。製本亦美麗にして殆んど珠玉の如し、机上の粧飾として燦然光彩を發するを見ん。

塚原澁柿園著

小牧合戰

菊判洋裝美本全一冊

定價五拾五錢　郵稅拾錢

堀內新泉著

家庭小說

女樂師

菊判洋裝

定價 卅五錢

郵稅 六錢

一個の美人身は良家に生れ姿麗はしく才かしこく廣く中外の音樂を研究して其蘊奧を極めしが月下氷人の媒妁にて一個の靑年と赤繩を結び、音樂の効により陰術柔譜なる良人の心機を一轉して勇進敢爲の丈夫となし、遂に或る一大事業を成功せしむといふ趣向斬新の家庭小說にして春宵孤閨に泣くの新婦、秋夜明月に歌ふの夫婦一面出產の歡樂、他面洋行の別離、と悲喜忽ち變じ、哀樂俄に移り、讀者をして應接に暇あらざらしむ、而も一家を輯睦して子孫の繁昌を圖るに歸せり、著者が家庭小說に別才あるは、大方諸君の知らせ玉ふ所、一本を座右に置かれなば、獨り秋夜の幽寂を慰むるのみならで、家庭敎育を裨益すること疑ひなし。

發行所　東京々橋區築地二丁目　株式會社　國光社

女鑑 第拾參年 第廿一號 目次

定價

一册	金拾錢
六册三ヶ月分	前金五拾七錢
十二册半年分	前金壹圓拾錢
廿四册一年分	前金貳圓拾錢

全國無遞送料

廣告料

五號活字廿三字詰一行	金三拾錢
半頁	金八圓
一頁	金拾貳圓
逰紙一頁	金拾六圓

(色刷は特に御相談に應ず)

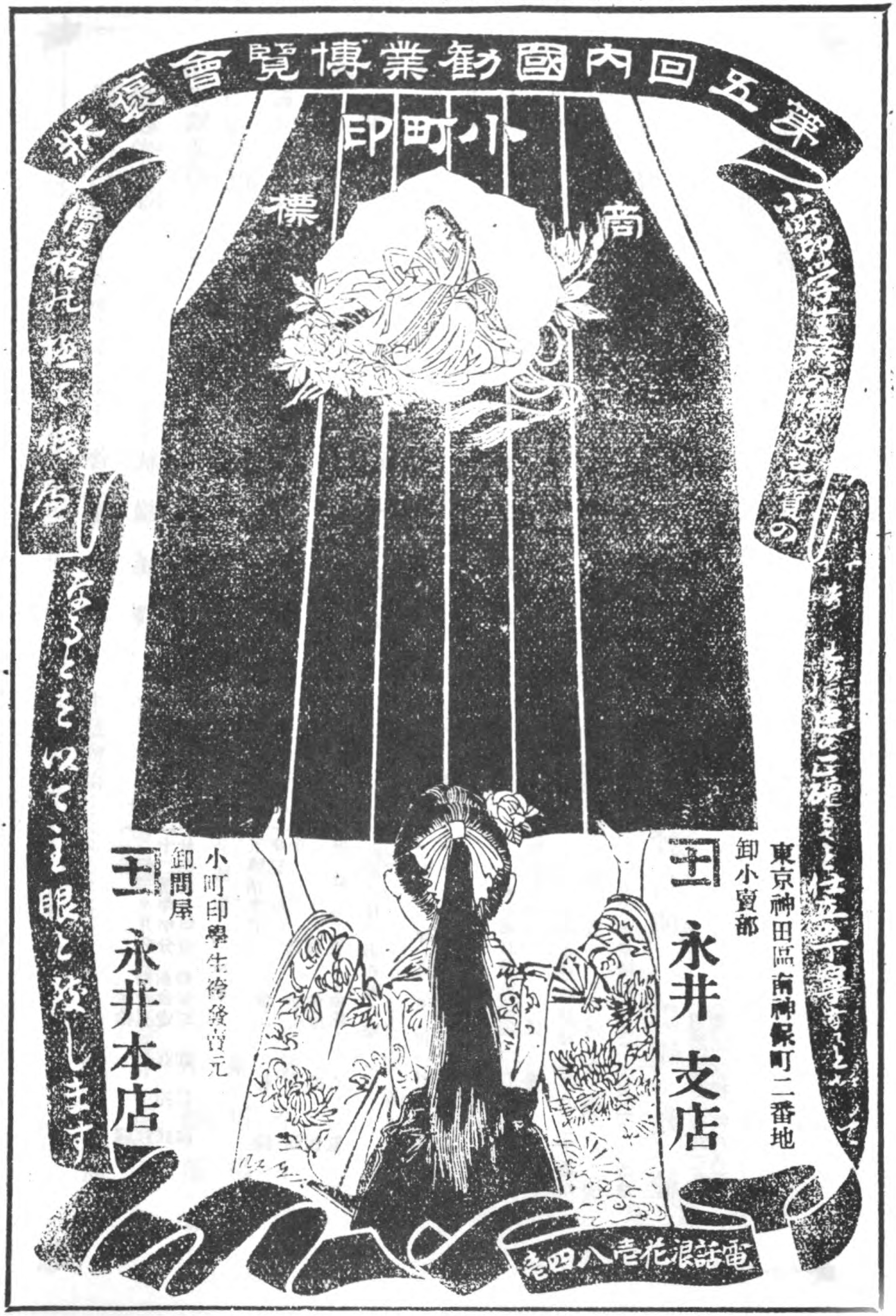
明治三十六年十月卅一日印刷
明治三十六年十一月一日發行

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
編輯兼發行人　渡邊紫一

東京市京橋區築地二丁目二十番地
印刷人　河本龜之助

東京市京橋區築地二丁目二十一番地
發行所　株式會社國光社
(電話新橋二六九三番)
(電話新橋特八八番)

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候



御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

貴金製金具附帶留

花も錦も夫々の取合せありてこそすべての價あれ帶美はしくとも帶留佳ならねば裝ひとゝのはず茲に本店新製の帶留は諸大家の意匠に係る斬新の圖案を其儘黃金白金銀赤銅朧銀等に彫刻或はダイヤモンド眞珠其他の寶石類を箝入し紐は鹽瀨地の縫ひ取り又は金襴錦朱珍等いづれも美術の精巧を極はめたる品なれば霞の帶の引もきらざる御注文あらんことを

東京市京橋區尾張町
白牡丹本店
松田幸治郎

金製彫刻金具付價
十二圓十五圓廿圓
卅圓以上六十圓迄

寶石入金具付之價
二十圓三十五圓五
十圓以上一百圓迄

銀赤銅朧銀並彫刻
金具付之價
三圓五圓六圓八圓
以上十圓位迄各種

本店に於ては市内
の分支店共通仕候
小間物切手發賣致
候間御用命奉願候

輕便 瓦斯の煮燒 德用



瓦斯は燈火用の外料理其他一般の煮燒用として使用は輕便マッチ一本あれば晝夜何時にても即時に用を便じ火力加減自在にして火災の危險なく且大に人手を省き費用は薪炭よりも低廉なり

○三升の米は瓦斯代僅に一錢七厘時間十八分にて炊くを得べし

○瓦斯竈は本社の發明品にて專賣特許を得たるものにして瓦斯消費量少なく德用且便利なり

○工事費は前金拂は一割引とし又廿ヶ月賦拂にて約定す

○臺所竈、七輪、湯沸、風呂並煖爐等に專用の瓦斯代は特に定價の二割引とす

●新式瓦斯器具澤山本社陳列所及銀座二丁目陳列所等へ陳列致置候間隨意御縱覽相成度候

電話本局 二三、五四八 二三〇三

東京神田區錦町三丁目

東京瓦斯株式會社

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記下被度候

金製指環

●川端玉章先生考案並畫

●川納夏雄先生考案並畫



●一號ヨリ八號ニ至ル十八金目方三匁付片切彫刻價十八圓ヨリ二十三圓迄●同十八金目方三匁付平象嵌入價二十三圓ヨリ二十九圓迄●同二十二金目方三匁五分付片切彫刻價二十五圓ヨリ三十七圓迄●同廿二金目方三匁五分付平象嵌入價三十一圓ヨリ四十七圓迄（市外遞送料金廿錢）

東京市京橋區尾張町二丁目十六、十七、十八、十九番地

電話番號新橋三百三十三（長距離加入）

時計寶玉類貴金屬美術品及銃砲火藥商 天賞堂

天賞堂出張所々在地

●東京市神田小川町●横濱市●名古屋市●大坂市●廣島市●熊本市●長崎市●小樽臨時

盃類圖案一班

（金、銀、輕白金、白銅、安質母尼抔及木盃製作應用）

●玉田先生畫

稚松細流圖



誕生ノ祝賀若クハ還暦ノ祝賀ニ適用ス

東京市京橋區尾町張二丁目十六、十七、十八、十九番地

時計寶玉類貴金屬美術品及各種銃砲火藥商 天賞堂

（特電話新橋三三三）

天賞堂出張所々在地

●東京市神田●長崎臨時●名古屋臨時●大坂市●廣嶋市●熊本臨時●長崎卅●小樽臨時

●無料贈呈 天賞堂營業一覽（送料四錢）

六



露國皇帝陛下並皇后陛下



大阪府立堂島高等女學校特技科職員並卒業生

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

國文研究會編纂

中等女子作文教本

●日用文の部 壹冊
●普通文の部 壹冊

各冊定價金貳拾參錢

本書の特色

師範學校女子部高等女學校生徒用に最も適す

●送り假字、句讀、段落、譯文、文體、結構の諸法を網羅す

●文字、文法、類字同訓文學の正誤を練習し得るヨーにせり

●作文に必要なる言葉と言葉の組立とは特に課を設けて教授し得るヨーにせり

●一の例文毎に必二三の應用文を附し自ら熟語を參照して作り得るヨーにせり

●日用文は普通文に近げ、候を全廢し又言文一致をも載せたり

●多年經驗ある諸先生の編纂なれば教へ易く解し易く教師生徒諸君の共に大に使なるべし

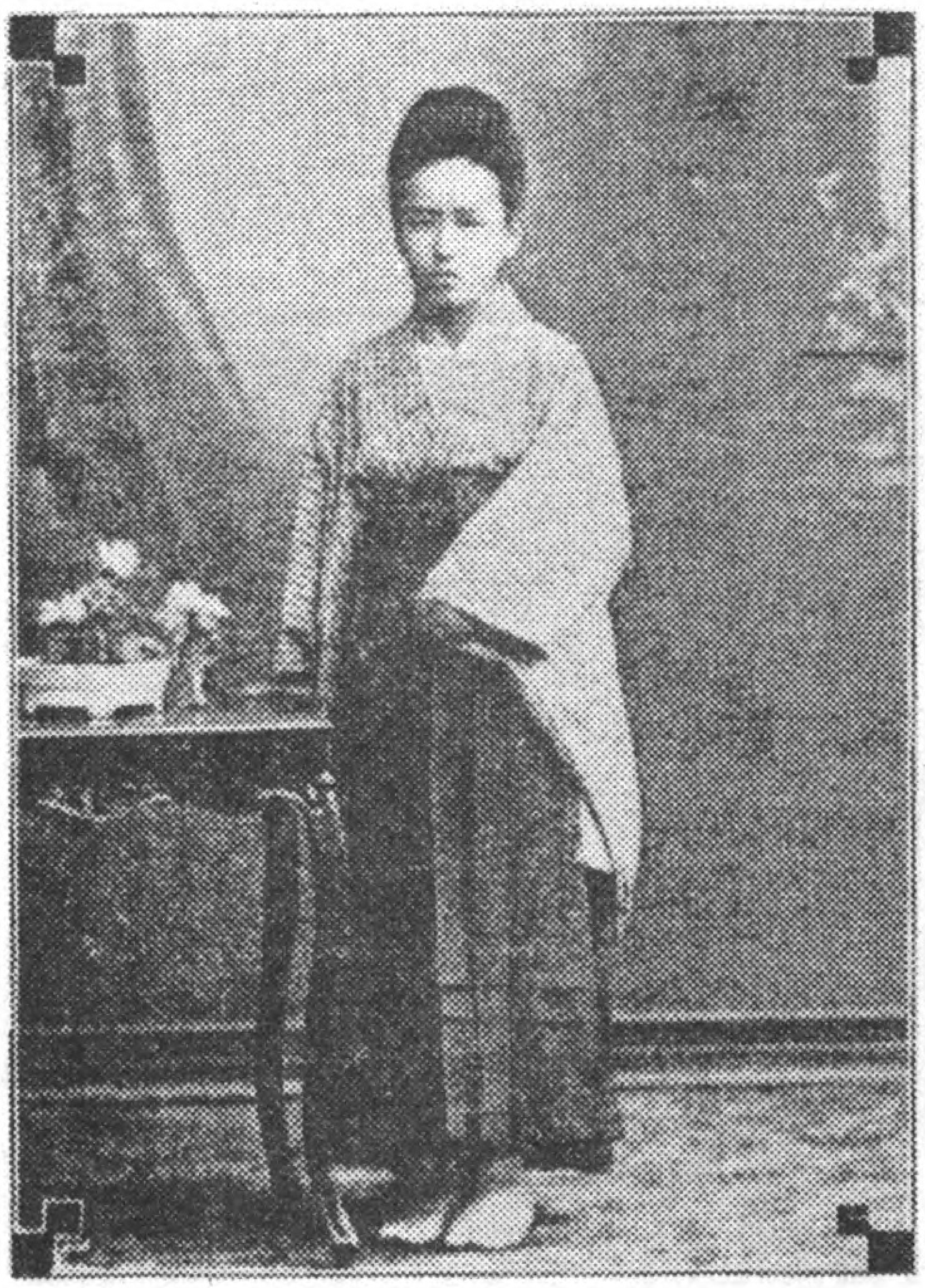
發行所 東京市京橋區南傳馬町二
電話本局二一六三番
目黑書店

●女子計算員募集●

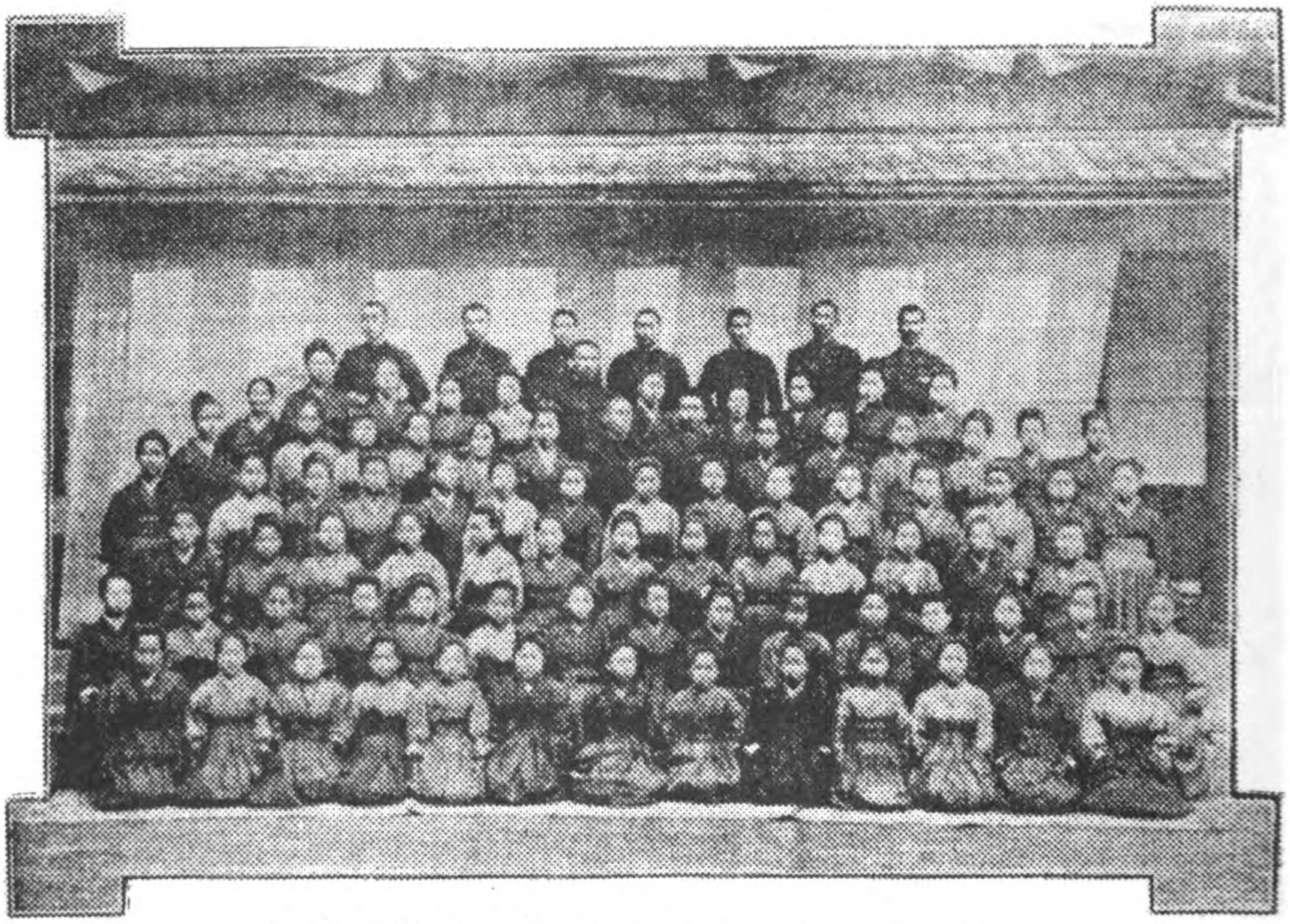
某々會社より女子計算員養成を囑託せらる且つ雇入の申込もあり依て三十名限速成に養成し其依賴に應ず志望者申込あれ詳細は本所に承合せられよ

東京神田區裏猿樂町四番地
私立 銀行事務員養成所
所長 黑岩規

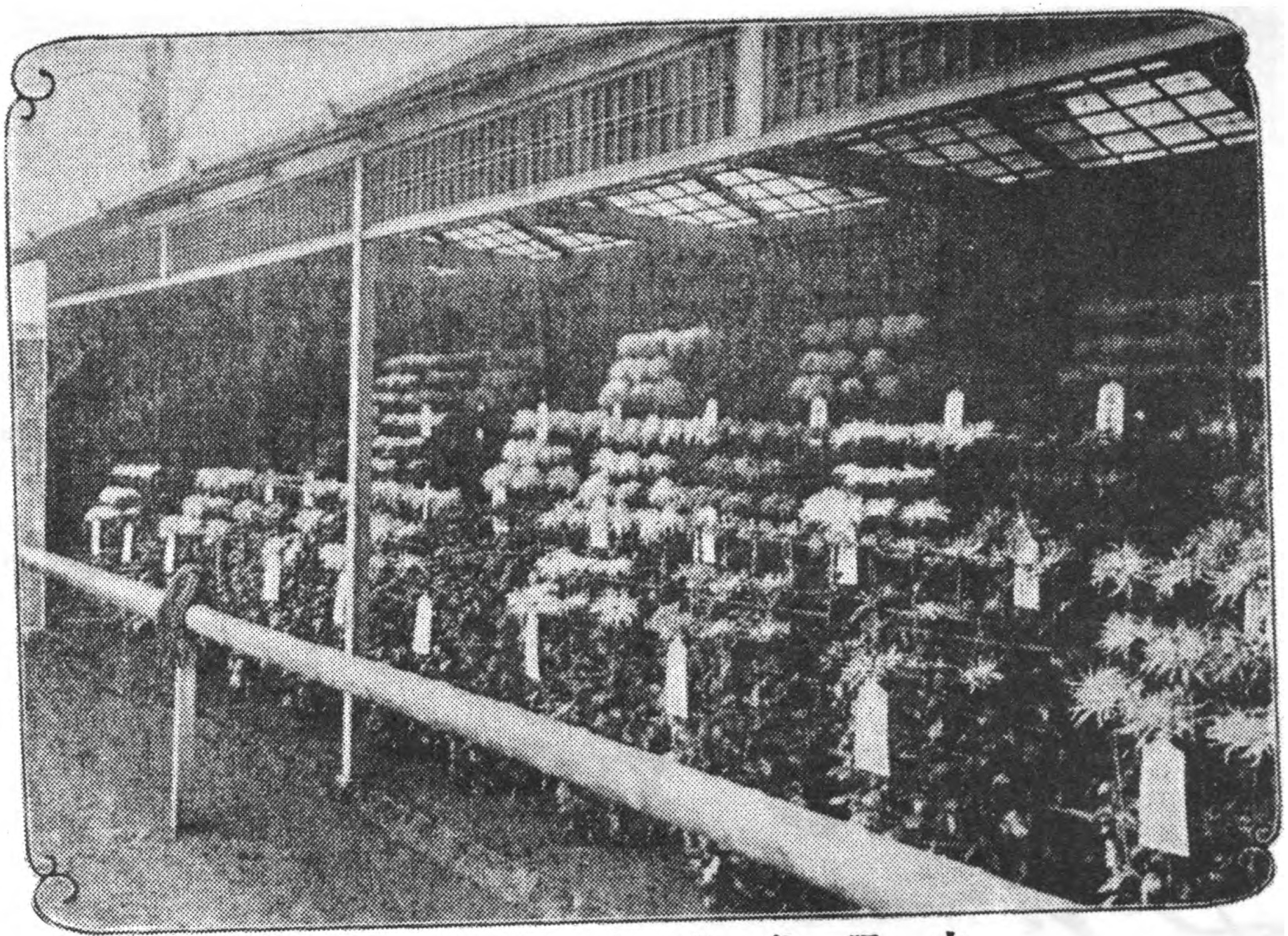
女鑑兼題投稿優等者



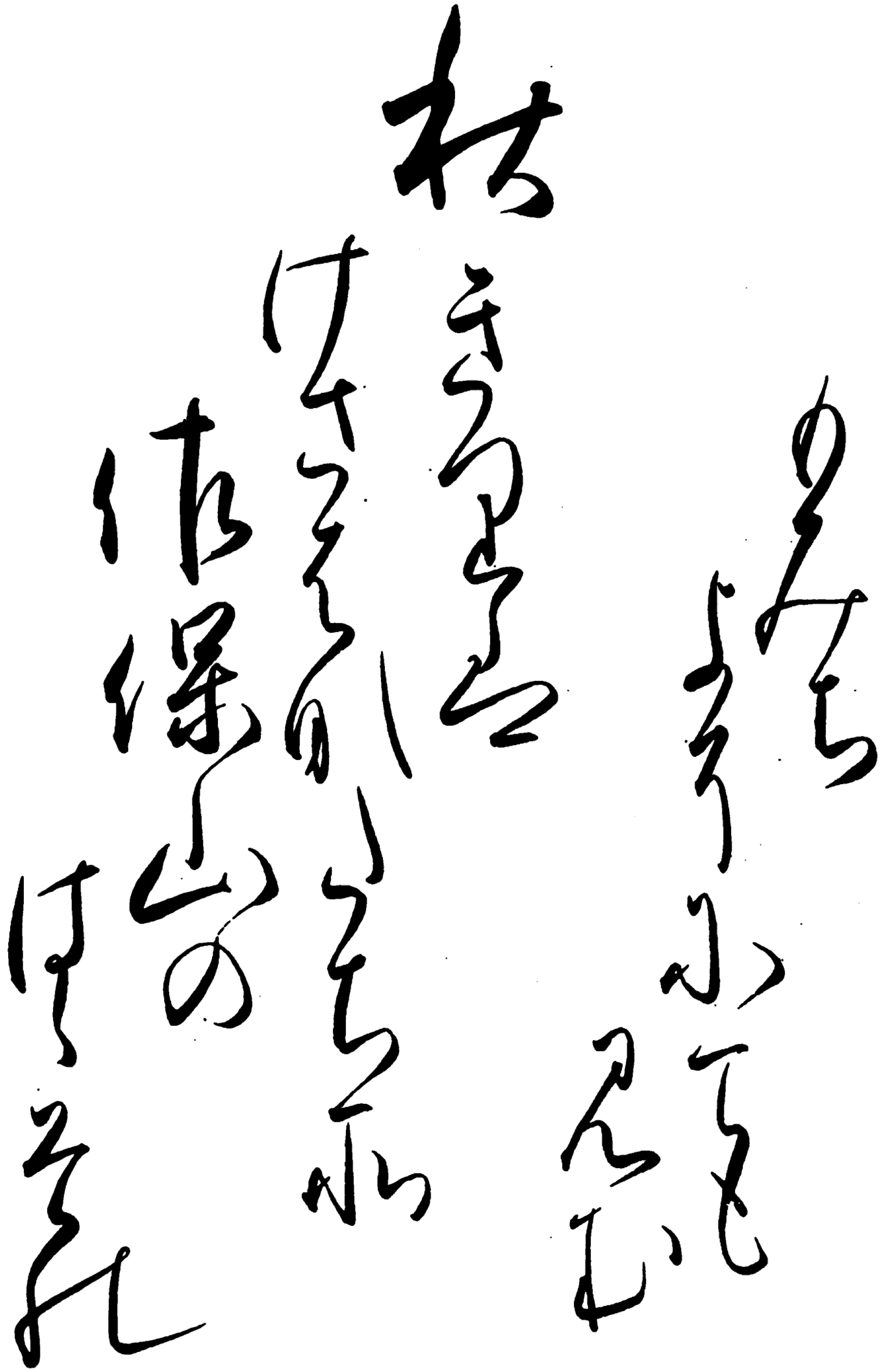
岡田柳子



大阪市育英女子高等小學校職員並卒業生



大隈伯邸内菊花壇



宮里三木枝子書

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記下被度候

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候


第四回内國勸業博覽會褒狀

鐵金具
桐製重簞笥　東京市京橋區水谷町　鷲塚清次郎

褒狀

審査官　井上宜文
丹羽圭介
河原徳立
勲五等　鹽田眞

審査部長正四位勲四等　前田正名
審査總長正三位勲二等　九鬼隆一

審査總長ノ申告ヲ領シ茲ニ之ヲ授與ス

明治二十八年七月十日　總裁大勲位彰仁親王


時事新報金牌

一重簞笥一号　東京市京橋區水谷町　鷲塚清次郎

時事新報ハ第三回内國勸業博覽會ノ出品ニ對シテ公衆ニ求メタル投票ノ結果ニ據リ前記ノ品物ヲ最良品ト認メ茲ニ金牌ヲ贈進スル者也

明治二十三年八月廿日

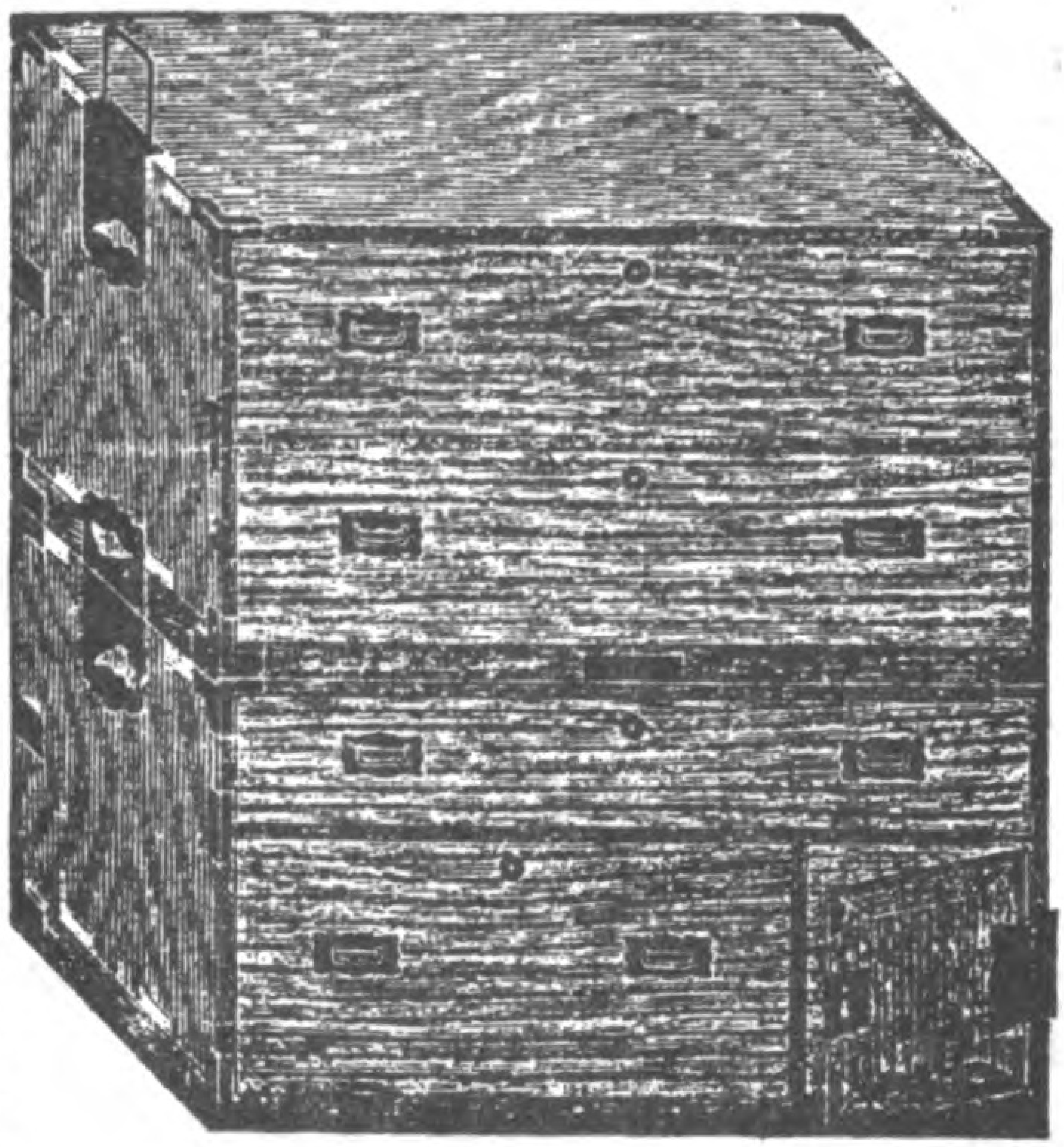
時事新報社

第五回内國勸業博覽會褒賞授與式に於て一等賞銀牌授與

せられ候同業者出品の種類中に於て此稀有の名譽を荷ひ候こと江湖愛顧各位の御餘光と難有奉感佩候因て益々奮勵製作に關する總てに一層●注意を加へ尚御各位の御引立に酬ひ可申候此段謹告仕候

御注文の思召ある御方には御申込次第たんす目錄一冊呈上仕候

（但郵券貳錢封入の事）



清

東京市京橋區水谷町一番地角

越中屋　鷲塚清次郎

東京市京橋區水谷町三番地

支店　越清支店

女鑑 第十三年 第廿一號

音樂と家庭

藹然たる和氣の充滿せる樂しき家庭の内には、音曲絃誦の聲を聞きて、益々其趣を添へざるを得ざるなり。日の夕べ、晩餐の準備方に成りて、主人外より歸り、主婦迎えて、その老父母を請じ、その幼兒女を招き、共に團欒して食卓を圍まん時、洋々たる音樂の室の一隅より起りて、瀏喨の響きを傳へんには、滿堂春風駘蕩として、落葉蕭颯の冬日も、猶ほ百花笑ひて、黄鳥喈々たるの趣を現はすなるべし。

男子外にありて、日に社會百般の事物に應酬する間には、豈たゞ快心得意の事のみならんや。時としては、衷心甚だ樂まざることなきを得ざるなり。婦人内を守りて、日夜家内の事務に鞅掌する中には、又た精神沮喪し、體軀疲勞して、憂鬱の結ぼれて解けざることなきを得ざるべし。縱令ひ一家團欒の快樂は、能く其日の勞苦を慰藉するに足るべしと雖も、たゞ是れのみにては、未

だ以て勇氣を鼓盪して、來るべき明日の謀を廻らし、心機を一轉して、更に新たなる生命に入るの準備を爲す能はざる場合なきを得ざるなり。

音樂は洵に憂ふる者をして、その憂より遠ざからしめ、悲む者をして、その悲みより離れしめ、怨む者の懷を和らぎ、慍はる者の怒を解きて、能く其の平和なる狀態に返らしむるの力を有す。悲哀に泣ける不幸の人をして、妙なる一曲の音曲を聞かしめよ、その潸々たる涙は、自ら拭はれて、痕をだに留めざらん。苦痛に惱める不運の人をして。巧みなる一闋の樂歌を聞かしめよ、その愁容は何時となく消えて、更に笑顏の催ふし來るを見るべし。心の平和を失ひたる人々すら然りとすれば、常に平和の心を得たる人にありては一層の快感を生ぜざるを得ざるべし。況んや和氣充滿せる平和なる家庭の內に於てをや。されば或意味より言へば、音樂は寔に心の平和を失ひたる人の妙藥にして、また平和なる家庭の滋養ある食物といふべきなり。音樂豈に輕々に見るべきものならむや。

然るに我國の家庭には、樂器の備へを見る少なく、隨つて音樂の嗜みを有するもの丶稀なるは、實に一の缺點といはざるべからず。而してその偶々之を有するものと雖も、多くは琴若くは三味線の類に過ぎざるは又以て遺憾とすべし。琴の音や、高尚なる點に於ては、優れたるものなきにあらずと雖も、隱逸にして世と遠く、悲越にして人を怨むの調を帶ぶ。未だ以て平和なる家庭の樂器としては、不足の思ひなきを得ざるなり。三味線に至りては、鄭衛淫猥の音ありて、野卑媟

冶の曲を以て、之に唱和するにあらざれば、幾んど其妙を見るべからず。故に親子父兄の間は云ふに及ばず、夫妻双對の席にても聞くに堪へざるものなきにあらず。豈に直ちに清淨なる家庭に容るべきものならむや。されば一は甚だ隱逸に過ぎ、一は最も猥褻に失するの嫌なきを得ずと雖も、有るは尙ほ無きに優るが故に、此の不完全なる音樂と雖も、一般家庭に行はるゝを得ば、尙ほ幸なりと雖も、是れすら尙ほ不充分なるが爲めに、男子一たび得意の事ありて、昻然として、歡樂の地を尋ね、若くは憂鬱の際に當り、その不平不滿の情を散ぜんとする時に於て、之を家庭の內に得る能はずして、之を廣く世間の外に求むるは、又た必然の數にして、其事の善不善は暫らく措き、畢竟するに家庭に缺くるところのものあるが爲めならざるを得ざるべし。而して歡樂を他に求め、憂鬱を外に散ずるの結果は、往々人格の墮落となり、家庭の不和となり、或は社會の腐敗となるは、洵に以て嘆息すべきにあらずや。

されば中等以上の家庭にありては、西洋音樂を備ふるは頗る必要のことゝいふべく、隨つて主婦を始め、兒女も主人も老父母も、畧ぼ音樂の素養を作らんことは、いづれの方面より觀るも、尤も必要のことゝいはざるべからず。若し今日の如く、依然として家庭に音樂なく、又之が嗜みもなきまゝに過ぎ行かんは、決して趣味ある家庭を組織する所以にあらず。平和なる興懷を起す所以にもあらざるなり。加ふるに社會の風紀を正ふし、個人の品性を高うする所以もまた茲に存するを思はゞ、淸淨なる音樂と家庭との關係は、尤も重んずべきものゝ一なることを解せざるを得ざるべし。



日本の女子

東京市長　尾崎行雄君談

女子に教育を施すべき事は、云ふまでもなく必要のことではあるが、扨て其教育を施すにつけても、先づ女子なるものは男子と獨立して生活をすべきものか、否かの問題を決めなければならない。即ち獨立して往かなければならぬ境遇の女子が、果して何程あるかといふ統計表が欲しいのである。さうでなければ充分女子教育に就いて論ずるわけには往かないのである。

女子が若い間には、常に父兄の干渉を受けて居て、後他へ嫁しては克く良人を補けるといふのが一般であるが、實際良人を補けるといふ事、良人の手補けとなるといふ事については、今日其教育が大に缺乏して居るやうである。所謂今日では、女子が男子に同情を表する智識習慣が缺げて居るのである。これは何故かとなれば、餘りに男子と女子との教育に懸隔があるからで、詰り女子が其良人の爲る事業に對して內助の効がないのである。女子を教育するに當つては、先づ良人の事業に對しては、同情を表する事が能るだ

けの教育を施さなければならない、尠くも男子の事業を理解するだけの教育が必要である。
人の妻として必要の教育は、之を體育の方から云つても、第一女子は男子の遊び友達となるだけの體育を施さなければ不可ない。詰り平常は同情を以て男子の事業を助ける事と、暇ある時には男子の遊ぶ事に向つて共に遊べるやうに仕なければならない。さうで無かつたなら、到底男女の間が睦じくは行かぬのである。然るに日本の女子には、成る可く外に出ぬやうにする弊があつて　野外に於て男子と共に遊技を共にする事に能ぬやうになつて居る。單り野外ばかりではなくて、家の内に在つても、是と同様の事柄が多いのである。

近來男子の間に、謠曲とか、能樂とか、義太夫とかいふ事が隆んに流行して、確かに家の内の慰みとはなるけれども、是とても唯男子のみに限られて、女子には適當しない。で、もつと女子に適當せる……云はば女子がピアノを奏して男子が唄ふとか、男子がオルガンを彈いて女子が歌ふとか……何とか共に遊べる樣な教育方をしなければならない。

此缺點は、軈て女子が人の母となつても、男子と遊技を共にするだけの身體を持たぬやうになる故、隨つて健全なる子供を生むことが出來ぬやうになるのである。要するに男女の間が餘りに懸隔がある故、女子が我子を育つるには、女子の範圍内で育てる事になつて、たゞ女子の一小天地に育てゝ、共に男子を育てる事が困難になつて來る。人の妻となつても、從來の不完全極まる女子を養育する事は出來るが、男子を育てる事が出來ないのである。

其證據には、現在日本に於ける諸處の子供達を見ると能く分明る、男の子はお母さんの云ふ事となると、なか〳〵聽かないが、お父さんといへば、云ふ事を聽く、……大抵さうである。是れ即ち母の養育方が、

所謂半面よりしか意思が及ばぬからである。

それから人の母となつても、妻となつても、又其前といつても、重に必要なのは、もう少し善惡邪正の感念を、女子の力に依つて多くしなければならぬといふ心懸である。元來男子は二六時中、最も複雜せる事に鞅掌して居るものであるから、自然道德的感念が薄らいで往く傾きになり、女子は男子よりも複雜の事に關係せぬゆゑ、それだけ薄らぐ事がない。例へば外交の局に當つて居る男子は、種々老練なる手腕を以て八方の人氣を取るとか、或は軍人が砲烟彈雨の中に敵軍をなやますとか、或は商人が商賣の掛引上心にもないお世辭を喋舌るとか謂ふやうに、兎角世の中の風波に揉まれるために、自然其道德心が銷磨せらるるが、比較的險惡の風波にあたらぬ女子は、隨つて道德心の銷磨せらるゝ事が少ないのである。

由來道德心は意思の單純なる者程強く深いのであるから、何うしても女子は男子よりも道德心の發源が強いのである。故に歐洲の文明國では、比較的道德心の發源の深い女子に、克く良人の事業を助け、克く男子と遊びを共にするやう敎育が屆いて居るから、自然其風儀に至つても整然として居る。日本は肝腎の女子が、恰かも男子の玩弄物であるかの如き有樣になつて居る、風儀も甚だ宜しくないが、是れ皆與かつて女子の力奈何にあるので、其證據には、亞非利加邊の野蠻未開の地に往くと、歐洲の男子は、日本よりも尙甚だしき風儀を爲して居るのである、是れ確かに女子の力に基因するので、即ち品行の監督者たる女子が、日本では不行屆である、是が大缺點である。

尙進んで云へば、我が同胞兄弟は、道德感念の初步ともいふべきものに慮りがない、換言れば虛實の感念が薄い。即ち虛を吐けば耻づかしいといふ事を思ふ意が薄い。先づ毎日發刊する處の新聞紙を見ると一番能く分明る、新聞の記事中には、事實に違ふ記事が餘程多くて、其多くの虛を書いてある中にも有心と

無心との虚があるやうである。處でこれを書く處の人は、虚を間違へて書いても悔ゐず、之を讀む人は、又これは虚であると知つても憤らない、といふ狀態である。

若し斯麽新聞が歐洲にあつたなら、忽ちの中に讀者は減つて了つて新聞を讀む者が無くなる、それが日本では反對で、虚を書く新聞程段々讀者が殖へて行くではないか？。此等の事は、即ち女子たる者の受持ちで、斯麽虚を書く新聞は家庭の中に入れぬといふやうにし、宜しく此道德感念の初步は、女子の勢力範圍に屬すべきものである。

此虚實の感念の薄いといふ事は、歐洲では非常に八ケ間しく言つて、ウソツキといふ言葉は彼等の間に甚だしき侮辱となつて居る、單り日本では、子供の時代には左程でもないが、大人となつてからは、侮辱とは感ぜぬやうである。現に小供と小供とが、ウソツキと云はれると、甚だ不快に心得て喧嘩が始り、ウソツキと稱して仲間入りをさせぬではないか。處が大人は、ウソツキ軈てホラフキと稱せられ、寧ろ一種の名譽？と思はぬまでも、至て平氣な者で、決して一種の罪惡とは思はないのである。これで如何に虚實の感念が缺けて居るかゞ知られる。日本は道德心の高き國と稱して居るにもかゝはらず、一番大切な虚實の感念が薄いとは、何たる事であらう？。

前にも言つた虚を書く新聞紙を毎日〳〵檢査して見たなら、其虚の記事は、恐らく非常のものであらう。更に之を平氣で書き、之を平氣で讀むといふに至つては、實に驚くべき現象ではあるまいか。

修業のために女子を單獨に上京させる事に就いては、非常に險呑であるといふ事を思はなければならぬ。女生徒を監督する或人の話に、近來女學生の多くなつたに伴れ、男の學生中に惡い者が出來て、女學生をかどわかす事を職業のやうにして居るものがある。それは百方手段を盡して金を持ちさうな女學生から、

金を取るのが目的で、甘言、誘拐、脅喝、種々の手段を以てするさうである、中にはたゞ猥褻だけの目的でする者もある。との話を聞いたが、此様な時に何ら勉强の爲とは言ひながら、單獨で修業に出すといふことは、險呑である、注意せねばならぬと思ふ。

（をはり）

寡婦論

女子學院長　矢島楫子談話

一半、漢學的の道徳を固守し、一半漸やく泰西の思潮に浴せんとする今日の思想界に於て、寡婦問題の如きは、實に婦人間に蟠まる所の一大疑問たりとす、記者一日、斯の問題を提げて、女子學院に矢島楫子先生を訪ひ、其所見を叩く、左に摘錄するは、斯の問題に對する先生の解釋なり。

寡婦問題の要點は、所天を喪ふて寡婦となりたる婦人が、再嫁して差支へなきや否やと云ふ事で、此事に付ては隨分世間でも議論があり、再嫁を可とする者もあれば、否とする者もあるやうですが、私の考へでは男女は元と同權同等の者であるから、男兒が配偶を喪つて、一家を整理する爲めに、後妻を迎ふる事の道徳上差支へ無き以上は、無論女子も配偶を喪つて一身の處置及び子女の世話とするに付て、都合上再嫁するのは差支へ無き事であらうと思ひます、殊に年若き婦人など、再嫁せずに後の一生を獨身で立て通はすなど云ふのは、思想の稍や堅固ならざる者に取ては險呑の話で、其等の人は唯だ其の再嫁せざるが爲めに、飛んでもない罪を犯かす事になります、是等は世間に能く有る事です。

併し其等の事は其當人の考へ、及び時と場合にもよる事で、婦人が所天に離れて、寡婦で立て通はせる丈けの道があらば、獨身でやつて行くも、反つて面白からうかと思ひます、是は私一個人の話で、固より一般の標準となる事ではありません、けれど私は寡婦程世に幸福な者は無からうと考へます、なぜならば、婦人が世に立つは、何か社會に貢献する丈けの事をして、其天職を盡くさんとするには、所天や子供の係累あつては迚も十分の事は出來ません、唯だ己れ一人であれば、心血を其事業に集中して働らく事が出來ますから、其結果は意外に絶大な成功を得るので、近來米國などでは、婦人で種々の社會的事業を經營して居るのは寡婦に多いやうです。併し是は米國婦人の品位が高いからの事で、我國今日の情體では殆んど望み難い事です。

私の見る所では、今日我國の婦人で、十分の財産があらばイザ知らず、然らざる向きは、一旦所天に離れて殆んど途方にくれない者は無からうと思ひます、其情體であるにも拘はらず一方には頑固な道徳論で再嫁を一概に排斥しますから、寡婦となりたる者は如何にす可きか、其適歸する所を知らず、失望落膽の極、間々善からぬ道に墮落して、醜名を流がす者が極めて多い、其墮落した人間は固より惡るいに相違無けれど、是等は一は全く社會の罪で、あながちに其者計りを咎むる事は出來ません。

私は固より無學の者ですけれど、今日の教育制度に女兒と男兒とを區別して、教科を設けてあるのは大反對で私の考では女兒は男兒と同樣の教育をすれば宜しいので、何も別に女兒として教科を異にするの必要は無からうと思ひます。

教育は神聖なる者で、滿足なる一個人を作り出すのが目的で嫁入道具などに利用するのは、根本から教育の趣旨を無視した話です、既に滿足なる一個人を作り出すのが目的であつて見れば、同じく一人前の日本

國民として敎育を施すに於て、男兒と女兒とを區別するの理由がない、コンナ敎育の仕方であるから、女兒は何處迄も男兒に附隨して行かねば、世に立つ事が出來ないやうになつて來る。

此の人を作ると云ふ事は、敎育家の尤も注意を要す可き事で、男兒の敎育にしても、我國今日の有樣では、唯だ試驗に合格せしむるのみを以つて能事足れりとして居るから、敎養さる丶所の人物は學問が淺薄で、唯だ試驗と云ふ型に這入に丈けに出來上がる、是では迚も偉大な人物を作り出す事は出來ない、其男兒敎育に於て學問を唯だ試驗受けの道具として授けるのは、女子敎育に於て之を嫁入道具として授けるのと、少しも甲乙は無いのです。

悲い哉、我國の婦人は今日迄斯くの如き敎育を受けて居るから、人の妻となつて働く事は出來るが、一旦所天に離れてから、獨立で立派に世を渡つて行くと云ふ事は出來ないのです、ソコデ私の學校では、女子を敎育するに、決して嫁入道具の積りで學問をさせない、日本國民の一人として、其者を滿足なる人間に仕立てる積りで敎養しますから、先づ不具の人間は出來ない積りです。されば と云つて私は決して嫁入を排斥するのではない、一夫一婦は人間自然の道で、嫁入しないのは變則ですから、何處迄も人の妻としては良妻たり、人の母としては賢母たる丈けの人物を養成する積りです。

既に一國民として、滿足なる一人前の人間を拵らへて置けば、其者は何れの方面に向つても必ず適當する譯で、人の妻たれば妻たるの任務を盡くし、人の母たれば母たるの天分を全うする事が出來る、既に其れ丈けの事が滿足に出來れば、其者は一旦不幸にして所天を喪ふやうの事があつても、獨立の道に於て困まるやうな事は決して無い。

我國一般の女子が、其れ丈けの地位に進んで來れば、寡婦の中にも獨力で偉大の事業に成功し、社會に洪

益を與ふる者が續々出て來るに相違ない、之を要するに寡婦の再嫁を否認するのは道理上既に不當なるのみならず、殊に之を我國今日の婦人に强ふるは、頗ぶる無理な話で、是等は單に人を苦るしむるに過ぎない、似非理屈と云はねばなりません。

前申しました通り、女子に獨立の資格を作り與へるのは全く敎育の力にあるので、畢竟するに今日迄の女子は、其身に獨立して行く丈けの資格が無いから、自づから男兒に輕蔑せられ、又寡婦となれば其日から、直ぐに生活に困まる樣な難題に出逢ふのです。

獨立の資格と云ふのは、直ちに生活を意味する事で、女子が自分で稼いで、立派に一家を立てゝ行く事を云ふのです、其れについては何か身に覺込んだ技藝が無くてはいけない、ソコデ一面に道德を修養せしむる傍ら、一面には又將來生計の資料たる可き、技藝を敎授するのが敎育家の責任で、彼等が毎日習らつて行く技藝は、皆な他日獨立の基礎となるのです。

從來は女子の職業と云へば、其範圍極めて狹まく、其報酬の如きも亦た極めて僅なものでしたが、今日は其區域益々擴張せられ、あらゆる方面に手腕を揮ふ事の出來るやうになつたのは、誠に喜ぶ事で、其報酬も亦た相當に得らるゝやうになりました、職業界に於ける女兒の前途は實に多望と云はねばなりません。

其れに付て先づ第一に必要を感ずるは英語で、女兒には成る可く早やく、幼年時代から英語を敎へねばなりません、文明的の技藝を習ふには新智識を要します、新智識は世界の通用語たる、英語によつて求むる方最も便利ですから、先づ何より先きに英語を學ぶの必要があります、ソコデ私の考へでは、英語は小學校時代から敎へ込んだ方が好からうと思ひます、歐米人に比すれば日本人は餘程早熟の方ですから、學ぶ可き事は、成る可く早やく仕込まねばいけません。

英語は最初は學び難いやうですけれど、少し進めば、文法が正しく、總べて理屈の解釋に付ては、和漢文を學ぶよりも、餘程脳の働らきを發達させるやうです、既に英文が自由に讀まれるやうになれば　其れから先きは廣く世界の書物を讀む事が出來ますから、どれ丈けでも新智識を吸收されます、既に新智識ありて、技藝が十分に備はつて來れば、獨立の資格が全く出來たので、立派な一人前の人間です。

女子の職業とす可き事は幾らでもあります、是迄男兒に專占せられて居た範圍にでもドシ〳〵侵入して行くが宜しい、非常の腕力を要す可き事で無い限りは、男兒に出來る事で、女子に出來ない事は無い筈です。是れ迄女兒の教育と云へば、和歌だの茶の湯だの、凡て不生產的の事を專一に教へて居た樣です、和歌、茶の湯固より女兒には必要の事です、併し一般の女兒に獨立の基礎を作り與へると云ふ方針で教育をすれば、ソンナ優長な事計り、教へて居られないのです。



辨内侍

（一）赤坂城の一夜

大林義方

政權一たび武門に歸してより、王道漸やく衰え、覇權愈よ盛んにして、上は朝廷を蔑ろにし、下は黎民を虐げて、殘忍誅求極りなかりしかば、英主後醍醐天皇痛く之を慨き給ひ、時の執權相摸入道高時を討ち亡ぼして、天日を將倒に挽回せんと謀り給ふ。こゝに於て中納言藤原藤房、同日野資朝、同四條隆資並に藏人督右少辨俊基等帷幕に參畫し、勅命を奉じて、遂に大塔宮護良親王を天台座主より起し、大將軍の位に推し奉りぬ。しかも是時に當り又た天下一人の豪傑の馳せ參じて、王師に與せんとするものなかりき。

夕陽遠く西山に舂きて、暮烟近く丘巒を罩め、遠寺の鐘聲鎬々と鳴り渡れば、農夫等みなその日の業を休めて、家路へと急ぎ行く頃、此處は河内の國の片邊り赤坂城の傍なる田の畔道に一人の修驗者とおぼしきが、農夫に向ひて、吾は旅路に迷ふ山伏なり。日方に暮れぬ。此わたりに弓矢取て名高き勇士あらば、今宵の宿泊を乞はんと思へば、今宵の宿泊を求めたし。幸に敎へ給へと問ふ。農夫答へて、此より程遠からぬ處に、赤阪といふ城あり。城主楠多門兵衛正成は、知仁勇を兼ね備へたる英雄にて、近郷近在に其譽れ最と高し。城門に楠樹の大木の茂れるを目標として尋ね給はゞ、必ず宿泊を貸し申すべしといふ。修驗者大いに喜びて、敎へらるゝまゝ頓て赤阪城に至り、一夜の憐みを乞ひければ、楠氏の家臣出で迎えて客室に請じ、厚く饗應して休息せしむ。時に夜方に二更に及び、擊柝の音響きて城内

閑として人定りける折柄、主人正成出で丶初對面の挨拶を終り、諸國遍歴の物語りなど承はりたしと述ぶ。修驗者曰く某は京師より、那智、金峯、葛城等の山々を越えて此地に來りし者なり。正成の曰く、果して然るか、京師の近狀如何、願はくば聞くことを得ん、曰く京師此頃専ら傳ふるところに據るに執權高時暴虐恣睢至らざるなく、天怒り人怨みて亡滅遠きにあらじと云へり。惟ふに今の時に當り、一人の豪傑忠義の旗を揚げて、勤王の師を起すものあらば、足下また速かに之に應じて、義兵を起し、上、皇上の宸襟を案んじ奉り、下、萬民の疾苦を救はれんや否や。正成襟を正ふして曰く、北條氏累葉天下の管領となり、年所を經ること百九十餘年に及び、權威益々盛んなり。若し無謀の師を動かすものあらば、石を抱いて淵に臨み、薪を負ふて火に向ふが如し。誰れか又か丶る愚なる企を爲すものあらんや。修驗者の曰はく、然らば一天萬乘の君、斧鉞を執つて、征討の軍を出たし給はゞ、足下官軍に應じて、北條を討たんか、將た賊軍に就きて、王師に抗し給はんか。正成頭を低れ、默して答へず。修驗者重ねて問ふて曰はく、足下忠義の志ありと雖も、思ふに謀計の漏洩せんことを恐れて、深く自ら包める丶にあらずや。正成修驗者を睨み一喝して曰はく、汝は鎌倉の間諜、陰に來つて我れを探るものにあらずやと。是に於て修驗者その負ふところの笈を開き、一ツの箱を出して、正成に向ひ、足下某を疑ひて間諜なりと思ひ、本心を明されざるも亦謂れなきにあらず。幸に此の一軸を見て疑念をはらさるべしとて、箱の中より一旒の旗を押開きて正成に視せしむ。正成驚きて之を視るに、金銀を以て日月をうちたる赤白二旒の旗なれば、正成遙か末座に下つて平伏す。修驗者曰はく、そも此の御旗は、朝敵退治の折、陣中に立られたる日月の御旗なり。かくても足下なほ我れを疑ふや否やと。正成謹みて答ふらく、か丶る尊き御旗を持ち給へる御身は、そも又何人にてましますか、修驗者曰はく今は何をか匿しはべらむ。吾

れこそ藏人督右少辨俊基なり、主上高時を滅ぼさんと謀り給ふにより、地形の要害を探り、且つ諸國の豪傑をかたらはん爲め、身を竄し、姿を易えて、此地に來れるなり。足下勤王の爲に身を盡し、忠義の志を勵みなば、主上の御悦び如何にあらせらるべき、ゆめ疑ふことなかれと說きすゝめしかば、正成明朝を待つて決答すべしと告げ、一禮して退きぬ。

夜既に明くれば、楠家の群臣かはる〲出でゝ、俊基を饗應す。暫くして正成又たいでゝ席につき、問ふて曰はく、主上果して北條征討の師を擧げ給はば、誰れをか大將軍に任ぜらるべき、曰く二品護良親王は才勇共に超倫にて在せば、大將軍の位に就かせ給はんとせらる。且つ播磨の赤松則祐、錦織判官代、足助次郎兄弟等みな已に謀畧に與みしぬ。某此度近畿諸國を經歷して、笠置の要害を見認たれば、主上やがては此地に引籠り給ふとあらん。その時便を以て足下を招かんに、遲滯なく參上せらるべしといひければ、正成謹みて承命の趣きを答へ、主上若し勅を下して某を召し給はゞ、直に笠置に至りて、拜謁し奉り、忠義の赤心を披瀝して王事に盡瘁し、縱ひ身を矢石の間に殞すと雖も、必ず朝敵を亡ぼして、王政復古の盛典を見ずんば止まざるべしとて、密に彼の南木の御夢の計を謀しあはせければ、俊基大いに感じて謂へらく、天子既にかゝる智勇の名將を得給ふ上は、高時を誅滅せんこと掌を反へすよりも易からんと、尙ほ種々の謀計を示し合ひて復び身を修驗者の姿に竄し、袂を分つて赤阪城を去る。

さても俊基卿と楠氏とは、斯くて宿世の緣にしや結ばれけむ、他日正行が情によりて、危うき難儀をすくはれたる辨内侍は、則ち俊基卿の息女なり。

（二）　葛原が岡の秋風

然るに天未だ定まらず、時運尙ほ至らざりしか。無禮講にかこつけて、夥多の武士と結托しつゝある程に、端なく土岐賴員の過失より、秘謀洩れて鎌倉

に聞えければ高時大に驚ろき、直に資朝俊基兩卿を喚下して、自ら糺斷し、遂に資朝卿をば死一等を宥して、佐渡ケ島に流刑に處し、俊基卿は許されて無事に都に歸りければ、朝廷の百官やうやく安堵の思を爲せしが、幾干もなく關東調伏の事洩れ聞えて大法秘法を修したる法勝寺の圓觀上人、小野の文觀僧正等召捕られ、俊基卿また此事にかゝつらひて、復び關東へ送られけり、古來再犯は決して法の免さざる所なれば、途中にて亡ぼさるゝか、また鎌倉にて斬らるゝか、孰れかの中なるべしと、思ひもうけて出でられける心の中ぞ哀れなる。落花の雪にふみ迷ふ片野の春の櫻狩り。紅葉の錦を着て歸る嵐の山の秋の暮。旅路となればものうきに、恩愛の契り淺からぬ、わが古郷の妻子をば、行衛も知らず殘し置き、年久しくも住馴れし、九重の帝都をば、今を限りとかへり見て、思はぬ旅に出で給ふ。心の中ぞあはれなると、人口に膾炙せる古文詞はこの時のことを云ひたるなり。かくて日數つもりて鎌倉に着きければ、諏訪信治といふ武士にあづけられ、頸かせ手かせを入れられて、蜘手きびしき一間の中に押籠られける。

程もなく愈死罪と定まりて、近日の中に首切らるべしと聞えけるに、俊基卿かねて多年の所願あつて法華經六百部を讀誦せんとの志あり、此時尚二百部殘りたれば、滿願の曉まで、生命を延べんことを乞ひしに許されしが、日數廿日ばかりたちて、望みの如く六百部を悉く讀誦し了られければ、今は世に思ひ殘すことなしとて、怪しげなる張輿に載せられて、受刑の場所と定まりたる葛原が岡に送られ、大幕を引て敷皮の上に坐らせらる。是時俊基卿の家臣後藤助光といふ者警護の武士に乞うて、俊基卿に對面し、北の方の御文を懷中より取り出だして差上げければ、俊基卿そを讀みも終らず、文を顔に押當てて、聲を揚げてぞ泣給ふ、しばらくして、やうやく涙をおさへ、硯やあるといひ給ひ、筆とりて北の方の文うらに認め給ひ、また小刀を借り、鬢の髮を少

し切りて、文に卷きそへ、助光に渡し給ひぬ。去る程に時や〻移りければ、今ははやこれまでなりと、疊紙をもて首のまはりを押ぬぐひ、其紙に

古來一向。無死無生。萬里雲盡。長江水清。

と書き記し、筆を置いて、鬢の髮を撫で給ふ程に、太刀影うしろに閃きて、首は前にぞ落にける。

助光泣く〵〵むなしき骸を抱きあげ、化粧阪なる禪院に入り、寺僧に賴みて、荼毘一片の煙となし、遺骨を拾ひて首にかけ、都に歸りて、北の方に委細を報じ、かの鬢の毛に御文の返へしを添へて、差出だせしに、北の方はあまりのことに聲さへ出です、其のま〻椽に倒れ伏し、前後不覺に泣き給ふ。

かくてあるべきにあらざれば、助光さま〵〵慰めて、遺骨を佛間に移しまゐらせ、朝夕の香花供養怠りなかりしか、いつしか四十九日となりぬれば、北の方は綠の黑髮を剃りおろし、墨染の袖に身をやつし、柴のとぼその明け暮れに、亡き夫の菩提を弔らひて、讀經に餘念なかりしとぞ。

（未完）

マダム、ド、スタエル

菊地雪子

十八世紀の末より、十九世紀の始めには佛國の女流文學者數多あらはれ出で〻、いづれも桃李の妍を爭ふが中に、ひとり梅花の色あでやかに、淸き香を發するがごとく、けしうも榮ある名を今に傳へたるはマダム、ド、スタエルなり。父君はルイ十六世の御代に大藏大臣を勤め、王の信用、時世のおぼえめでたかりし人、母君はスザンヌ、ド、ラナッスと呼びてスイス國の生れ、熱心なる新敎徒なりき。妹脊の契り淺からぬ其の間に、女子一人擧げたれば、ゼルメヌと名づけ、いと大切にかしづきけり、母君は博學多聞の賢母、智識優れたる貴婦人におはせしかば、わが掌中の玉として稚より自ら敎育し給ひて、讀書習字などを、まめやかに授け給ひたり、さなきだに一を聞きて十を知る怜悧の孃は驚くばかり天才を磨けり、不斷母君の側に侍りて、言ふこと、する

ことに意を注ぎ、客人の集ふときも、其が内にまじらひ、小椅子に腰うち掛け、さ夜ふくる迄、人の話を聞きてこよなき樂とせり、すべてを、母君の應接せらるゝに摸ひて、少女に似合はしからぬ語をさへ交ゆるに、孃は不世出の英才兒よと人々感せり、されば栴檀は二葉より香ばしとかや、十歳の時、學者と討論してはやくも神童の名高かりき。

詞才饒なるにかてゝ加へて、嚴格なる父君と賢明なる母君に生し立てられしかば、速かに天資の才能を發輝したりき、ふり分髮肩すぎぬ十二才の年に孃は狂劇を草し、十五才の時、自在にモンテスキウ氏の大著書を講讀せられたり、父君が國庫の財政を奏上すべく、宮中に候ひし折、孃は匿名の手紙を送りたるが、其の理路の明斷、筆致の流暢なりしより、やがてわが名を知られたり。

專ら文學をのみ嗜みて、學識の進歩著しかりしを父君母君は却て身の病を釀さんことのありては恐ろしかるべしと、閑靜の地に暫し赴かしめたり、自然の美をつくせるこの田舍の風景も、少女の意をえ奪ふべからず、此等の閑居の月日の間、ルーフーが著書を讀みて、堅忍の意を養ひ、リシャルソンの詩集を友として、詩的思想を盛にせり、家に歸れば、世の貴顯紳士、はては學者達、みなネッケル孃を訪なひ、詩文に時事に、時の移ふを譽とせり、いと澤澤しく房々したる髮を肩にふり分け、秋の星にも似たる清き眼、廣き額、唇輕く結びたるは怜悧と親切との資を表はせり、兩腕と襟をば衣もて覆はず、輕裝うち着たるさまは天つ乙女のそれの如く、リボンはさつと風に飜り、風姿楚々として品格いや高きはこれぞネッケル孃の寫生なる、快活、人に愛せられ同情に富み、談話爽かにして、長き時の間も、人をして倦厭せしめたることのあらず。

一千七百八十六年スイス公使にして、パリーに駐在せしド、スタエル男爵と伉儷の契を結びて平和の家庭を作りたるは、僅に十年なるに、三人の子まで生みしものを、いかなる魔の隔てつらん、別居して

六年の間たゞ脊の君の病みませるを聞きて、夫人看護に赴き、あらゆる手を盡せしも遂に死の影の追ひ來るを、之逃がす能はざりき、かくて夫人は寡婦となりぬ。

ナポレオン一世が政府を顛覆したるを憂ひて、夫人はなほも總督政府の恢復を希ひしかば英偉の君はいつも夫人をば、蛇蝎の如く忌みて、國外に放逐せられければ、スイスより魯西亞英吉利などに流浪し配所に在るも文學に意を寄せて、大なる著述をし、歐洲に名を轟かしぬ。

コッペーの城中に在りて、あまたの侍女にかしづかれ、げに一かどの女王なり、學者を集ひて時事を討論すれども、空澄み渡る月の夕、パリーの市街をそゞろありきするは、夫人にとりてなほ樂しかりき。

那帝廢位となりし時、夫人やうやく戀しき都に歸るを得たるも、政權回復の曉に、またも遠く放逐せられぬ、國々を流浪する間、伊太利にて病を得、パリーに歸りし頃、はや著述に、羈旅に、心身を疲勞したれば、五十九才の齡を以て永眠せられぬ。

夫人はひたぶるに年の老ゆるを愁ひて常に「若かりし時」と、人に語りて眼に涙の玉を浮べり、木枯すさぶ四十五才に、人知れず、己れより若きこと十歳許なる、近衞騎兵ド、ロッカに戀愛せらるゝことの嬉しくて、反り咲き櫻の花の色香ばしく匂ひたり、

夫人は博覽强記の著述家にして、文才溢るゝが如く二十才にしてソヒーの狂劇とジャヌ、グレーの悲劇を作りて、其の名高かりき、著書は他方面に渡れども特筆すべきは獨の文學と題する書にして其が中には哲學、文學ありて、獨の文學の一斑を覗がはしむるに稗益多き讀み物なり。

夫人は常に筆とる業を怠らず、その論ずる所、沈痛なりしを以て世論を惹起し人心を煽動せんことを恐れ深く那翁皇帝に忌れ追放の身となりしぞ遺憾なる、されど夫人はかゝる悲境に處して文壇に大功を樹てたるは、實に多とするに足るべし。（完）

學藝

昔がたり

文學士　濱田紅於

婦人女子の本能が、進取的なるか退嬰的なるかは、予の恒に疑へる所なり、世の大方の婦人は退嬰的なるが如くなれども、往々嚢中の錐穎脱して、男子と相駢逐し、或は男子をして下風に瞠若たらしむるものもあり、予益々疑なき能はざるなり、頃日聊か古典を繙いて、私に思ふ所あり、然れど管見の及ぶ所は、實に九牛の一毛に過ぎず、淺陋の説大方の嘲罵を被らむは、固より覺悟の上なり。

苟も國史を學びたる人は、高皇産靈神、神皇産靈神の併稱せらるゝことを知らむ、而して高皇産靈神の功業は、史上に赫々たるにも拘らず、神皇産靈神の事蹟は、落莫として少しも聞ゆるなし、これ果して事實なるか、古語拾遺の註によれば、此二神別に神漏伎命神漏美命と云ひて、高天原の八百萬の神達を神集に集へ、神議に議りて常に天照大神を輔佐しまつりて、大に畫策する所ありしは、祝詞を讀みしものゝ熟知する所なり、然らば神皇産靈神の功勞は、決して高皇産靈神に劣らざりしなり、然るに史乘これを載せざるは何故ぞや、古哲の說く所を視るに、神漏伎の伎は男稱、神漏美の美は女稱にして、伊邪那岐神伊邪那美神も同樣に解釋すべし、然らば高皇産靈神は男神にして、神皇産靈神は女神なりしなり、加之古典にはこの神相續いで高天原に生れましゝやうに記せども、能く熟讀反覆すれば、二神共に同時に生れまして、妹脊の契をさへ結び賜ひしが如し、されば神皇産靈神は夫神を輔けて、天下の經營に勞し賜ひしなり。

伊弉冊神（伊邪那美神）の御勤勞は更に大なるものあり、抑も伊弉諾神（伊邪那岐神）は高天神に生れまし、伊弉冊神の故鄕は根堅洲國（出雲地方）なりしが、此二神磤馭盧嶋に八尋殿を建て、比翼連理を契りたまひ、以て夫婦の別を制し賜ひしは更にも云はず、其豐葦原瑞穗國を開拓し賜ひし功は、實に偉大ならずや、しかも此偉業の半は伊弉冊神の威望によりし也、伊弉冊神病を以て故鄕に退き賜ひ、伊弉諾神これを慕ひゆき賜ひし時、八雷神のこれに從へりしと云へり、是れ警衞の嚴重なりしにあらずや、伊弉諾神畏れて逃還ります時、伊弉冊神怒りて八雷神に千五百の黃泉軍を副へて、これを追はしむと、然らば伊弉冊神の部下には、八人の雄將と千五百の貔貅とありしなり、其後二神復相和解して國土經營を續けたまひぬ、故に伊弉諾神の根堅洲國を訪れしは、獨力を以て其天職を盡すこと能はざりしを以てに非ずや、經國の偉勳は二神甲乙なきなり、その御子天照大御神の靈德に至りては、億兆の旣に知悉する所なり。

先哲或は天照大御神を以て男神となすものあれど、予は古傳によりて女神となすなり、此神光華明彩六合の内に照徹しゝかば、父神高天原を治めしめ賜ひぬ、その仁天の如く、能く衆物を容れ賜ふ、その寬洪の德は素盞嗚尊の惡虐を怒り賜はざりしによりて察すべし、その暴横益甚しきに及んで、遂に天石屋戸にさし籠ましゝかば、高天原皆暗く、萬の妖悉くおこりき、されば此神の存否が高天原の治亂に關すること大にして、其治化宣敷の程をおしはかるもいとかしこき極なりけり、かの天安河原の會議、天石屋戸の神樂に思ひ及ぶ毎に、吾人は天照大御神が如何に天下の人心を得て衆庶の奉戴する所となりませしかを、咏嘆せずんばあらざるなり、誠に此神は天下の中心なりき、天下のこれを瞻仰すると、衆星の北辰に向ふが如く然り、其政事を行ひ賜ふや、公明正大疎暢洞達、君臣の義と親子の親とを敎へ賜ひ皇御孫尊に對しては、智仁勇を以て下に臨むべく、

衆民に對しては、物を開き務を成して上に奉ずべきを誡めたまひぬ、本邦國體の源づく所、倫理の起る所、開化の始まる所、皆此大御神に在り、他邦此大御神に比肩しうべきものありや。

これを根堅洲國にて觀るに、かの大已貴神を艱難流離の間に救ひて、出雲族の基礎を固めしめ、遂に高天原と相拮抗するに至らしめしは、其嫡妻須勢理媛の功にあらずや、これを天孫降臨以後に觀るに、天孫族と大山祇族（南海に在りき）とを連絡せしめて、そが皇祖の勢力を增せしは、木花咲耶姫の力なりき（姫は大山祇神の女にして彦火瓊々杵尊の妃となりぬ）、又海國をわが皇祖の援となして、隼人族の勢を拉ぎしは、豐玉姫の績にあらずや（姫は海神豐玉彦の女にして彦火々出見尊の妃なりき）、かくて天孫族は異族と相連絡し相融和して、勢威を張りしのみならず、開化の度も亦其間に漸進しつゝありしなり。

群神の中往々女丈夫の輩出せしことありきかの天鈿女命は嘗て云ひし如く、手弱女なれども、いむかふ神面勝神と稱へられ、資性強悍猛固にして、雪に撓まぬ檜梅の、男子はづかしき女丈夫なりき、かの天石屋戸の變あるや、思兼神の深慮遠謀ありとも、鈿女命が誓槽踏みとゞろこし巧に倡優を演ずるにあらずば、いかでか日神の御心を和げんむや、天孫降臨の途すがら、猿田彦命の天八衢に立てるや、英姿颯爽、陪從の諸神相見ること能はず、すなはち鈿女命は天孫の勅のまに〱、ゆきかひてこれを詰る、その言辭風發卓厲、遂にこれをして嚮導たらしめたり、初め猿田彦命の素志や測るべからず、これを天孫に服從せしめしは、鈿女命の功ならずや、後この二神は伊勢國に赴きて、猿女君の祖となりぬ、後世垂仁天皇が天祖神器を五十鈴川上に齋き賜へりしは始め天上に在りて豫め幽契を結びしなりと、古語拾遺は云へり、以ある哉。

この他諸々の功ありし女神を數ふれば、栲幡千々姫命は機杼を製りて織物を創め、大宜都姫命（保食神

と同一神か）天八千々姫命は耕作養蠶を掌りき、石凝姥命は天香山の鐵をとりて鏡を鑄り、鏡作部の遠祖となりぬ、その鏡こそ即ち八咫鏡なれ、抑々我が大倭の國は行事を以て名に負はす國なりと、敬行天皇の勅り賜ひつと、高橋氏文の云へれば、勲功ありし女神達を古典に求めなば、筆紙に遑あらざるべし、こゝにはその著しきもののみを擧げつ。

我邦太古の婦人は、かくの如く國家の進運に關し、開化の遷移に參したりき、日の本は岩戸開けし昔より、女ならでは夜の明けぬ國とは、常に講談者の口にする所なれども、よく咀嚼すれば、太古の史質を示せるものゝ如し、帳臺の奥に隱れて、方丈の深窓を天地とするが如きは、必ずしも婦人の本性にあらざるべし、人各盡すべきの務あり、守るべきの德あり、能くその則を踰えずして、その務を盡すこそ、眞の淑女貴婦人と云ふべけれ、人生莫ㇾ作二婦人身一、百年苦樂由二他人一、今後の婦人此耻辱を雪ぐに努力せざるべからず。

予の感じたる婦人の歌（第一）

林天然

歌は敷嶋の道とかいひて、貴きも賤しきも、男も女も、古今を通じ、此道をたのしむ者は尠くない、これが爲め出世した者もある、人の心を和らげた者もある、自ら浮世の無常を慰めた者もある、或は名を擧げた者もあつて、歌の德といふものは、時によつては非常の功力を生ずるのである。で何方かといふと、婦人は男子に比べるに、何うも歌をよむ者が尠ない、けれども若し歌心があると、婦人の頭腦は緻密であるから、なか〳〵旨い文句が出る。予は歌學に志してる者ではないが、平常讀んで佳い歌を獲ると頭中に藏ッて置いて、折々うたひ出しては味ふて居る、所で予が感じて頭中に藏ッてある歌を本號から順次揭げることにした。而し敢て珍ら

しいといふのでなく、概ね廣く世にありふれてるものであるから、少くも歌書を手にした者は大抵知ッて居らうと思ふ。けれども讀者の中には、適切なる學科を勵みて、まだ歌にまで學び及ばない女學生も有うし、早くも世業に從事してる田舍娘も有うし、又年とッた婦人でも、歌を樂む程の境遇を得なかッた者も、大分ムらうと考へられる。それ等の人々の爲め、特に一讀に供へる積りである。但し以下揭ぐる歌には、さして上出來といふのではないが、予が其人物の高風清節を敬ふの餘り、歌まで愛したのも少しはある。又白拍子、遊女の如き卑しむべき賤も、其歌が如何にもよく出來て、捨つるに忍びないものは、一所に收めてある、これらは、豫め讀者の賢諒をこふて置くのです。

我邦古來美人も多かッたが、衣通郎姫の如きは、實に美人中の美人、佳人中の佳人であッたであらう。

姫は仁德天皇の御弟、稚渟毛二派皇子の第二女で、允恭天皇の皇后忍坂大中姫の御妹、初めの名を弟媛といひ、其美しいことは、衣も透きとほるかと思はれる程であッたから、衣通郎姫と稱へられた。で天皇の御寵愛を受けたが、御姉君を憚りて河内國に住まはせられた。

とこしへに、きみもあへやも、いさなどり
　うみのはまもの、よるとき〲を

これは天皇が河内へ御幸のあッた時、姫が喜びの餘り詠じたので、叡感なゝめならず、益々御寵愛されたといふことである。

姫は唯に容姿が優美で、婦人の道に篤かッたのみでなく、歌學に於いては後世の人々に尊慕されてるのである、紀伊國なる玉津嶋明神は、即ち姫を祀ッた社である。

唐土の山のあなたにたつ雲は
　こゝにたく火の烟なりけり

これは嵯峨天皇皇后の御詠である。皇后御名は嘉智子、贈大政大臣橘清友（奈良麿の嫡子）の御女であッて、御幼年の時から悧發で、そうして御容姿も麗はしかッたといふこと。で深く文學に心を入れられ、弟右大臣氏公とはかり、學舘院といふ學舍を建て、諸氏の子弟を勸め、經書を修めさせた事は、歴史上著名である。又佛法を信じ玉ひ、嘗つて檀林寺を建てたから、檀林皇后とも稱えられた。仁明天皇、淳和皇后、秀良親王、秀子内親王、俊子内親王、繁子内親王、芳子内親王、皆皇后の生ませ玉ふ方々である。

唐の名僧齊安國師は、皇后の御詠を聞き、非常に感賞したといふことである。

まれに來てとふもさびしき松風を
　常にや苔の下に聞くらん

○

苔の衣雪解の水にすゝぎても
　袂ゆたかにひるひまぞなき

前者はこれ蓮絲で曼荼羅を織ッて有名なる中將姫の歌である。姫は聖武天皇の頃の人、右大臣横佩豐成の女で、早く母親に後れ、年猶少きとき、禁中にて箏を奏し、中將と名けられたが、繼母の爲めいふべからざる辛酸をなめ、其上殺されやうとしたのを、雲雀山に匿れて漸く命を拾ッたのである、後尼となり善心尼と號し、更に妙法と稱え、一生佛道を樂んで終ッた。

後者はこれ、孝道を以て聞えたる橘妙の歌である。妙は但馬權守橘逸勢の女、幼弱のうち、父を失ひ、尼となり、妙冲と號し、佛陀につかへて、一生をおくッた。

兩歌共よんで誠にさびしく感じられる、これ境遇の然らしむる所と想ふと、益々憐れな觀念が起る。

我袖にかゝる涙をとめ置きて
　船はのどかにてぎやゆくらん

○

旅人の宿りせん野に霜降らば
　わが子はこくめあまのつるむら

前者はこれ、成尋法師が、遊學生となり、唐國に出發した時、其母がよんだ歌。後者は平郡廣成が遣唐使となッて、唐に赴かんとした時、其母がよんだのである、子を思ふ親心が、如何に尊く切なるか、翻ッて思へば、親のない子ほど憐れ薄運の者はない。妙法や妙沖の心事察しられる。

濁りなき龜井の水を結びあげ
　心の塵をすゝぎつるかな

○



時鳥こゑまつ程は片岡の
　杜の雫にたちやぬれまし

前者はこれ、一條天皇の中宮上東門院が、攝津國龜井の水を詠じた歌である。上東門院の御名は彰子、大政大臣藤原道長の第一女である、容姿頗る麗はしく、頭の髮が身の丈より二尺も長かッたといふこと。十二歳の時宮中に入り、後一條天皇、後朱雀天皇を生ませられた。女院は平常文學を嗜んで居ッたから、文才のある女流が一時に輩出した。彼の紫式部、和泉式部、小式部内侍、清少納言、赤染衛門、伊勢大輔等は、其著しき者である。後者はこれ、源氏物語の著者として有名なる紫式部が、山城國片岡にてよんだのである。式部は越前守爲時の女で、右衛門佐藤原宣孝の妻となッて、大

貮三位を生んだ。後上東門院に召されて其師となッた。式部の才學は古今にすぐれ、又其節操の堅かッたことは、當時位人臣を極め、榮耀榮華に溢れた關白道長（第一女は一條天皇の中宮、第三女は後一條天皇の中宮）の望を拒み從はなかッたので知れる。

古の奈良の都の八重櫻
今日九重に匂ひぬる哉

○

いかにせん都の春も惜しけれど
なれし東の花や散るらん

前者はこれ、伊勢大輔が上東門院に仕へんとて、始めて宮中に參ッた時、偶々八重櫻の花を上げた者があッた、關白道長側にあり、其櫻を大輔が前に差出し、何の位の歌心があるかを試みたから、即席に詠んだのである、素養があるとはいへ、なか〳〵の上出來である、大輔は伊勢祭主大中臣輔親の女で、高階成順の妻となッた。

後者は遠江國池田なる娼家の女熊野が、內大臣宗盛に愛せられて京都にあり、或日清水寺の櫻見の宴に伴はれたが、何故か獨りさへざへしなかッた、宗盛これを怪しみ熊野に對ッて、其故を問ふたから、熊野は早速此歌を詠じ、暗に老母の慕はしき意を諷したのである、宗盛も憐れと思ひ直に暇を遣はしたから、喜んで鄉里に歸り老母を養ッた、熊野は身分こそ賤しいが、歌は餘程好きとみえ、壽永三年平家の一族西海に敗れ、宗盛は擒へられ、東國に下ッた其時熊野は「諸共に思ひ合はしてしぼるらし、東路にたつ衣ばかりぞ」と詠んで慰めたといふこと。

「古の奈良の都」の歌は陽で「いかにせん都」の歌は陰である、前者は進歩で、後者は退歩である。同じ花ながらも時と人によッて感じが違ふ、月も雪も必ず其通りであらう。



TRANSLATION OF JAPANESE INTO ENGLISH.

By. A. Miyamori.

和　文　英　譯

No. 1. 虎

虎は朝鮮及印度の山林に棲めども日本には昔より居らず。其の毛は黄色にして黑き斑あり。身の長け六七尺高さ四尺餘にして骨組甚逞しく口の邊に硬き鬚ありて自から威風あり。一たび嘯けば百獸恐れて息をも出さず。

The Tiger.

Tigers are found in the mountain forests of Corea and India but from antiquity no tigers have been found in Japan.

The tiger has yellow fur with black stripes. He is six or seven feet in length and a little over four feet in height, and he has a very strong body and a commanding appearance with tough whiskers about his mouth. When he roars, all other beasts will hold their breath in terror.

Notes.

1. 廣く虎の事を指すときは The tiger; tigers 何れにてもよし。
虎は猛き動物なり。
{Tigers are fierce animals.
{The tiger is a fierce animal.
2. to live と云ふ語は動物の場合には用ひず故に Tigers live in Corea. と言ふべからず。
Tigers are found in Corea. 或は we find tigers in Corea. とも言ふことを得べし。
3. from antiquity は from ancient times にてもよろし。
4. whiskers は頰鬚なり鼻下の鬚は mustache (マスターシ) 顎鬚は beard なり。
5. 百獸は「他の獸類悉く」と云ふ意味なれば百と云ふ數字に拘泥すべからず故に A hundred beasts 抔と譯するは非なり。

6. 虎や獅子の如き猛獸には男姓代名詞 he を用ひ猫や羊の如きものには she を用ゆ。I have a big cat. Her name is *Tama*. 又 dog には he を用ゆ I have a hunting dog. His name is Carlo.

MAXIMS AND PROVERBS.

格言及俚諺

1. Deep rivers move in silence, shallow brooks are noisy.

深き河は靜に流れ淺き小川は騷がし。(そこひなき淵やはさはぐ山川の淺き瀨にこそあだ波はたて)

2. True merit is like a river: the deeper it is the less noise it makes.

眞の才能は恰も河に似たり深ければ深いほど其音小なり。

3. A thousand cranes in the air are not worth a pheasant that flieth by.

空中を飛ぶ千羽の鶴は傍らに飛ぶ一羽の雉に劣る。

4. It is better to do well than to say well.

能く行ふは能く言ふにまさる。





主婦と家庭

鳩山春子談話

記者このほど鳩山夫人を其音羽の邸に訪ひ、婦人に關するいろ〳〵の所見を聞きました。夫人は突然坐感を話されたので、區々であるからといはれたのを、無理に乞ふて、此に其二三を掲ぐることゝしました。

主婦の心得に於いて、尤とも大切なる事は善き家庭を作ることにあると思ひます。

よき家庭を作るは、どうしたならば可いか、私は家庭が温いといふことになれば、可いと思ひます。家庭は、家族の樂園で、また其安息所であるのでありますから、此處に居るときは、十分安々として居られる温い場所であることが必要であります。

どれほど、家は美しく立派であつて、飾付けが行屆いて居りましても亦如何に美味美食に飽きますとも若し其家庭の中が温くなくて、いはゞ別々の空のやうでありましたならば、善い家庭とはいはれませぬ。

これは、丁度立派なる宿屋の座敷に居り、贅澤なる宿屋の食堂に座するやうなもので、些とも此處に棲む

ものに慰藉、快樂、平和、滿足といふものはありますまい。これ等は、ホームを成さないといつて可いかと思ひます。

或は平和ではありましても、單に各人の集合生活場であるといふやうなものも、亦ホームではないのです。

それでありますから、家庭は温いといふのが其生命です、而して温くしますとは、ドンナにするのでしようか、私はこれを次の如く思ふのであります。

思ひ遣り

家族相互に、思ひ遣りといふものがあり度ものであります。思ひ遣りといふことは、他の言葉でいひますと同情といふことです。

互に凡てを思ひ遣れば、其處で、斟酌といふことが出來、從つて、假令其人に過失があつても、之を許し之を憐むことが出來るのです。其人の事柄は、自分の事柄のやうに感じて、患も之を分ちて共に憂ひ、樂しみも之を分ちて共に樂しむといふことになるのであります。

そうでありましたならば、一家は靄々として温い風が立つて、外から來る不平と勞苦と、此所に於いて温い同情で、慰藉されます。故に思ひ遣りはホームの要素だと思ふのです。

知己（親友又は友）

互に、思ひ遣つて居ると共に、互に知己であることが必要です。知己でありませんと、其思ひ遣つて同情を寄するにしても、可い結果が得られないのです。

一人が何か考へて居ても、それは何故である乎が分らなければ、同情を寄することが出來ないです。又

りません。

一人が如何なる性質である乎それが分らないでは、その人に對して、どういふ風に同情を寄せて可いか分りませんから、相互に距てのない眞の知己、いひかゆれば良友であつて凡べてを克く知つて居るといふことが、甚だ必要であります。

彼は、彼自ら知つて居れば可い、我は我自ら知つて居れば可いといふことでは、到底同情も起りませんし、同情を寄せ合ふことも出來ませんから、互に能く知合ふた良友といふことが家庭を溫くする上に於いて、一二を爭ふ要件であると思ひます。

信用

家族は、その互々に信用を繼ぐことが可いことであります。互に心を許し合ふて、自分の心に少しの疑念を起さないことが要用です。

勿論無暗に他人を信用すると、時としては、とんでもない間違がありますが、最も近い同胞即はち家族相互間には、恁んなことは滅多にないやうにならねばなりません。互に克く其爲人を知ると共に互に信用を以て相交はり、夫は妻を信用し、親は子を信用して、些しも其處に疑惑の如き或は策略の如きことの餘地のないのが必要なることです。

かくなりますと、互に克く心を許し合つて居ることが、其美しい天然の性質のやうになりまして、不平の起ることもなく、非難の起きやう筈もないのです。

平和を壞はしまする不平とか、口論とか、いひまするものは、皆此信用を以て相對することをせないで些々たる事にも疑念を起して、互に怨望するとか、又は自分の利益幸福より打算して他の行爲を判斷する

からです、これ等は、誠に互の我儘勝手より起るものと思ひます。

最大なる幸福

詮る所、家庭も亦大きくいひますと國家と同じことでありまして、その幸福は互の思ひ遣りで、家人中の多數のもの丶最大なる幸福でなければなりません。

家族のものが各自に別々の考へを持ちて更に一致せぬ家庭は、決して幸福を享ることは出來ません。此點に於ては、特に主婦たるものは常に中心になつて、連鎖を計る可きであります。主婦たるものは家庭多數のもの丶幸福の爲めには自分の幸福を犧牲にする事を樂しむ覺悟がなければならないと思ひます。

人間生活中に於いて、最も幸福なる人は自分が役に立つこと、善を爲し得ること、自分あるが爲めに幸福を得る他あること即ち他を幸福に善良に導き得る事であります。

主婦たるものは、家人が此感を已れに與ふることを心に喜び謝すべきであります。これと反對に人間の最も不幸なるは、利己の外に毫も考へ及ばぬ人、曾て同胞のために露だも考へ及ぼさぬ人、他のためには毛厘をも惜しむ吝嗇家他のためには一擧手一投足の勞をも厭ふ不人情家であります。其面は常に澁難凄愴曾て幸福の何たるを解せざる人なのであります。主婦たるものは、よく鑑みる可き事と考へます。でありますから、主婦たる人は、多方面に知識を有し、よく常識を以て判斷し同情し、家庭に思ひ遣りの氣を以て充溢せしむるこそ、望ましきことゝ考へます。

でありますから、互に思ひ遣即ち温いものを拵へて、全體の上に於ける幸福を得て、其中に各自が安安と手足を伸ばして居るのが、これが、ホームに住むもの丶最大なる幸福であると思ひます。

夫と妻

関として人定りける折柄、主人正成出で丶初對面の挨拶を終り、諸國遍歴の物語りなど承はりたしと述ぶ。修驗者曰く某は京師より、那智、金峯、葛城等の山々を越えて此地に來りし者なり。正成の曰く、果して然るか、京師の近狀如何、願はくば聞くことを得ん、曰く京師此頃專ら傳ふるところに據るに執權高時暴虐恣睢至らざるなく、天怒り人怨みて亡滅遠きにあらじと云へり。惟ふに今の時に當り、一人の豪傑忠義の旗を揚げて、勤王の師を起すものあらば、足下また速かに之に應じて、義兵を起し、上、皇上の宸襟を案んじ奉り、下、萬民の疾苦を救はれんや否や。正成襟を正ふして曰く、北條氏累葉天下の管領となり、年所を經ること百九十餘年に及び、權威益々盛んなり。若し無謀の師を動かすものあらば、石を抱いて淵に臨み、薪を負ふて火に向ふが如し。誰れか又かゝる愚なる企を爲すものあらんや。修驗者の曰はく、然らば一天萬乘の君、斧鉞を執つて、征討の軍を出たし給はゞ、足下官軍に應じて、北條を討たんか、將た賊軍に就きて、王師に抗し給はんか。正成頭を低れ、默して答へず。修驗者重ねて問ふて曰はく、足下忠義の志ありと雖も、思ふに謀計の漏洩せんことを恐れて、深く自ら包まるゝにあらずや。正成修驗者を睨み一喝して曰はく、汝は鎌倉の間諜、陰に來つて我れを探るものにあらずやと。是に於て修驗者その負ふところの笈を開き、一ツの箱を出して、正成に向ひ、足下某を疑ひて間諜なりと思ひ、本心を明されざるも亦謂れなきにあらず。幸に此の一軸を見て疑念をはらさるべしとて、箱の中より一旒の旗を押開きて正成に視せしむ。正成驚きて之を視るに、金銀を以て日月をうちたる赤白二旒の旗なれば、正成遙か末座に下つて平伏す。修驗者曰はく、そも此の御旗は、朝敵退治の折、陣中に立られたる日月の御旗なり。かくても足下なほ我れを疑ふや否やと。正成謹みて答ふらく、かゝる尊き御旗を持ち給へる御身は、そも又何人にてましますか、修驗者曰はく今は何をか匿しはべらむ。吾

れてそ藏人督右少辨俊基なり、主上高時を滅ぼさんと謀り給ふにより、地形の要害を探り、且つ諸國の豪傑をかたらはん爲め、身を窶し、姿を易えて、此地に來れるなり。足下勤王の爲に身を盡し、忠義の志を勵みなば、主上の御悦び如何にあらせらるべき、ゆめ疑ふことなかれと說きすゝめしかば、正成明朝を待つて決答すべしと告げ、一禮して退きぬ。

夜既に明くれば、楠家の群臣かはる〴〵出で、、俊基を饗應す。暫くして正成又たいで、席につき、問ふて曰はく、主上果して北條征討の師を擧げ給はば、誰れをか大將軍に任ぜらるべき、曰く二品護良親王は才勇共に超倫にて在せば、大將軍の位に就かせ給はんとせらる。且つ播磨の赤松則祐、錦織判官代、足助次郎兄弟等みな已に謀畧に與みしぬ。某此度近畿諸國を經歷して、笠置の要害を見認たれば、主上やがては此地に引籠り給ふとあらん。その時便を以て足下を招かんに、遲滯なく參上せらるべしといひければ、正成謹みて承命の趣きを答へ、主上若し勅を下して某を召し給はゞ、直に笠置に至りて、拜謁し奉り、忠義の赤心を披瀝して王事に盡瘁し、縱ひ身を矢石の間に殞すと雖も、必ず朝敵を亡ぼして、王政復古の盛典を見ずんば止まざるべしとて、密に彼の南木の御夢の計を謀しあはせければ、俊基大いに感じて謂へらく、天子既にかゝる智勇の名將を得給ふ上は、高時を誅滅せんこと掌を反へすよりも易からんと、尙は種々の謀計を示し合ひて復び身を修驗者の姿に窶し、袂を分つて赤阪城を去る。

(二) 葛原が岡の秋風

さても俊基卿と楠氏とは、斯くて宿世の緣にしや結ばれけむ、他日正行が情によりて、危うき難儀をすくはれたる辨內侍は、則ち俊基卿の息女なり。

然るに天未だ定まらず、時運尙は至らざりしか。無禮講にかこつけて、夥多の武士と結托しつゝある程に、端なく土岐賴員の過失より、秘謀洩れて鎌倉

に聞えければ高時大に驚ろき、直に資朝俊基両卿を喚下して、自ら糺斷し、遂に資朝卿をば死一等を宥して、佐渡ヶ島に流刑に處し、俊基卿は許されて無事に都に歸りければ、朝廷の百官やうやく安堵の思を爲せしが、幾干もなく關東調伏の事洩れ聞えて大法秘法を修したる法勝寺の圓觀上人、小野の文觀僧正等召捕られ、俊基卿また此事にかゝつらひて、復び關東へ送られけり、古來再犯は決して法の免さざる所なれば、途中にて亡ばさるゝか、また鎌倉にて斬らるゝか、孰れかの中なるべしと、思ひもうけて出でられける心の中ぞ哀れなる。落花の雪にふみ迷ふ片野の春の櫻狩り。紅葉の錦を着て歸る嵐の山の秋の暮。旅路となればものうきに、恩愛の契り淺からぬ、わが古郷の妻子をば、行衛も知らず殘し置き、年久しくも住馴れし、九重の帝都をば、今を限りとかへり見て、思はぬ旅に出で給ふ。心の中ぞあはれなると、人口に膾炙せる古文詞はこの時のことを云ひたるなり。かくて日數つもりて鎌倉に着きければ、諏訪信治といふ武士にあづけられ、頸かせ手かせを入れられて、蜘手きびしき一間の中に押籠られける。

程もなく愈死罪と定まりて、近日の中に首切らるべしと聞えけるに、俊基卿かねて多年の所願あつて法華經六百部を讀誦せんとの志あり、此時尚二百部殘りたれば、滿願の曉まで、生命を延べんことを乞ひしに許されしが、日數廿日ばかりたちて、望みの如く六百部を悉く讀誦し了られければ、今は世に思ひ殘すことなしとて、怪しげなる張輿に載せられて、受刑の場所と定まりたる葛原が岡に送られ、大幕を引て敷皮の上に坐らせらる。是時俊基卿の家臣後藤助光といふ者警護の武士に乞うて、俊基卿に對面し、北の方の御文を懷中より取り出だして差上げければ、俊基卿そを讀みも終らず、文を顔に押當てて、聲を揚げてぞ泣給ふ、しばらくして、やうやく涙をおさへ、硯やあるといひ給ひ、筆とりて北の方の文うらに認め給ひ、また小刀を借り、鬢の髪を少

し切りて、文に巻きそへ、助光に渡し給ひぬ。去る程に時や丶移りければ、今ははやこれまでなりと、疊紙をもて首のまはりを押ぬぐひ、其紙に

古來一向。無死無生。萬里雲盡。長江水清。

と書き記し、筆を置いて、鬢の髪を撫で給ふ程に、太刀影うしろに閃きて、首は前にぞ落にける。

助光泣く〳〵むなしき骸を抱きあげ、化粧阪なる禪院に入り、寺僧に頼みて、荼毘一片の煙となし、遺骨を拾ひて首にかけ、都に歸りて、北の方に委細を報じ、かの鬢の毛に御文の返へしを添ゑて、差出だせしに、北の方はあまりのことに聲さへ出でず、其のまゝ椽に倒れ伏し、前後不覺に泣き給ふ。

かくてあるべきにあらざれば、助光さま〳〵慰めて、遺骨を佛間に移しまゐらせ、朝夕の香花供養怠りなかりしか、いつしか四十九日となりぬれば、北の方は緑の黒髪を剃りおろし、墨染の袖に身をやつし、柴のとぼその明け暮れに、亡き夫の菩提を弔らひて、讀經に餘念なかりしとぞ。

（未完）

マダム、ド、スタエル

菊地雪子

十八世紀の末より、十九世紀の始めには佛國の女流文學者數多あらはれ出で丶、いづれも桃李の妍を爭ふが中に、ひとり梅花の色あでやかに、清き香を發するがごとく、けしうも榮ある名を今に傳へたるはマダム、ド、スタエルなり。父君はルイ十六世の御代に大藏大臣を勤め、王の信用、時世のおぼえめでたかりし人、母君はスザンヌ、ド、ラナッスと呼びてスイス國の生れ、熱心なる新教徒なりき。妹脊の契り淺からぬ其の間に、女子一人擧げたれば、ゼルメヌと名づけ、いと大切にかしづきけり、母君は博學多聞の賢母、智識優れたる貴婦人におはせしかば、わが掌中の玉として稚より自ら教育し給ひて、讀書習字などを、まめやかに授け給ひたり、さなきだに一を聞きて十を知る怜悧の孃は驚くばかり天才を磨けり、不斷母君の側に侍りて、言ふこと、する

ことに意を注ぎ、客人の集ふときも、其が内にまじらひ、小椅子に腰うち掛け、さ夜ふくる迄、人の話を聞きてこよなき樂とせり、すべてを、母君の應接せらるゝに摸ひて、少女に似合はしからぬ語をさへ交ゆるに、孃は不世出の英才兒よと人々感せり、されば栴檀は二葉より香ばしとかや、十歳の時、學者と討論してはやくも神童の名高かりき。

詞才饒なるにかてゝ加へて、嚴格なる父君と賢明なる母君に生し立てられしかば、速かに天資の才能を發輝したりき、ふり分髪肩すぎぬ十二才の年に孃は狂劇を草し、十五才の時、自在にモンテスキウ氏の大著書を講讀せられたり、父君が國庫の財政を奏上すべく、宮中に候ひし折、孃は匿名の手紙を送りたるが、其の理路の明晰、筆致の流暢なりしより、やがてわが名を知られたり。

專ら文學をのみ嗜みて、學識の進歩著しかりしを父君母君は却て身の病を釀さんことのありては恐ろしかるべしと、閑靜の地に暫し赴かしめたり、自然の美をつくせるこの田舍の風景も、少女の意をえ奪ふべからず、此等の閑居の月日の間、ルーフーが著書を讀みて、堅忍の意を養ひ、リシャルソンの詩集を友として、詩的思想を盛にせり、家に歸れば、世の貴顯紳士、はては學者達、みなネッケル孃を訪なひ、詩文に時事に、時の移ふを譽とせり、いと澤澤しく房々したる髮を肩にふり分け、秋の星にも似たる清き眼、廣き額、唇輕く結びたるは怜悧と親切との資を表はせり、兩腕と襟をば衣もて覆はず、輕裳うち着たるさまは天つ乙女のそれの如く、リボンはさつと風に翻り、風姿楚々として品格いや高きはこれぞネッケル孃の寫生なる、快活、人に愛せられ同情に富み、談話爽かにして、長き時の間も、人をして倦厭せしめたることのあらず。

一千七百八十六年スイス公使にして、パリーに駐在せしド、スタエル男爵と伉儷の契を結びて平和の家庭を作りたるは、僅に十年なるに、二人の子まで生みしものを、いかなる魔の隔てつらん、別居して

六年の間たゞ春の君の病みませるを聞きて、夫人看護に赴き、あらゆる手を盡せしも遂に死の影の追ひ來るを、え迯がす能はざりき、かくて夫人は寡婦となりぬ。

ナポレオン一世が政府を顛覆したるを憂ひて、夫人はなほも總督政府の恢復を希ひしかば英偉の君はいつも夫人をば、蛇蝎の如く忌みて、國外に放逐せられければ、スイスより魯西亞英吉利などに流浪し配所に在るも文學に意を寄せて、大なる著述をし、歐洲に名を轟かしぬ。

コッペーの城中に在りて、あまたの侍女にかしづかれ、げに一かどの女王なり、學者を集ひて時事を討論すれども、空澄み渡る月の夕、パリーの市街をそゞろありきするは、夫人にとりてなは樂しかりき。

那帝廢位となりし時、夫人やうやく戀しき都に歸るを得たるも、政權回復の曉に、またも遠く放逐せられぬ、國々を流浪する間、伊太利にて病を得、パリーに歸りし頃、はや著述に、羇旅に、心身を疲勞したれば、五十九才の齡を以て永眠せられぬ。

夫人はひたぶるに年の老ゆるを愁ひて常に、「若かりし時」と、人に語りて眼に涙の玉を浮べり、木枯すさぶ四十五才に、人知れず、己れより若きこと十歳許なる、近衞騎兵ド、ロッカに戀愛せらるゝことの嬉しくて、反り咲き櫻の花の色香ばしく匂ひたり、

夫人は博覽强記の著述家にして、文才溢るゝが如く二十才にしてソヒーの狂劇とジャヌ、グレーの悲劇を作りて、其の名高かりき、著書は他方面に渡れども特筆すべきは獨の文學と題する書にして其が中には哲學、文學ありて、獨の文學の一斑を覗がはしむるに稗益多き讀み物なり。

夫人は常に筆とる業を怠らず、その論ずる所、沈痛なりしを以て世論を惹起し人心を煽動せんことを恐れ深く那翁皇帝に忌れ追放の身となりしぞ遺憾なる、されど夫人はかゝる悲境に處して文壇に大功を樹てたるは、實に多とするに足るべし。（完）

學藝

昔がたり

文學士　濱田紅於

婦人女子の本能が、進取的なるか退嬰的なるかは、予の恒に疑へる所なり、世の大方の婦人は退嬰的なるが如くなれども、往々嚢中の錐穎脱して、男子と相馳逐し、或は男子をして下風に瞠若たらしむるものもあり、予益々疑なき能はざるなり、頃日聊か古典を繙いて、私に思ふ所あり、然れど管見の及ぶ所は、實に九牛の一毛に過ぎず、淺脳の説大方の嘲罵を被らむは、固より覺悟の上なり。

苟も國史を學びたる人は、高皇産靈神、神皇産靈神の併稱せらるゝことを知らむ、而して高皇産靈神の功業は、史上に赫々たるにも拘らず、神皇産靈神の事蹟は、落莫として少しも聞ゆるなし、これ果して事實なるか、古語拾遺の註によれば、此二神別に神漏伎命神漏美命と云ひて、高天原の八百萬の神達を神集に集へ、神議に議りて常に天照大神を輔佐しまつりて、大に畫策する所ありしは、祝詞を讀みしものゝ熟知する所なり、然らば神皇産靈神の功勞は、決して高皇産靈神に劣らざりしなり、然るに史乘これを載せざるは何故ぞや、古哲の說く所を視るに、神漏伎の伎は男稱、神漏美の美は女稱にして、伊邪那岐神伊邪那美神も同樣に解釋すべし、然らば高皇産靈神は男神にして、神皇産靈神は女神なりしなり、加之古典にはこの神相續いで高天原に生れましゝやうに記せども、能く熟讀反覆すれば、二神共に同時に生れまして、妹脊の契をさへ結び賜ひしが如し、されば神皇産靈神は夫神を輔けて、天下の經營に勞し賜ひしなり。

伊弉冊神（伊邪那美神）の御勤勞は更に大なるものあり、抑も伊弉諾神（伊邪那岐神）は高天神に生れまし、伊弉冊神の故郷は根堅洲國（出雲地方）なりしが、此二神磤馭慮嶋に八尋殿を建て丶、比翼連理を契りたまひ、以て夫婦の別を制し賜ひしは更にも云はず、其豐葦原瑞穗國を開拓し賜ひし功は、實に偉大ならずや、しかも此偉業の半は伊弉冊神の威望によりし也、伊弉冊神病を以て故郷に退き賜ひ、伊弉諾神これを慕ひゆき賜ひし時、八雷神のこれに從へりしと云へり、是れ警衞の嚴重なりしにあらずや、伊弉諾神畏れて逃還ります時、伊弉冊神怒りて八雷神に千五百の黃泉軍を副へて、これを追はしむと、然らば伊弉冊神の部下には、八人の雄將と千五百の貔貅とありしなり、其後二神復相和解して國土經營を續けたまひぬ、故に伊弉諾神の根堅洲國を訪れしは、獨力を以て其天職を盡すこと能はざりしを以てに非ずや、經國の偉勳は二神甲乙なきなり、その御子天照大御神の靈德に至りては、億兆の旣に知悉する所なり。

先哲或は天照大御神を以て男神となすものあれど、予は古傳によりて女神となすなり、此神光華明彩六合の内に照徹し丶かば、父神高天原を治めしめ賜ひぬ、その仁天の如く、能く衆物を容れ賜ふ、その寬洪の德は素盞嗚尊の惡虐を怒り賜はざりしによりて察すべしその暴横益甚しきに及んで、遂に天石屋戸にさし籠まし丶かば、高天原皆暗く、萬の妖悉くおこりき、されば此神の存否が高天原の治亂に關すること大にして、其治化宣敷の程をおしはかるもいとかしこき極なりけり、かの天安河原の會議、天石屋戸の神樂に思ひ及ぶ每に、吾人は天照大御神が如何に天下の人心を得て衆庶の奉戴する所となりませしかを、咏嘆せずんばあらざるなり、誠に此神は天下の中心なりき、天下のこれを瞻仰すると、衆星の北辰に向ふが如く然り、其政事を行ひ賜ふや、公明正大疎暢洞達、君臣の義と親子の親とを敎へ賜ひ皇御孫尊に對しては、智仁勇を以て下に臨むべく、

衆民に對しては、物を開き務を成して上に奉ずべきを誡めたまひぬ、本邦國體の源づく所、倫理の起る所、開化の始まる所、皆此大御神に在り、他邦此大御神に比肩しうべきものありや。

これを根堅洲國にて觀るに、かの大巳貴神を艱難流離の間に救ひて、出雲族の基礎を固めしめ、遂に高天原と相拮抗するに至らしめしは、其嫡妻須勢理媛の功にあらずや、これを天孫降臨以後に觀るに、天孫族と大山祇族（南海に在りき）とを連絡せしめてそが皇祖の勢力を增せしは、木花咲耶姫の力なりき（姫は大山祇神の女にして彥火瓊々杵尊の妃となりぬ）、又海國をわが皇祖の援となして、隼人族の勢を拉ぎしは、豐玉姫の績にあらずや（姫は海神豐玉彥の女にして彥火々出見尊の妃なりき）、かくて天孫族は異族と相連絡し相融和して、勢威を張りしのみならず、開化の度も亦其間に漸進しつゝありしなり。

群神の中往々女丈夫の輩出せしことありきかの天鈿女命は嘗て云ひし如く、手弱女なれども、いむかふ神面勝神と稱へられ、資性强悍猛固にして、雪に撓まぬ檜梅の、男子はづかしき女丈夫なりき、かの天石屋戸の變あるや、思兼神の深慮遠謀ありとも、鈿女命が誓槽踏みとゞろこし巧に倡優を演ずるにあらずば、いかでか日神の御心を和げんや、天孫降臨の途すがら、猿田彥命の天八衢に立てるや、英姿颯爽、陪從の諸神相見ること能はず、すなはち鈿女命は天孫の勅のまに〳〵、ゆきかひてこれを詰る、その言辭風發卓厲、遂にこれをして嚮導たらしめたり、初め猿田彥命の素志や測るべからず、これを天孫に服從せしめしは、鈿女命の功ならずや、後この二神は伊勢國に赴きて、猿女君の祖となりぬ、後世垂仁天皇が天祖神器を五十鈴川上に齋き賜へりしは始め天上に在りて豫め幽契を結びしなりと、古語拾遺は云へり、以ある哉。

この他諸々の功ありし女神を數ふれば、栲幡千々姫命は機杼を製りて織物を創め、大宜都姫命（保食神

石凝姥命は天香山の鐵をとりて鏡を鑄り、鏡作部の遠祖となりぬ、その鏡こそ即ち八咫鏡なれ、抑々我が大倭の國は行事を以て名に負はす國なりと、敬行天皇の勅り賜ひつと、高橋氏文の云へれば、勳功ありし女神達を古典に求めなば、筆紙に遑あらざるべし、こゝにはその著しきもののみを擧げつ。

我邦太古の婦人は、かくの如く國家の進運に關し、開化の遷移に參したりき、日の本は岩戸開けし昔より、女ならでは夜の明けぬ國とは、常に講談者の口にする所なれども、よく咀嚼すれば、太古の史實を示せるものゝ如し、帳臺の奥に隠れて、方丈の深窓を天地とするが如きは、必ずしも婦人の本性にあらざるべし、人各盡すべきの務あり、守るべきの徳あり、能くその則を踰えずして、その務を盡すこそ、眞の淑女貴婦人と云ふべけれ、人生莫レ作ニ婦人身一、百年苦樂由ニ他人一、今後の婦人此耻辱を雪ぐに努力せざるべからず。

予の感じたる婦人の歌（第一）

林天然

歌は敷嶋の道とかいひて、貴きも賤しきも、男も女も、古今を通じ、此道をたのしむ者は尠くない、これが爲め出世した者もある、人の心を和らげた者もある、自ら浮世の無常を慰めた者もある、或は名を擧げた者もあつて、歌の徳といふものは、時によッては非常の功力を生ずるのである。で何方かといふと、婦人は男子に比べるに、何うも歌をよむ者が尠ない、けれども若し歌心があると、婦人の頭腦は緻密であるから、なか〳〵旨い文句が出る。予は歌學に志してる者ではないが、平常讀んで佳い歌を獲ると頭中に藏ッて置いて、折々うたひ出しては味ふて居る、所で予が感じて頭中に藏ッてある歌を本號から順次掲げることにした。而し敢て珍ら

しいといふのでなく、概ね廣く世にありふれてるものであるから、少くも歌書を手にした者は大抵知ッて居らうと思ふ。けれども讀者の中には、適切なる學科を勵みて、まだ歌にまで學び及ばない女學生も有らうし、早くも世業に從事してる田舎娘も有らうし、又年とッた婦人でも、歌を樂む程の境遇を得なかッた者も、大分ムらうと考へられる。それ等の人々の爲め、特に一讀に供へる積りである。但し以下掲ぐる歌には、さして上出來といふのではないが、予が其人物の高風清節を敬ふの餘り、歌まで愛したのも少しはある。又白拍子、遊女の如き卑しむべき輩も、其歌が如何にもよく出來て、捨つるに忍びないものは、一所に收めてある、これらは、豫め讀者の賢諒をこふて置くのです。

我邦古來美人も多かッたが、衣通郎姫の如きは、實に美人中の美人、佳人中の佳人であッたであらう。

姫は仁徳天皇の御弟、稚渟毛二派皇子の第二女で、允恭天皇の皇后忍坂大中姫の御妹、初めの名を弟媛といひ、其美しいことは、衣も透きとほるかと思はれる程であッたから、衣通郎姫と稱へられた。で天皇の御寵愛を受けたが、御姉君を憚りて河内國に住まはせられた。

　とこしへに、きみもあへやも、いさなどり
　うみのはまもの、よるときどきを

これは天皇が河内へ御幸のあッた時、姫が喜びの餘り咏じたので、叡感なゝめならず、益御寵愛されたといふことである。

姫は唯に容姿が優美で、婦人の道に篤かッたのみでなく、歌學に於いては後世の人々に尊慕されてるのである、紀伊國なる玉津嶋明神は、即ち姫を祀ッた社である。

　唐土の山のあなたにたつ雲は
　こゝにたく火の烟なりけり

これは嵯峨天皇皇后の御詠である。皇后御名は嘉智子、贈大政大臣橘清友（奈良麿の嫡子）の御女であッて、御幼年の時から悧發で、そうして御容姿も麗はしかッたといふこと。で深く文學に心を入れられ、弟右大臣氏公とはかり、學館院といふ學舍を建て、諸氏の子弟を勸め、經書を修めさせた事は、歴史上著名である。又佛法を信じ玉ひ、嘗つて檀林寺を建てたから、檀林皇后とも稱えられた。仁明天皇、淳和皇后、秀良親王、秀子內親王、俊子內親王、繁子內親王、芳子內親王、皆皇后の生ませ玉ふ方々である。

唐の名僧齊安國師は、皇后の御詠を聞き、非常に感賞したといふことである。

まれに來てとふもさびしき松風を
　　常にや苔の下に聞くらん

○

苔の衣雪解の水にすゝぎても
　　袂ゆたかにひるひまぞなき

前者はこれ蓮絲で曼荼羅を織ッて有名なる中將姫の歌である。姫は聖武天皇の頃の人、右大臣横佩豐成の女で、早く母親に後れ、年猶少きとき、禁中にて箏を奏し、中將と名けられたが、繼母の爲めいふべからざる辛酸をなめ、其上殺されやうとしたのを、雲雀山に匿れて漸く命を拾ッたのである、後尼となり善心尼と號し、更に妙法と稱え、一生佛道を樂んで終ッた。

後者はこれ、孝道を以て聞えたる橘妙の歌である。妙は但馬權守橘逸勢の女、幼弱のうち、父を失ひ、尼となり、妙冲と號し、佛陀につかへて、一生をおくッた。

兩歌共よんで誠にさびしく感じられる、これ境遇の然らしむる所と想ふと、益々憐れな觀念が起る。

我袖にかゝる涙をとめ置きて
　　船はのどかにこぎやゆくらん

○

旅人の宿りせん野に霜降らば
　わが子はこくめあまのつるむら

前者はこれ、成尋法師が、遊學生となり、唐國に出發した時、其母がよんだ歌。後者は平郡廣成が遣唐使となッて、唐に赴かんとした時、其母がよんだのである、子を思ふ親心が、如何に尊く切なるか、翻ッて思へば、親のない子ほど憐れ薄運の者はない。妙法や妙沖の心事察しられる。

濁りなき龜井の水を結びあげ
　心の塵をすゝぎつるかな

✿　✿　✿　✿　✿　✿　✿　✿　✿

○



時鳥こゑまつ程は片岡の
　杜の雫にたちやぬれまし

前者はこれ、一條天皇の中宮上東門院が、攝津國龜井の水を詠じた歌である。上東門院の御名は彰子、大政大臣藤原道長の第一女である、容姿頗る麗はしく、頭の髮が身の丈より二尺も長かッたといふこと。十二歳の時宮中に入り、後一條天皇、後朱雀天皇を生ませられた。女院は平常文學を嗜んで居ッたから、文才のある女流が一時に輩出した。彼の紫式部、和泉式部、小式部内侍、清少納言、赤染衛門、伊勢大輔等は、其著しき者である。後者はこれ、源氏物語の著者として有名なる紫式部が、山城國片岡にてよんだのである。式部は越前守爲時の女で、右衛門佐藤原宣孝の妻となッて、大

貳三位を生んだ。後上東門院に召されて其師となッた。式部の才學は古今にすぐれ、又其節操の堅かッたことは、當時位人臣を極め、榮耀榮華に溢れた關白道長（第一女は一條天皇の中宮、第三女は後一條天皇の中宮）の望を拒み從はなかッたので知れる。

古の奈良の都の八重櫻
今日九重に匂ひぬる哉

○

いかにせん都の春も惜しけれど
なれし東の花や散るらん

前者はこれ、伊勢大輔が上東門院に仕へんとて、始めて宮中に參ッた時、偶々八重櫻の花を上げた者があッた、關白道長側にあり、其櫻を大輔が前に差出し、何の位の歌心があるかを試みたから、即席に詠んだのである、素養があるとはいへ、なか〳〵の上出來である、大輔は伊勢祭主大中臣輔親の女で、高階成順の妻となッた。

後者は遠江國池田なる娼家の女熊野が、內大臣宗盛に愛せられて京都にあり、或日清水寺の櫻見の宴に伴はれたが、何故か獨りさへざへしなかッた、宗盛これを怪しみ熊野に對ッて、其故を問ふたから、熊野は早速此歌を詠じ、暗に老母の慕はしき意を諷したのである、宗盛も憐れと思ひ直に暇を遣はしたから、喜んで鄕里に歸り老母を養ッた、熊野は身分こそ賤しいが、歌は餘程好きとみえ、壽永三年平家の一族西海に敗れ、宗盛は擒へられ、東國に下ッた其時熊野は『諸共に思ひ合はしてしぼるらし、東路にたつ衣ばかりぞ』と詠んで慰めたといふこと。『古の奈良の都』の歌は陽で『いかにせん都』の歌は陰である、前者は進歩で、後者は退歩である。同じ花ながらも時と人によッて感じが違ふ、月も雪も必ず其通りであらう。



TRANSLATION OF JAPANESE INTO ENGLISH.

By. A. Miyamori.

和 文 英 譯

No. 1. 虎

虎は朝鮮及印度の山林に棲めども日本には昔より居らず。其の毛は黄色にして黒き斑あり。身の長け六七尺高さ四尺餘にして骨組甚逞しく口の邊に硬き鬚ありて自から威風あり。一たび嘯けば百獸恐れて息をも出さず。

The Tiger.

Tigers are found in the mountain forests of Corea and India but from antiquity no tigers have been found in Japan.

The tiger has yellow fur with black stripes. He is six or seven feet in length and a little over four feet in height, and he has a very strong body and a commanding appearance with tough whiskers about his mouth. When he roars, all other beasts will hold their breath in terror.

Notes.

1. 廣く虎の事を指すときは The tiger ; tigers 何れにてもよし。
虎は猛き動物なり。
{ Tigers are fierce animals.
{ The tiger is a fierce animal.

2. to live と云ふ語は動物の場合には用ひず故に Tigers live in Corea. と言ふべからず。
Tigers are found in Corea. 或は we find tigers in Corea. とも言ふことを得べし。

3. from antiquity は from ancient times にてもよろし。

4. whiskers は頰鬚なり鼻下の鬚は mustache (マスターシ) 頸鬚は beard なり。

5. 百獸は「他の獸類悉く」と云ふ意味なれば百と云ふ數字に拘泥すべからず故に A hundred beasts 抔と譯するは非なり。

6. 虎や獅子の如き猛獸には男性代名詞 he を用ひ猫や羊の如きものには she を用ゆ。 I have a big cat. Her name is *Tama*. 又 dog には he を用ゆ I have a hunting dog. His name is Carlo.

MAXIMS AND PROVERBS.

格言及俚諺

1. Deep rivers move in silence, shallow brooks are noisy.

深き河は靜に流れ淺き小川は騷がし。
(そこひなき淵やはさはぐ山川の淺き瀨にこそあだ波はたて)

2. True merit is like a river: the deeper it is the less noise it makes.

眞の才能は恰も河に似たり深ければ深いほど其音小なり。

3. A thousand cranes in the air are not worth a pheasant that flieth by.

空中を飛ぶ千羽の鶴は傍らに飛ぶ一羽の雉に劣る。

4. It is better to do well than to say well.

能く行ふは能く言ふにまさる。





主婦と家庭

鳩山春子談話

記者このほど鳩山夫人を其音羽の邸に訪ひ、婦人に關するいろ〳〵の所見を聞きました。夫人は突然坐感を話されたので、區々であるからといはれたのを、無理に乞ふて、此に其二三を掲ぐることゝしました。

主婦の心得に於いて、尤とも大切なる事は善き家庭を作ることにあると思ひます。

よき家庭を作るは、どうしたならば可いか、私は家庭が温いといふことになれば、可いと思ひます。家庭は、家族の樂園で、また其安息所であるのでありますから、此處に居るときは、十分安々として居られる温い塲所であることが必要であります。

どれほど、家は美しく立派であつて、飾付けが行屆いて居りましても亦如何に美味美食に飽きますとも若し其家庭の中が温くなくて、いはゞ別々の空のやうでありましたならば、善い家庭とはいはれませぬ。これは、丁度立派なる宿屋の座敷に居り、贅澤なる宿屋の食堂に座するやうなもので、些とも此處に棲む

ものに慰藉、快樂、平和、滿足といふものはありますまい。これ等は、ホームを成さないといつて可いかと思ひます。

或は平和ではありましても、單に各人の集合生活場であるといふやうなものも、亦ホームではないのです。

それでありますから、家庭は温いといふのが其生命です、而して温くしますとは、ドンナにするのでしようか、私ばこれを次の如く思ふのであります。

思ひ遣り

家族相互に、思ひ遣りといふものがあり度ものであります。思ひ遣りといふことは、他の言葉でいひますと同情といふことです。

互に凡てを思ひ遣れば、其處で、斟酌といふことが出來、從つて、假令其人に過失があつても、之を許し之を憐むことが出來るのです。其人の事柄は、自分の事柄のやうに感じて、患も之を分ちて共に憂ひ、樂しみも之を分ちて共に樂しむといふことになるのであります。

そうでありましたならば、一家は靄々として温い風が立つて、外から來る不平と勞苦と、此所に於いて温い同情で、慰藉されます。故に思ひ遣りはホームの要素だと思ふのです。

知己（親友又は良友）

互に、思ひ遣つて居ると共に、互に知己であることが必要です。知己でありませんと、其思ひ遣つて同情を寄するにしても、可い結果が得られないのです。

一人が何か考へて居ても、それは何故である乎が分らなければ、同情を寄することが出來ないです。又

りません。一人が如何なる性質である乎それが分らないでは、その人に對して、どういふ風に同情を寄せて可いか分りません。

であますから、相互に距てのない眞の知己、いひかゆれば良友であつて凡べてを克く知つて居るといふことが、甚だ必要であります。

彼は、彼自ら知つて居れば可い、我は我自ら知つて居れば可いといふことでは、到底同情も起りません。同情を寄せ合ふことも出來ませんから、互に能く知合ふた良友といふことが家庭を温くする上に於いて、一二を爭ふ要件であると思ひます。

信用

家族は、その互々に信用を維ぐことが可いことであります。互に心を許し合ふて、自分の心に少しの疑念を起さないことが要用です。

勿論無暗に他人を信用すると、時としては、とんでもない間違がありますが、最も近い同胞即はち家族相互間には、恁んなことは滅多にないやうにならねばなりません。互に克く其爲人を知ると共に互に信用を以て相交はり、夫は妻を信用し、親は子を信用して、些しも其處に疑惑の如き或は策略の如きことの餘地のないのが必要なることです。

かくなりますと、互に克く心を許し合つて居ることが、其美しい天然の性質のやうになりまして、不平の起ることもなく、非難の起きやう筈もないのです。

平和を壞はしまする不平とか、口論とか、いひまするものは、皆此信用を以て相對することをせないで、些々たる事にも疑念を起して、互に怨望するとか、又は自分の利益幸福より打算して他の行爲を判斷する

からです、これ等は、誠に互の我儘勝手より起るものと思ひます。

最大なる幸福

詮る所、家庭も亦大きくいひますと國家と同じことでありまして、その幸福は互の思ひ遣りで、家人中の多數のものゝ最大なる幸福でなければなりません。

家族のものが各自に別々の考へを持ちて更に一致せぬ家庭は、決して幸福を享ることは出來ません。此點に於ては、特に主婦たるものは常に中心になつて、連鎖を計る可きであります。主婦たるものは家庭多數のものゝ幸福の爲めには自分の幸福を犧牲にする事を樂しむ覺悟がなければならないと思ひます。人間生活中に於いて、最も幸福なる人は自分が役に立つこと、善を爲し得ること、自分あるが爲めに幸福を得る他あること即ち他を幸福に善良に導き得る事であります。

主婦たるものは、家人が此感を己れに與ふることを心に喜び謝すべきであります。これと反對に人間の最も不幸なるは、利己の外に毫も考へ及ばぬ人、曾て同胞のために露だも考へ及ぼさぬ人、他のためには毛厘をも惜しむ吝嗇家他のためには一擧手一投足の勞をも厭ふ不人情家であります。其面は常に澁難凄愴曾て幸福の何たるを解せざる人なのであります。主婦たるものは、よく鑑みる可き事と考へます。でありますから、主婦たる人は、多方面に知識を有し、よく常識を以て判斷し同情し、家庭に思ひ遣りの氣を以て充溢せしむるこそ、望ましきことゝ考へます。

でありますから、互に思ひ遣即ち温いものを拵へて、全體の上に於ける幸福を得て、其中に各自が安安と手足を伸ばして居るのが、これが、ホームに住むものゝ最大なる幸福であると思ひます。

夫と妻

家庭を造るものは、主として夫妻であります。それ故、夫と妻との間が、甚だ温くあることが最も必要なる事であります。これに付まして、妻の方は、どの様にして夫に對すべき乎といひますと、私は大要次の如く思ふのです。

夫を休息せしむること

妻たるものは、夫が家庭を維持する爲めに幾何の責任を增すこと、自由を減ずることに同情し、之に報ゆる方法を考ふ可き事と思ひます。

人間は交際の動物とさへいふ如く、如何なる知識も思慮も憂苦も之と共に語る友即ち心を許して打ち明ける友がなくては、誠に淋しく不滿足に感ずるものであります。今夫にして如何なる骨折も如何なる心配も之と語りて、理解し、同情し、且つ秘密あらば秘密をも守り、失策も、病苦も、禍災も、非運も、貧困も、苦痛も、曾つて其愛即ち眞の思ひ遣りを我身の半身たる妻に依てどれほどに慰藉され、休息せられませう。

妻の斟酌、附常識

如何ほど愛らしき妻にても、夫が心配事ある時、或は重要の問題を考へ居る時に、戀愛を語るとか空談を喋々するとか致しましたならば、夫は如何に感じませう。

ある人がいひました、最も幸なる夫は、多方面なる妻を有する人即ち遊ぶ時には、遊び相手となり、心配の時には、相談相手となり、多忙の時には助力者となれるものを持つ人なりと誠に意味ある言と考へます。

愛、

妻が夫に對するのは、一言でいひますると愛でなければならないです、愛は眞の愛でなければなりませんです。

この愛といふ言葉は餘程高尚に解さなければなりません、詩人の口や小説などにいふ戀愛の意味ではありません。即ち夫婦となる以上は、妻は適當に夫を愛するは神に對する職務と考ふべきであります。已に夫を愛すといへば、夫のありの儘を愛するので、將來夫が斯くなれば愛すべきだなど考ふ可きではありません。たとへば、夫は現今病床にあるが、病氣全快すれば我は夫を愛すべしといつたら、誰か其妻の面に唾きせざるものがありませう。又夫が遽かに貧困に陥りしが、萬一家運輓回し、再び富豪の身となれば、我は夫を愛すべしといつたら、人之を何とかいひませう。

これと同じ理りにて、昨日まで禁酒家たりし夫が本日は好酒家となりしもの、我は夫を愛せずとは言ひ得べきでありませうか、これは多くの雜誌などに、所説區々の如く覺えましたが、私は善にあれ惡にあれ夫婦は生涯の約束たる愛は永久不變の愛でなければ社會の秩序は保ち得ざることゝ考へます。（これは研究を要すと申す人もあります）

不幸にして、夫に無理非道の行がありましても、眞に夫を愛する妻は、其行爲は惡むも、其人に對する愛は替らないものだと考へます。たゞ、自分があるために幾分か夫の弱點を補ひ、善きに傾け得らるゝことを夙夜に祈る可きであります。併し日本婦人は結婚迄は男の性質嗜好を知らざるもの多ければ、談笑の間に夫を善に向はしむる如き巧なる人は餘り見受けられません。西洋にては、娘は幼少よりよく父に接近し、父は娘の愛を無上に喜びて、知らず識らずの間、娘は男子の性情嗜好をも知るのみならず、結婚前多數の男子に交際すれば、男子を喜ばしめ、男子を慰むる方法に精しくなるといひます。私共過渡時代のも

のは、致方はありませんが、將來の日本婦人即ちこれからの妻は、西洋婦人の如き巧妙なる腕と日本婦人古來の貞節とを化合したる頓智のある、而も犧牲的の有爲有識なる妻を養成したいものと考へます。

これには、現今の父たる男子にも、今少しく心配して戴きたいと考へます。

妻の從順

西洋では、男女は概して同等で、たゞ其方面が違ふので、決して彼是と優劣のある可きものでないといふ人が多數の樣に考へます。

併し私は、これに全然は同意する事は出來ません。勿論女の優たるものと男の劣りたるものとを比較する時は、女にも有爲有識で社會を益するのが澤山あり、男にも無智無識で人間らしき行爲のないものも澤山ありませう。

けれども男の優れたものと女の優れたものと比較すれば、統計上女子は男子に及ばぬ事と考へます。殊に夫婦となりて家庭を作る上は、妻は夫に服從の義務あるものと考へます。これは決して奴隷的の服從を意味する譯ではありませんが、多くの妻は夫の家に住み、夫の働きに依りて、衣食するではありませんか。左すれば、たとへ內助の効はありとしても夫をして不快の念を起さしむる事は謹しまねばなりません。この服從は夫を愛するに依るので、恐怖より生ずるものにてはありません。たとへば、自分が此事は良きとおもひて決行したいと望みましても、夫が好まざる事ならば遠慮す可きことゝ考へます。(最も事重大にして家庭の幸福に關係する如きことは此限りにあらずと思ひます)平常の事に就いて不遠慮に夫に逆ふは宜しくありますまいと考へます。且つ克く事實の上に立入つて考へますならば、夫がある家具を求むるも、自分の力で得た金錢で、之を求むるのであるから、妻が之に對して不服を唱へ夫の不氣嫌を來すべきものではありません。

女子は兎角、得意の時は、己を忘るゝものにて、ある人は、婦人は成功に立ち能はぬと迄も評しましたが、夫か他人かゞ妻に優しくすれば、直ちに自分は餘程價値ある人物の如く自惚れ易きものであります。それ故古人も女子と小人は養ひ難しなどいふたのであらうと存じます。されぱつまり、女は概して、男に比して思慮淺く識見狹く、己を知る機會が少ない故かと思ひます。蓋し人間は學問を深くし、宇宙の微妙を知れば知る程、如何に己が小にして、且つ淺薄なるかを覺ることであります。されば、女子は常に自ら顧みて、其愛に誇り、幸福に慣れぬ樣、注意せねばならぬと思ひます。

これと同時に自暴自棄といふことも、深く戒めねばなりません。我は女子なるが故に何事も爲し得ぬ。我は拙劣なる爲め何事も働き得ずと考ふる如きは、大なる心得違ひと考へます。女子は頭腦の働き、理解力に於ては、或は男子に一歩を讓るとも、其他に於いて即ち熱心とか忍耐とかいふ點で男子に劣らないのであります。

けれども男女は夫妻といふ關係で世に立ち而も男は表に女は裏で社會に生活するのが普通でありますから、女の柔順といふことを眞の愛の上から持續て、女らしく大に盡すべきことゝ思ひます。

要する未來の國民の良否は偏へに其國女子、特に妻たるもの丶双肩にかゝて居りませうから、當今の女子たるものは、克く此點に自重する所ありて、其の天職を盡されたいものであります。

露國の宮廷

松本晃

地を領するや歐亞を併せて百四十五萬方里、民を治むること各人種を通じて一億二千萬、世界の盟主として政兵兩權の鍵を握ること年已に久しく、一度び袂を揮つて起てば列强も色を失ひ、無限の君主專制を政體として鵬志漸く伸び、綾羅星の如き天下の群雄を尻眼に睨んで今や飛ぶ鳥も落さんず勢ひある露國皇帝ニコライ、アレキサンドロウイチ、ロマノーフ陛下は先帝アレキサンドル三世の皇子にして本年經つて三十五歳の覇氣勃々たる壯皇帝であるが、帝は一八九六年五月廿六日即位、一八九四年十一月二十六日を以て獨逸聯邦ゲッセン大侯國リユドウイーグ王の第四女アレキサンドラ、ヘウドロフ(本年三十一歳)を迎へて皇妃と定められた。而して御結婚後竹の園生の榮えめでたく皇女四人(オレガ九歳、タッチアーナ七歳、マリヤ五歳、アナスターシヤ三歳)を擧げさせられたるも、何故にや一方の皇子を設けさせられない。之が爲め皇帝よりも配慮さるゝは皇后の方で、前世いかなる罪業あれば神は我に男子を授けずして露國帝室の隆昌を忌まるゝやと日夕慮を勞せられ、その結果であるかどうかは明かならざるも、皇后には近年ヒステリーの氣味で困つて居られるとかいふ事である。お氣の毒な次第である。併し露國の國法に據れば、皇帝即位すると直に皇儲を冊立する例であつて、目下皇子なきより皇弟ミハイル大公殿下が已に皇位繼承者と極つて居るからまあ何事もあるまい。

露皇平素の御生活につきて其一斑を叙せばかうである。夏より秋にかけての熱苦るしき季節の間は、兩陛下相携へて大抵クリミヤ半島なるレワーヂヤの離宮に暑を避けられる。此處にはいと壯麗なる海水浴が設けられてあるそうで、兩陛下夏期の唯一娯樂となされて居る。之に引換へ冬より春に渉たる寒さ交

は、聖彼得堡の宮殿若くは其の附近の離宮に住まはれる。露國は名にし負ふ寒國にて、十月より雪降り翌年五月に至らざれば積雪融解しない。この永き冬の日の間は、同國に於ける所謂社交の季節に屬し、上中等社會にありては、倶樂部又は私人の宅に相會し、舞踏會、假裝會、觀劇會其他種々な眞似をして遊び暮らす時である。でこの季節中には『冬の宮殿』に於て毎年數回内外文武百官を招じて盛大なる宴會を催ふさるゝ例である。之は格別何といふ目的のために開かるゝのではない、單に社交の義務を盡し上下の交誼を温むるに止まるのであるが、兩陛下には毎回此に臨まれ親しく來賓を歎待される。而して舞踏會の時の如きは、皇帝皇后にも、他の皇族太使杯の間に打混りて一緒に踊つたり跳ねたりして遊び平氣なものださうだ。室内は嚴冬の候なるにも拘らず、玄關より客室、食堂等に至るまで熱帶地方の華卉を陳ねて百花爛熳、時ならぬ棕梠の翠葉卓底より聳えて空を蔽ひ、いかに多人數聚會するも、室内の熱するとか、呼吸の逼迫するとかいふやうな事はない。温度は毎に華氏六十度内外を保つやうな裝置をしてあるから神身共に爽快を覺ゆる。また露皇には我國の七寶燒を愛せられ、宮廷内の處々に飾付けて置くのが見受けられるさうな。

歐米人は語學に於ては孰れも皆日本人よりは堪能なのであるが、露國皇帝の如きは佛獨英の語に、皇妃にも英佛露等の語に通じ給ひ、數ある歐洲帝王の中では語學には隨分達者な方であるそうだ。從來露國が不倶戴天の敵と認めて居つた英國の語は、何事にまれ痛く擯斥して、一部の商工官吏を除く外、之を解するものは實に寥々たる有様であつた。生來外國語を操るに妙ならざる日本人の如き、偶々英語を以て話し掛けると、渠輩は『何んだ、お前怪しからん、英語で話すとは』といふ顔付にて、碌な挨拶もせずに怫然として去る。又英語にて商標を附せる物品は、いかに必要があつても購求することを忌むといふほど頑固なのであつたが、奚ぞ料らん、現皇后は往年

久しく英國に留學されし事とて英語に巧に、皇帝と御結婚の節始めての對話に英語を用ゐられ、爾後も絶えず之を使用さるゝので、一種の語的變兆は近時露國の宮廷内に起つたとかいふ事である。また數年前皇帝は皇后より英語を、皇后は皇帝より露語を交換的に練習なされしに、皇后よりも皇帝の英語の方の進歩が速かつたさうだ。かゝる意外なる機會が動機となりて露廷に英語の流行を來せし結果、幾百年來黑闇々の裡に葬り置かれし英國の事情が稍々明白となり、英露兩國間の交情は之がため幾分か融解することを得たといふやうな噂もある。

伊藤侯が先年露國に行つて皇帝に謁見を願つた所が、早速承諾の旨通知があつたから聖彼得堡より四里許り距りたる離宮に伺つた。處が其宮殿に入ると、思つたよりはズット疎末な建築で、侍從武官らしい役人も見えねば、宮内省の官吏も居ない。唯だ皇帝の召使とも見ゆる幾人かの男女が居る切りである。侯は直ちに皇帝の書齋に導かれたが、其狹い事と云つたら我國の六疊の座敷位で、友人でも訪ねた時の樣な氣易いことであつた。然るに侯は始め通辯として都築馨六氏を連れて行つたから佛蘭西語で話さうと思つて居ると、皇帝は『自分は英語の方が使ひ慣れて居るから』と云つて快活に話される。で侯も英語ならば通辯も要らずに親しくお話をして軈て退出せんとすると、皇帝は自分玄關の處まで見送つて來られ『少し待ち玉へ、話し殘せし事がある』とて呼留めらるゝ杯、恰も一平民が友人を送迎するやうな實に簡易質朴なるものであつた。讀者は或は疑ふて帝が殊更にかゝる待遇をされたのだらうと思ふかも知れぬが、之は彼國では當然の事であるのだ。皇帝が露都の宮殿に居らるゝ時分は云はゞ國家的で、此處の離宮では全く一私人の資格で、離宮を私用の邸宅として住まつて居らるゝのだ。

露西亞といへば君主專制の國であるから、人民たる者は容易に皇帝に謁見する事が出來ないやうにも思はるゝけれど、實際はさうでない。皇帝は無限の權

力を有しながら人民との間には存外障壁を築いてないのである。謁見を許された日には何人でも忌憚なく龍顏を拜することが出來る。又屢々市中を微行されることなどもある。皇帝と人民との親近は露國の內情を解せざる外國人の見て訝からざるを得ざる露國の一美風であるのだ。事は數年前の冬季中に起りし話である。一日兩陛下相携へて普通紳士の扮裝をして或る敎會堂に行つて參拜された。折しも會堂の入口に一人の學生が立つて居たから、皇后は早速外套を脫いで其若者に預け、やがて參拜を濟まして歸らうとする時分に、其學生に向ひ叮嚀なる挨拶をした上に五留許りの金を與へて去られた。彼國では紳士淑女の爲め好意を以て用務を辨ずるのは後進子弟の社交的義務となつて居る。少し位の事を囑んだ所が謝金も何も要るものでない。然るに此時皇后は世間貴婦人等の橫柄なるに引換へ最と慇懃に扱はれたので、學生は之は世に珍らしき篤志の婦人かなと、更めてその面貌を仰ぎ見れば、こはそもいかに、かねて見覺えある皇帝と皇后に擬ふ所なきので、其靑年は遽かに容を改めて無禮を謝し、驚喜措く所を知らなかつたといふ話がある。

聖彼得堡のネウスキー街といへば露都の中央に位して恰度東京の銀座通りとか、日本橋通りとかいふやうな所で、大賈鉅商甍を聯ねて往來織るが如き地である。然るに兩陛下には一人の從者も從へられず。晩餐後相提へて折々其邊に微行を試まるゝことがある。處は變れど理は一、露都にも東京と同じく、陶器は某店、吳服は何屋といふやうに矢張り名代の老舖豪商のあるのを兩陛下には何時の間にやら御存知と見え、散策中フト其鄽頭に立寄り給ひ、通常の紳士の如く裝ひて、襟飾を吳れろとか、石鹼を見せろとか言ふ。處ろがその服裝を見れば、まあ陸軍大尉か中尉位にしか思はれないので、番頭は挨拶も忽かに、好い加減な品類を持つて來る。スルト尙少し上等の品位をといふ事であるから、番頭殿怪訝な顏色をしながらそれを示すと、直らに一打とか二打とか

貰ふどいふことで、間々即金で拂つて自身其品をお持參になることと杯もある。柄に似合はぬ奮發方なれば、番頭殿も此に始めて聊か疑念を起し、若しもやと氣をつけて視れば、その風丰曾て拜したる聖容に彷彿たるのみならず、常人と違ひ動作進退いかにも勿躰らしいので、是は〳〵と店員一同恐縮に堪えず、愈々其貴顯たるを確かむるに及び、頓首地に伏して天恩の忝けなきに感泣したそうな。

現代の各國君王中兎も角千里の江山を踏破して我國に來游せられ、躬親しく觀光の勞を執られたるは、今の露國皇帝(當時皇太子)一人であるやうだ。途中不幸にも湖南の變を生じ、行半ばにして歸途に就かせられたるは遺憾なりしも、性來雅量に富める帝は恕して狂者の暴擧と認め、且我が帝室並に國民の捧げたる悃誠を諒とし、深く之を念頭に留め給はず、之がため日露兩國間の交誼は依然として敦睦の裡に結ばれて居つた。帝が日本を去りて西伯利亞に赴き、同地方を巡視せられし時の如き、大津にて受けたる創痍未だ痊えざるにも拘らず、繃帶を解き軍帽を戴き、負傷の徵にして已に快癒せるかの如く裝はれたさうなが、之は全く該地人民の日本人に對する敵愾心を可成融和して以て事なきを得せしめんとの聖慮此に及んだのであるらしい。どうか末永く此の御志を保つて戴きたい。夫れから露國皇室の紋章は、イワン三世の採用したるものにて雙鷲の象である。その鷲の胸に騎馬武者が槍を揮つて龍を殺せる所の狀あるは、暗に露國が黃龍を紋章とする支那帝國を侵畧するに合し、四百餘年前に於て已に今日の兆候を顯はし居るは妙ではないかといふ仁もあるが、そんな占斷は姑く措き、皇帝が內廷に在りて事務を執らるゝ時の如き、其傍らに皇后座を占めて針仕事を爲し、或は皇女等と戲むれ遊ぶ杯和氣靄々として堂に盈ち、皇帝は旰夕非常の劇務に神身を勞せらるゝといへども、之がため其勞を慰め欝を散じ幸に健康を保たれて居るさうである。萬福、々々。

もみぢの話

清水橋村

紅葉ちるながらの山に風吹けば
錦をたゝむ志賀の浦なみ（範兼）

植物形態上の美は獨り其の花ばかりでなく、色の美もあれば香の美もあり、味の美もあれば風景上構造上の美もあつて、今夫れを細別すれば十數個條に分たれるやうであるから、一概に論ずることは出來ないが、衣服裝飾上に應用される美點は、重に形態、風景、動物との配合、季節との照應等に於ける花と葉の二點である、而して其中にも單に花ばかり用ゐらるゝものや、花と葉と共に應用されるものもあつて、後者は前者より多く應用される度合が多いが、然し此の槭や、松や杉や、白桐や、公孫樹などは葉であつて、紅葉は特に美にして瀟洒たるものから、多くの場合に用ゐられる。次に記すのはその紅葉の話である。

そこで此の紅葉ずる植物の代表者たるべき槭樹屬は、一方に於ては我國の秋景を代表する植物で、槭樹、深山槭樹、蔦槭樹、鬼槭樹、三角楓、ハナガヘデ、ヒトツバカヘデ、ミツデカヘデ、ウリカヘデ、ウリハカヘデ、ハウチハカヘデ、チヅカヘデ、カヂカヘデ、カラコギカヘデ、ヌルデ、ツタウルシ、カキ、ゴエフツツジ、ツタ、櫨などの種類が一時に紅葉して宛然天女の雲錦を曝すが如き景色は、外國などには到底見得らるべき大美觀でないので、是れは日本の以て誇るに足るべき所のものである。但し亞米利加の合衆國には槭樹にあらぬ紅色を呈する植物があり、獨逸のある山中には槲屬の黄葉するものがある。

我日本の中にあつても、九州、四國、山陰、山陽、畿内並に紀伊より磐城に至る海岸地方は植物の分布上、北方半熱帶に屬して、松柏樹は其の特徴たるもので、從て槭樹の種屬が饒多あるから、此邊は特に

よく日本の秋を代表するもので、熊本の銀杏城には公孫樹黄金を布いて「銀杏挿レ天知ニ故國一」てふ句となり、薩摩の山中に柿、桃葉衛赤色を染め、筑前の江堤に櫨紅錦の雲を懸け、其他山櫸、槲、南燭樹の紅色、黄色、赤黄色、黄丹色の中に、柑橘の累々たるを交へ、又樟、棕櫚、鳳尾松、竹の青色、綠色の錯繡するものあつて、其風景の多趣味なる、其の彩色の絢美なる、其處に千百の歌あらしめ、文あらしめ、畫あらしめ、歎美あらしめて倘之れを悉く言ひ現はす事ができぬ位である。日光、木曾、鹽原の山中も亦秋の錦を持て包まるゝ處で、實見した人は既に知る處だ。



紅葉する理はどうであるか！　事の序でにまづ綠葉の黄、紅色する理由を話さうが、若葉も枯葉も同じく黄紅色に染まるから一口に盡すことはできないで、第一に若葉から云へば、嘗て「櫻の話」の條に於て述べし如く、一は動物に對して食ふ可らずと云ふ警告を與ふるもので、二は葉中に含む紅色素の爲め日光の過量を防ぎ、前は虫害を避け、後は炎熱の損害を防ぐので、蓋し嫩葉の細胞は其膜の薄弱な爲め、害を受け易いので幼時のみ此の色素を含蓄して、原形質及び綠葉體を庇護するのである。次に葉の枝を放れて落つる時に黄色を呈するのは、葉中の葉綠素分解して黄色素を殘留するからである。次に秋季櫨、槭樹等の紅葉するのは、まづ葉綠素分解して細胞中に黄色素を生じ、更に其の黄色素分解して紅色液となるからで、其物質を名けてアントチアンと稱する、次にその原質とも云ふべき葉綠

素のことを述べて本篇を了らうと思ふが、今葉の構造を見ると。

葉
- 表皮系——表皮
  - 氣孔
  - 毛
- 維管束系（葉脈）
  - 篩管部
  - 木質部
- 基本組織系（葉肉）——柔軟組織
  - 上層
  - 下層

と云ふ組織を此の葉肉の細胞中に多くの葉緑粒を含有して居つて、植物はこの葉緑體（粒）の製造にかゝる澱粉を採つて細胞膜質、原形質其他百般の物質を化成して養料とし、因て以て生育するものであるから、葉緑體の生じたる澱粉は實に植物體構造の大本で、即ち葉緑體は日光と適度の温度、若くは月光、強力の電氣燈の光線などを得て、空中より其葉に受けし水分と炭酸瓦斯とを原料として同化作用を起し、多くの澱粉を造る、植物の葉は他の動物の呼吸する如き運動を營むで居る故に暗所又は日蔭等にある植物の葉は其色蒼白で、此の貴重なる葉緑素を造らないから、失緑病にかゝつて了ふ。

古來兒童の遊戯

實相寺一二三

兒童の遊戯についてゝにいさゝか述べようと思ふ、けれども何分淺見で、かつ手の届くかぎり多くの書にもわたり、亦實地に取調ぶると言ふ事も出來ぬので、余は讀者に對しては滿足を表はす事能はざるを遺憾とする。

（一）　肩ぐるま

古くは「肩くび」と言つた、義經記奥羽平泉寺見物の條に、兒の肩くびに乘つて來たと言ふ事が見えて居る、萬治頃の書に吉原の禿は肩ぐまにて來たなどゝあつて、伊勢物語の筒井筒の口眞似とて、

くらべ來し振分髮のかたぐまは
　君ならずして誰かあぐべき

などと言ふ歌も載せてある、肩ぐまは即ち肩ぐるま

の事で、今日なほ京坂地方では肩ぐるまと言はずに肩ぐまと言ふ處もあるそうだ。

（二）　ちん〳〵もがら

小兒が片足あげて歩むのを「ちん〳〵もがら」とは言ふのである、松の落葉と言ふ江戸時代の歌謠を集めた書中にづんからもがら踊と言ふ小唄があるが、是から來たものであらうか、今狗に向つてちん〳〵をせよと言ふと、狗は片方の足をあげて立つのであるが、是から考へるとちん〳〵とは足をあぐると言ふ義で、もがらとは言葉の調子でもあらうか。

（三）　指ひき指きり

小兒が喧嘩の仲直りをしやうとする時に、互に小指を曲げて引掛るのを心の解けあふた驗とする一の戯である、指切と言ふはその引掛けに指をきりはづすのである、江戸時代の頃盛んに行はれたが、今もをりをり見受けるのである。

（四）　鬼ごと　（鬼ごつこ）

昔の東京即ち江戸では鬼わたしと言つた、其頃京都では「つかまへ」と言ひ、大阪では「むかへぼ」と言つた、東國及出羽邊や肥前の長崎では「鬼ごと」と言つたさうな。

また仙臺では「おくりご」常陸では「鬼のさら」とも言つた。

帝京景物略に、

小兒共繩以繫兒腰牽焉。相距尋丈迭于不意中年之以曰去打鬼爲繫者兒所執執者闘然共促代繫曰替鬼更擊更執更代終曰繫不爲代則飛巧矣

と見えるは擊たんとする鬼を執へるのである。

繩以爲城二兒相蒙以摸一兒執欷一擊而輒易其地以誤之爲摸者得其蒙口欷兒曰摸蝦兒

とあるはこれは捉迷藏の類である。

今普通に「鬼ごつこ」と言ふ。

（五）　かくれ遊び（かくれんぼ、めかくし、）

漢土では此遊戯を捉迷藏と言ふそうな、瑯環記に玄宗と揚妃と、この戯をしたと言ふ事が見えて居るが、日本のとは少し違つて居ると言ふ事である。

とにかく此遊戯は今の「隠れん坊」である、今は「目かくし」と「かくれんぼ」の二となる、たしか梅川忠兵衛の事を書いた近松の冥途の飛脚に、

いゝいゝいゝ
めんないちどり川千鳥あとは梅川泣くちどり

と言ふ語句を見受けたやうに思ふが、この「めんないちどり」が即ち「目かくし」である、偖俳句の集などには、

續山井　花見には人にかくれん坊子哉
同　隠れ事するか葉影の兒さくら
同　小櫻かせよや風には隠れん坊
季吟廿會集（寛文十二年の巻）
わつまりて遊ぶ桂の里子供　（宗英）
かくれん坊に交らぬはなし（季吟）

等の句などのあるのを茲に紹介して置く。此遊戯も鬼となるものを定むる事もある、その時言ふ語は、

……かさつくれんぼーとわりやそつちへつんのきやれ、

また、

……つんつんつのめの……ぢやむぢやま鬼よなど、言つた、羽後邊では先づ幾人にても互に拳を握り出して、これを順に數へるやうに、

かくれんぼたてやな。あなめちくりちんとはしきしまたのけ、

また、

「にきりたぎり」、「しよたきりおけたのけ」

とも言ふ、又江戸では「いッちくたちく」と言ふ事をもしたのである、全體此遊は戸外にても戸内にてもする戲である、先づ鬼となる者を一人定めて、外の方を見よとか、目をつぶれとか命じて、子供等は皆それ〴〵適宜の場所にかくれおほせて、偖「もーいーよ」と言ふ、鬼になつた子供は其聲のする方を尋ねて、最初見付けたる子供を次の鬼とはするのである、「目かくし」は戸内にては危險のおそれがあるやうに見受けらるゝのである。誰でも知つて居るだらう、忠臣藏の七段目祇園の一力茶屋の場で、

「由良さんこちら手の鳴る方へ……」

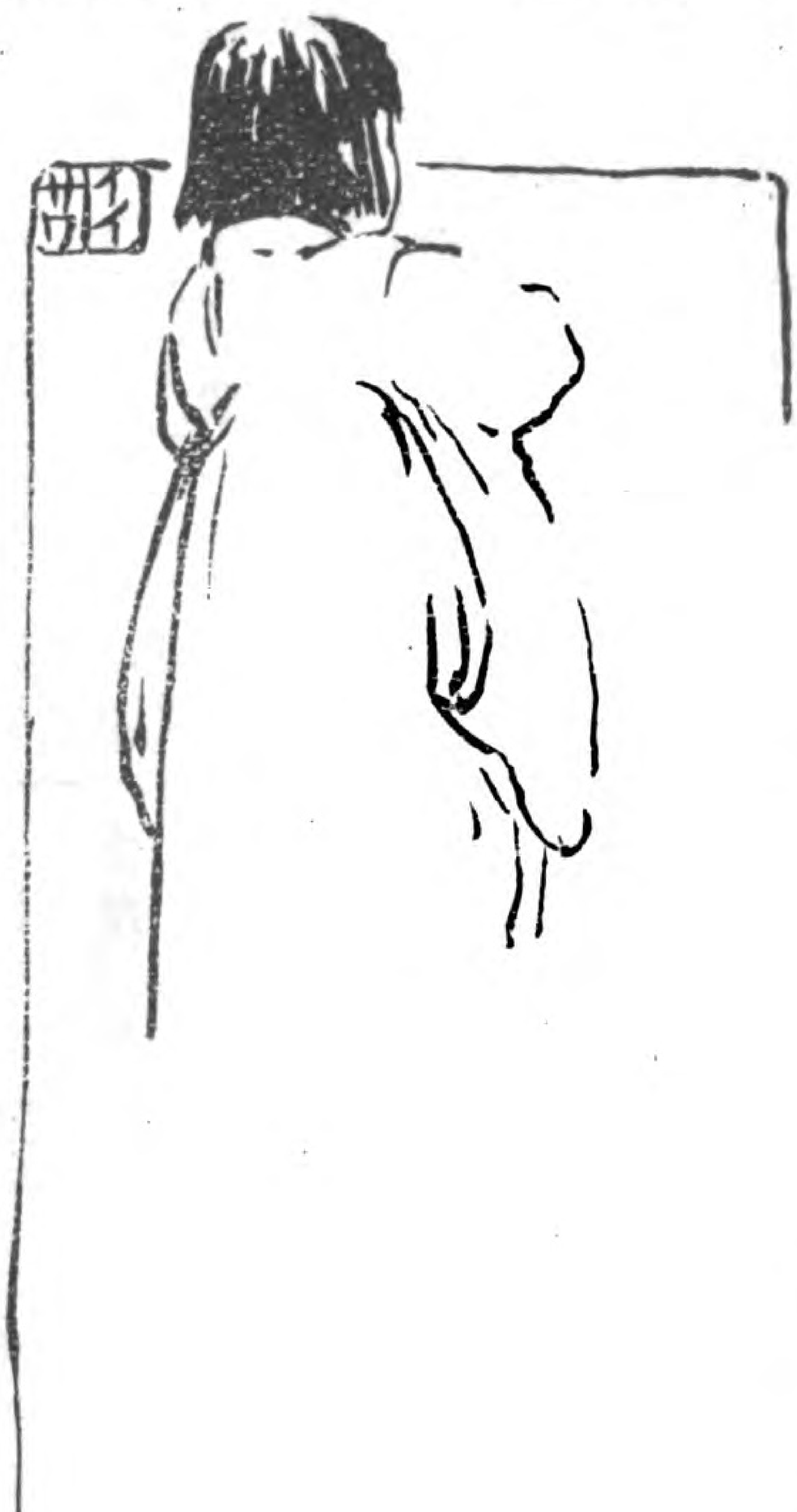
と言ふのが此遊戯を劇の上に利用したので、由良の助は即ち鬼になつたのである。

この遊戯の名稱も處々によつて違ふ、今その一二をあぐ。

かくれんこ　（出雲）
かくれんかんしよう　（相撲）
かくれかしか　（仙臺）

（六）竹馬

古い繪畫などには葉のついた生竹を弄んだ樣が書かれてあるので、古はただ葉付の生竹を今の小兒が春駒に跨るよーにして遊んだものである、或書に童子の持つたのは二本で、本で作つて居たとある處から考へて見ると、足利以後竹馬は二本になり、竹の本にて作るやうになつたのが、近く江戸時代から始まつたのでもあらうか、江吏部集には。



七歳始讀レ書　騎レ竹擊二蒙泉一
九歳始言レ詩　擧レ花戯二霞阡一

と見え亦古い歌には

竹馬を今は杖ともたのむかな
わらは遊びを思ひいでつゝ

また温故集に

竹馬や杖になりゆく
今朝の春

などと言ふ句も見えて居る。

（七）油證文

小兒が或約束をした、それを違へたと言ふ印に、己の髮の油を指に付けて柱などにおす事がある、是が所謂油證文と言ふ戯である、多分證文の印肉から考を及ぼしてかゝる遊戯を始めたものであらうと或人は言つた、とにかく江戸時代に盛んに行はれたのである。

（八）　錢介

江戸時代の頃京都で大きな「きさご」を緒に貫いて弄んださうな　これを「ぜゝすけ」と言つたげな。

（九）　芥かくし　草履かくし

何れも同じ方法にて一人尋ぬる者に中り、隱したる草履や芥を出さしむるのである、尋ぬるものを鬼と言ふ、明和二年川柳付句に

朝のうち草履隱しを廊下でし

などとあるのは妓女の禿を言ふたものである、偖この遊戯にて甲乙次第を定めやうとする時は、草履をかた〱づゝ脱いだのを集めて、空に向つて一度に投げて、馬か牛かと言ふ、その伏仰を言ふのである、例へば將棋の金か歩かと言ひ、碁の調か半かと言つてすると同しである、今はぢやん拳を用ゐるからさる事はせぬやうだ。

（十）　額の紙落し

紙を細長く剪つてその先を唾でぬらして額につけ、口のほとり迄ぶら下げたのを一生懸命に息を以て吹き落すのである、吹落した時は面白い、時によると中々紙の落ちぬためにぢれるので亦面白いのである、寛文頃の俳句に

短冊は紙つけ合か花のさき

と言ふのがあるが、是は鼻のさきに紙をつけ合つた戯から、鼻と花とを通はしてかゝる句を作つたのであらう。

（十一）　葱吹き

糝粉細工や飴細工で拵へた瓢簞などのやうに吹くと膨らむので、小兒は興に入つて葱を吹くのである、此遊は支那にもあるので、明の武宗と言ふ天子が退屈しのぎに、或時葱の黄色なのに息を吹き込めて膨らかしたり潰したりしては戲として居た、その御側に仕へて居る宦官が車に澤山葱を積んでそして天子に差上げた、それがため當時葱の價が一時騰貴したと言ふ事である、清朝にても葱を吹く事があつたと見えて夜譚隨錄と言ふ書中に、

啾々作聲、如二小兒吹一レ葱然

などと言ふ文も見えて居る。　（つゞく）

雜錄

水戸の婦人(一)

東臺小隱

水戸藩は初代威公(東照公の第十一男御諱賴房)二代義公(賴房の第二男御諱光圀)以來近頃の烈公(御諱齊昭武公の第三子)に至る迄世々賢明の君主相繼ぎ王室の式微を嘆き幕府の驕盈を憂へ文を奬め武を勵まし給ひしかば當時の候伯翕然として其風に靡き一國の泰斗四海の模範と仰がれし事は皆人の知る所にて、其頃の制度文物より名君良臣學者勇士の事蹟は正史に野乘に記載多けれど、女子の教育に就ては如何なる施設ありしか、又右の如き人物を生みたる女子平日の言行は如何なりしかと之を書籍に求め之を學者に質すに遂に其詳かなるを知るに由なきは洵に遺憾に堪へず、仍て諸先輩の隨筆中より婦女に關するものを拔萃して同感の人に頒つ、之に因て其一斑を窺ひ他日全豹を知るの小補ともならば實に望外の幸なり。

塀和善七の妻

塀和善七の屋敷へ喧嘩にて朋友を討果し掛込たる人あり、折節善七留主にて妻女是非なくかくまひおきける所へ、討れし人の舍弟尋來り、善七に逢んと言入けるに、留主の由答へけれ共、事急の儀なれば、内方に逢んと言ける故、妻女出れば、拙者兄何某に討れ候處、御かくまひ成され候由、何卒御指出候へと言ふ、妻女此方にてはかくまひ申さずと言ふ、急度付込候間指出なくば、卒爾ながら家さがしを致すべしといふ、妻女一寸待れ候へとて内へ入り、薙刀の鞘をはづし立出て、夫善七留主と申しかくまひ置べきいわれなし、善七留主に屋さがしに

あひては、夫へ申譯立難し、先づ自分を如何ともなされ、其上にて御さがしなされべく、と怒りければ彼人あきれて、御婦人を害しても詮なし、扨々是非なき次第なりとて空しく歸りぬ、程なく善七も歸りける故隣家へのがし、其夜出奔させしとかや。

是寶暦頃の事に係れり、此頃の女子教育は男子同様専ら勇武の氣象を養ひ武藝を鍛錬せしめたるものと見えたり、但し戰國を去る遠からざる當時にても勇武膽畧此の善七の妻の如きは稀なるべし、次の項は之を證して餘りあるなり。

右善七御番留守の夕方臺所へ置たる葛籠を何者かかつぎ出したるを妻女夫の枕刀をおつ取追掛けるに、泉町六太郎と云ふ者の前にて追付、後ろより葛籠をかけて切ければ、彼者倒れける故、止めをさし、六太郎の所にて、水をもらひ手を洗ひ、自らは堺和善七の妻なり駕籠を迎に遣し候様知せ呉候へと頼みければ、早速迎來り、駕籠にて歸りけるとなり。

人を斬り血を流し而も從容として平日に異ならざる有様古の勇士とても之に過ぐる事はあらじ、遠く賊を追かけ刀を揮ひしかば定めて髪も亂れ衣服も汚れたるならむ、其取みだせる姿を他人に見られじとて、駕籠に乘りて歸れる用意周到と云ふべし。

馬の手入

初代中山備前守殿池上新衛門(此時中山の十七騎なり)の所へ參られ候て庭前にある厩を見て馬能肥たくまし畢竟内室の手入よき故と稱美せられける。(中山は幕府よりの附家老なり)

此頃騎馬を畜ふ程の武士の妻女は、其身の勤めとして、自ら馬に秣かひ、湯を遣はせしものと見えたり、武官の妻女は今日にても此の心得あらまほしきものにこそ。

切腹の仕方

堺和善七子なくして紀州の御家士高木與五衛門の子を養子とす、後角之允勝賢と云、六才の時養子に來りしが、實母別るゝ時切腹の仕方を敎へしと、是

は勝賢、我等は腹の切樣を六才の時紀州の母に習ひて覺えたりと度々語りける由塙和家の言傳なりと。此婦人は水戸の人にあらざれど、當地に緣由あれば此に記しぬ。

老女の篤志

義公樣靑柳村へ御鷹野に入せられ候節、御一人農家へ御立寄遊ばされ、水を御貰ひなされ候へば老女指上ける、義公樣庭へ御出遊ばし籾俵七八俵積おきたるに、御上り遊ばされ候て、御腰を掛けさせられ水を召上り候へば、老女立出で制しけるは、その俵は御城米にて、殿樣へ上候籾に候、御士樣にてもあまりなる成され方に候と申ければ、義公樣尤至極せり、我等が過なりと御詫なされ御歸り遊ばし、郡宰に老女の年比、家の氣色、角に大榎のありしを印に御尋遊ばされければ、分明に分りける故、則老女が忰持分の田畠老女存生の内作取に仰付られ、是にて孝養致すべしと其志を御稱し遊ばされけるとかや。

當時の制度武士には斬捨御免と云ふことありて武士の意に逆ふ者は斬殺の禍に罹る、然るに此の老女武士の猛威を畏れずして貢米に腰掛くるの非禮を責む、其至誠鬼神を感動するに足れり、忽ち免租の恩典に浴して老後の安樂を得たるもの天の善人に報ゆる所以にあらずやとせんや。

妓女身受の金を賜ふ

豐嶋某兩三人同伴にて吉原に遊びけるが故あつて連の族人を害しける故、廓大騷動なりしが、連の人は幸ひにげ去り、豐嶋一人殘り、旣に難儀にも及ぶべきを、遊びける妓女の信義ありて、豐嶋を長持の中に隱し、自分の食を分て竊に養ひおき程過て歸しけり、豐嶋御屋敷へ歸り恐れ入つて上の御下知を待愼み居たるに、義公樣竊に豐嶋を御庭へ召させられ、逐一御尋遊ばされける故是非なく委細申上るを聞召し、上意に、其方行跡甚だ惡し、然れども妓女は實に信義の女なり、斯樣の者を受出し女房になしなば定てよき子が出生すべし、受出し候へと上意遊ばさ

れければ豊嶋答へて難有上意には候へ共金の手段に指支へ候と申上れば、義公樣奥へ入せられ、杉原の紙へ小粒を一包下し置かれ、是にて受出し候へ、不足ならば又遣すべしと仰せられけり、豐嶋有難き事心根に徹し早速受出しけるとかや。(以上諸項白石重隆著家庭舊聞)

義公良妻賢母を求めて娼妓の賤しきに及び給ふ、其用意の深き察し奉るに餘りあり、されば平素女子の教育に就ては種々思ひ謀らせ給へる事も多かりしならむに、今之を知るに由なきは遺憾の極みにこそ。

(未完)

臘虎と慈愛心

東川楊舟

余が先年根室に在りし時、久しく千島沿海にて臘虎(らつこ)臘に從事せしものゝ實驗談を聞き、同獸の特に慈愛心に深きことゝ、及び其夫妻間の頗る嚴格なることゝに感せり、聊か女子諸君の自省に價するものあるべきを信じて、左に其概要を叙述せむとす。

そも臘虎は幾多の海獸中、最も完全なる且つ高等なる身體組織を有するものにして、從つて其感覺の機敏なること實に驚くべきものあり。故に之を狩獵するには、特に最も迅速なる活劇を演ぜざるべからず。されど、其母獸の慈愛心に深き、所謂慈母の赤兒に於る底のものなるがゆゑに、獵場に於てもあたら神出鬼沒の身を以て、兒獸の愛にひかされて。脆くも獵夫の銃先きに殪るゝもの多しといふ。尚は其慈愛心に深しといふ實例を擧ぐれば、この獸はもと露領提督島に產して、夏秋の候、膃肭獸(おつとせい)と共に、千島方面に向つて出稼ぎに來る由なるが、(尤も千島沿海にも蕃殖せざるにあらず)中にも其牝獸は悉く哺乳兒を腹部に載せて、數百里の海上を仰向きに游ぎつゝ來るとの事にて、殊に其哺乳兒を庇護するの狀は、人類と雖も遠く及ばざる所なり

と、且つ之が狩獵の際に於る實況を聞くに、實に驚くべきものあり、狩獵せし者の實話に曰く。

沿岸二三里の處をそろ〳〵船を進めて居ります中に、此所ぞ臘虎の居るべき場處と思へば船長は乃ち船檣の上に昇りて、望遠鏡にて果して臘虎の居るや否やを確めました上で、いよ〳〵居るといふ見當が付きますと、船長は船員に向つて先づ其用意をなさしめ、次ぎに進めといふ號令を下します、すると端艇は臘虎の居る方面に向つて、飛鳥の勢を以て進み行きまして、臘虎を三方より取卷き、ひし〳〵と岸邊へさして攻め詰ますと、



臘虎の方では頻りに支那兵をきめこんで、波間に身を潜めながら、狂氣の如く逃げ廻はりまするさまは、なか〳〵壯快でありますが、中にも彼の牝獸におきましては、斯かる場合にも決して其哺乳兒を放しませぬのですから、哺乳兒を抱きながら彈丸雨注の中をくゞり逃ぐる其有樣は、一層目覺しくもまた憫然であります、而して若し母獸が過つて其の子を手放すことあらば、其の子はまだ游ぎが出來ませぬから、唯だ波のまに〳〵流るゝ斗りで、宛も人間の赤兒が泣くやうな哀れな聲を出して、其母を尋ね呼ぶのですが、其狀は如

何にも憫然であります。就中其母親に至りては、全く狂氣となりて、自身が彈丸の下に殪るゝをも顧みず、其の子を尋ねて端船の方へ迷ひ來るのですから、狩獵の場合には必ず牝獸の殪るゝものが多い次第であります。

あゝ、斯世に生とし生けるもの、なべて子を思はぬものはなけれども、斯かる九死一生の場合に當ても、なほ且つ人を怖れず銃を憶れず、親子の愛情を全うするものは、特に此獸に於て之を見るのみ。誰かこの悲哀慘憺なる實況を目撃して惻隱の情を惹起せざるを得むや。然かも却てこれを好機失ふべからずとして、慘酷なる目的を達せむとするものは、獵夫なり。あゝ、慘酷なるものは獵夫なる哉

昔時孟孫といへる人、山に獵して鹿の兒を得しかば、其臣下の秦西巴といへる者に、之を持ち歸りて烹るべしと命じけるに、秦西巴は、鹿の母がその後につきそうて、いと哀れ氣に泣き悲むを見て、之をつれ歸るに忍びず、乃ち後日の譴責をも顧みず、之を縱ち還へしければ、孟孫怒つて之を放逐しける。されど、其後僅に一ヶ年を出でざるに、孟孫再び西巴を召して其子の傅となしぬ。當時孟孫の侍臣等は曰く、西巴は君に罪あり、今ま以て儲君の傅となすは如何ぞと。孟孫の曰く、否とよ、彼は慈愛の心に富むものなり。慈愛の心に富むものにあらざれば、眞の勇者にあらず、六尺の孤を托するもの、其れ西巴を措きて他に求むべけむやと、左右皆な默しぬとなん。あゝ、慈愛の心は仁の要素、之を小にしては六尺の孤を托すべく、之を大にして千里の命を寄すべし。嗚呼慈愛なる哉。

而して梱内の事務を整へ、兒子の養育を掌るものは、女子諸君の任なり。果して然らば、女子諸君と慈愛心との關係の如何に密接なるかを知るに足る、べし。聯想すれば「ナポレオン」と「ジョセフヒン」との愛情の濃かなりしも、其初めを原ぬれば、亦慈愛心の發動に外なきなり。佛國革命後「ナポレオン」は新政府の命を受けて、再び巴里に一揆の起らむて

とを虞れて、都下に散在する兵器を沒收しつゝありけるに、一日、突然にも十二三歲の小兒が大將に面會せむことを申出でける。「ナポレオン」は、快よく之に面會を許しけるに、彼の小兒はいと無邪氣なる而かも感情深き面持ちにて「ナポレオン」の沒收しつゝある兵器の中に、己れの亡父の寶劍も加はりありとて、之を返されむことを歎願に及びぬ。「ナポレオン」は之を堆積せる刀劍の中より探り出して與へし上に、尙はいと慇ろに慰めやりければ、彼は小兒ながらも感情の爲めに辭出でず、僅に默禮して退出しける。「ナポレオン」後にて以爲らく、斯く行儀正しく且つ孝心深き小供を敎育せし其母人は、嘸ぞや慈愛心の深き淑女ならむと。是より其母を見むとする念禁え難きまでに至りぬ。

此にまた彼の小兒の母なる人も、當時旭日の勢ある「ナポレオン」が、其子供に面會を許し、而かも亡夫の遺劍を渡されし上に、尙は親切なる言葉を以て、我愛兒を慰められしと聞き、其慈悲心の深きに感じ、翌日母としての禮を述べむが爲めに「ナポレオン」を訪はれける、これ即ち後日「ボナパート」將軍の好逑して、閨秀の聞へ高き「ジョセフヒン」其人なり。而して彼の小兒は其長男なる「イユチーイン」なりき。これ「ナポレオン」と「ジョセフヒン」との會見の初めにして、之を誘導したるものは、即ち慈愛心の發動に因る也。

然るに世間の廣き往々にして、人の母たる義務を全うし得ざるのみならず、其無情無慈悲なる、彼の獵夫と撰ぶ所なきもの少なからず。此の如きは人にして臘虎に耻づべきものと云ふべき也。

且つ臘虎は獨り慈愛心に富むのみならず、また能く一夫一婦の自然性を保ちて、劃然混ずべからざるものあり。彼の一夫一婦の法規の下に、なほ副妻を置き、妾を蓄へ、恬然として耻づることを知らざるもの、若くば女子にして、其生命とも稱すべき貞操を汚すもの少なからざる今日、茲に臘虎の記事を揭ぐるもの亦徒爾にあらざる也。

（をはり）

御注文の節は女鑑廣告に依りたる旨御附記被下度候

新刊

佐藤天風編

クレヲパトラ

四六判洋裝美本定價廿五錢郵稅四錢

嫣笑一番英雄シーザーを擒にし啼涙百行豪傑アントニーに殉したる彼女が埃及王國の爲に婦人の武器を揮うて擒縱殺活縱横自在の働きを記したる本書叙事の雄大且つ悲哀なる何人も興懐を催ふさゞるを得ざる也

大町文學士著
常磐御前 全一冊
四六倍判三ツ切 定價十三錢郵稅二錢

國府犀東著
靜御前 全一冊
四六倍判三ツ切 定價十三錢郵稅二錢

長田偶得著
顔世御前 全一冊
四六倍判三ツ切 定價十三錢郵稅二錢

小林文學士著
勾當内侍 全一冊
四六倍判三ツ切 定價十三錢郵稅二錢

濱田文學士著
袈裟御前 全一冊
四六判三ツ切 定價十三錢郵稅二錢

女鑑編輯局編纂
ひめかゞみ 全一冊
菊判洋裝 定價廿五錢郵稅四錢

梅澤和軒著
清少納言と紫式部 全一冊
四六判洋裝 定價卅五錢 郵稅六錢

發行所 東京京橋區築地 株式會社 國光社

菊（つゞき）

小畑蓬城

古幹を充分保護して良好の新芽を得んには、掘り起して室に移すを可とすれども、斯は其が儘園に置くも變種の恐は毫もなし。

種子を下すは正月(陰暦なり以下同じ)に於いてす。菊徑に說く所はまづ馬糞を置き、上に土を鬆く被ひて一寸鏝にて適宜に播種するなれども、滋は必ずしも馬糞人糞を要せず、又播種の方法も必ずしも徑の如くならざるべし。凡そ滋料に粕、漿、哺、秣の四あり、粕とは滋料を糠、麥糠等に混じて堆積して黴を生ずるに至らしめしもの、魚油を使用する時多く此の方法を採る、漿は水に混じて放置して腐敗せしめしもの、魚類、貝類、又は魚油にも斯の法を採り阿膠を用ゐる時には膠一斤を水五斗に溶解し、尙ほ食鹽五合を加へて放置す。哺は藁等を小屋に堆積し水を加へて蒸々として熱して朽つるに至りしもの、秣は鰹滓、鯨骨等を粉末として用ゐるもの。而して糠のみを粕とする時は少量の硝石を混ずべし。

寒中に於いて數回鋤を入れたる、普通幅三尺長六尺に作りたる畑の、正月中雨に逢ふて稍固まりたるを、適宜の大いさに嚴重に區分し、昨年收めし花の瓣を去りたる蘂のみを均一に散布し、上より薄く土を被ふ。各花若し混ずる時は移植に當つて甲のみ殘して悉く乙を棄つるの虞あり、區分は飽くまで嚴密にせざるべからず、

種子は大概生ぜざることなし、已に生じて苗となりたらば、八十八夜の前後、滋雨の下りし時に於て移植を行ふ。

畑は適宜の大いさなるべし。まづ哺を布いて土を置き、苗を下す箇所には一々粕を加ふ、嚴重にすれば苗と苗との間は少くも三尺以上を隔つべし、斯は甲乙が根に於いて混和せざらんが爲なり。

能く發達したる苗のみを撰んで八十八夜に移植し置かば、五月雨に及んで三尺以上(大輪菊を目安とし

たるなり以下同じ）に達す。梅雨の中比再び移植す。再度の移植後又移植することあらざるが故に斯の時には充分花苑を撰びて、必ず其の觀んと欲する所に於いてし、造園の方法にも玉階、連珠、晨星、層樓、金莖、羽蓋、母衣等の種々あれども、普通に長高き大輪を造らんとするには三尺以上を隔てゝ分植し一本毎に周圍を窺つて藥又は秣を施し、力竹を與ふ。

凡そ菊を愛する者に三等あり。天然山野に生ずるものを愛して或は之を庭園に移植し、各產地に依て區別して務て本性を失はざらしめんとする者を上とし、眞に大輪菊に尙ぶ所以を知り、自ら造れば力めて怠らず、他の園に行きては賞すべき道を辨ずるものゝ之を中となし、只花の大に色の複雜なるを喜び接木の咲分を見れば一層喜び枝を屈撓して種々なる形状に擬したるを見ていよ〳〵喜び、菊人形などを見るに及んで無上に喜ぶ者之を下となす。上は君子の屬、中は雅人と俗人の高きもの、下は俗人の低きものと下司なりとすべし。



大英の菊、高さ四五尺乃至七八尺雪白の花朶尺に垂んとす、之れ寔に喜ぶに足ると雖、若し幹根泥に塗れて葉の無きことと二三尺、泥色に變じたる枯葉のみ怪しく煩く附着したらんには、已に菊としての價値を半減す。幹根の葉は何故に枯るゝか、开は說明するの必要なからん、只疎く植ゑて空氣の流通をよくし、水を施したる、雨の降りたる、凡そ葉に泥の附きたる時には直ちに筆に水を含ませて洗ひ落すことと苗の頃より怠る

ことなくんば、葉は常に蒼々と茂つて枯るゝことなし、是實に容易の業にあらざれども斯の如くならずんば眞に菊を作るものといふべからず。
初秋の頃又穿つて液料を施し、八月に入つては決して根を穿つべからず。炎暑に日を覆ひ初冬に霜を覆ふことは爲すもよし、爲さぬもよし。
變種は千態萬樣、優劣を定むることも容易ならざれども、大別すれば抱へ物、上咲、抱へ咲、寄せ咲、丸咲、つゝみ咲、吹上咲、矢筈咲、七咲等にて、概しては花の大きなると、蕚の締りたると、色の鮮明なるとを以つて優劣の標準とす。
已に新變種を生じたる後、之に名を命ずるも隨分興味あることなり。命名に一定の方式あるにあらざれども、實物に關係なき地名、人名等を命ずるは煩さきことなり。加之地名を命ずれば産地と紛るゝの恐もあり、然れども強ち拘泥すべきにあらず。公時といふ俗極まる名なれども、實物の花が栗々と圓くして紅く、如何にも俗々しければ結句實に適ふとこそいふべけれ。木綿襷、長局、殘月、檜扇等惡からぬ名なり。山姥、高蒔繪など好からぬ名なり。詮ずる所は其人の好むところに隨ふより外なからん。
雪白の大輪の眞紅にて輪廓せられたるを雪中灯といふ、名は何となく厭なれども、容く得らるゝ倫にあらざるが故に、其道の人は珍重すること甚しく、能く二百金三百金の價格を保つといふ、尤も是等のものを愛藏する人は天然の法則に戻り、蕃殖を殺いで價格の下落を防ぐ、而して一方に又熱心家あり、鋭利なる小刀にて其の葉を削ぎ取り、切口に卯白を塗りて持ち歸りて、懇に培ひて根を生ぜしむることあり。

菊五首

養老

その昔汲みしやこゝら鳴る瀧の
水にもまるゝ岸のしらきく

吉野

三吉野や故き京と聞くあたり

咲き殘りたるしら菊のはな

伊吹

名に高きもくさは枯れて秋山に
千代を告げたるしらきくの花

木綿襷

さらてたに千歳ときくの花の中に
神代ながらのゆふたすきかな

寒菊霜にあひて紅葉したるを

天の下花はあれども花紅葉
とりあつめたる花はこの花

ニーツェの婦人觀

在文科大學　守屋元々

フリードリヒ、ヴヰルヘルム、ニーツェハ西紀千八百四十四年獨逸國に生れ出で丶、間もなく、その奇拔なる議論と絶妙なる文章とで大に一世を驚倒いたしましたが、ふとしたところから、狂人となつてしまつて、どうしても正氣にもどらない、舊世紀の終の幕が下ると同時に、しはらしい妹の手を枕にしながら其儘もろくも死でしまつたといふ誠に悲慘極まる大哲學者であることは皆樣で存知でありませう。

わが國にをきましても、數年以前からニーツェの說が盛に擴まりまして、その說はイーとかイケナイとか、風教に害がアルとかナイとか、御本尊樣は全く狂人であるとか天才であるとか、隨分やかましい事であります。それで手當り次第に今の人及文物を罵倒してゐる此のニーツェがどういふ風に婦人をば輕蔑し罵倒しているかを吟味して聊か反省の材料を得るのは、女子にとりましては少しも無駄ではありません。

一體ニーツェは六歲の時分に父に亡くなられましてからは、その家庭は氣六ケ敷い祖母さん、內氣なお母さん、それにニーツェ好きの妹など、皆女計りであるものですから、ニーツェは其中にゐてよく女の缺點を見拔いてをりまして。後來彼が痛く女を輕蔑す

るやうになつた有力なる原因は全くこゝにあるのだといふ人もありまするが、兎に角直截なる短句と巧妙なる寓言とを以て、厭まで女を輕蔑してゐるのは事實であります。

今私が皆様にご照會しやうといふのは「ツァラツーシュトラ如是説」の第一篇第十八章「老幼の女」といふ文章であります。一體このツァラツーシュトラ如是説といふ書物はニーツェ大自慢の書物で、これは我教の經典であつて、宜しく七ヶ國の言葉に譯さるべきものだといふたそうでありますが、これはご存知の波斯の祆教の教祖ツァラツーシュトラといふ人の莊嚴なる名丈け借りて來まして、そのツァラツーシュトラの遊行説教にと寄せて、自分の超人論(ニーツェの超人の解釋には色々面倒な説もありまするが、こゝでは强大優勝なるニーツェの理想の人間であると心得てゐれば、次の本文を讀む上に差支はありません。)を述べたものであります。だから第一篇第十八章も超人を生むといふ主意で書いたものでせうが、一句一句細かく讀みますると、隨分女の讀者諸君には腹の立つこと計りであります。けれどもこれが所謂他山の石でありますから、此の書物を書いた時分にはニーツェは既に發狂してをつた、狂人の痴言には聞く耳持たぬなどゝ仰せられないで、精しく之を讀み、靜かに之を觀じて、さて最も苦き鋭き忠言(ニーツェはそんな積でなかつたに致しても)として幸に顧らるゝところがありたいものでございます。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

『いかにツァラツーシュトラよ、汝今薄明の夕べの路おぼつかなげに辿り行く。見よ、汝の衣の下深く、何物をや秘め隠せる。

『そは汝に送られし寳か、はた汝に産れし緑兒か、さなくば汝今盗の途に出で行かむとはするなるか。汝魔神の友なるツァラツーシュトラよ。

ツァラツーシュトラは語りぬ。

まこと、わが友、わが持てるは我に送られし寳ぞ

小さき眞理ぞ。

この眞理こそはかの緑兒のごとく氣儘にして、その口堅く堅く閉ぢずば、こよなく聲高に叫び立てむ。

けふ我れ日暮れなむとして、獨りわが路を辿りしに、老たる女出で逢ひぬ。

こゝに彼女心深くも我に語らく。

『ツァラツーシュトラは我等女子共に種々のことを敎へたり。されど我等は彼より女につきての敎何事をも聞かざるよ。

かくて我、彼女に答へぬ。



女につきての敎言は唯だ男のみ聞くものぞ。

彼女言へらく。『女につきての敎言、願くば我に聞かせてよ。我はや歳幾十路を重ねて、はた長く其を物憶えゐるむや。

こゝに我、老女の串言をうべなひて、徐ろに語り出でぬ。

女に關する一切のことは一つの謎なり。されど其

謎『子を生む』てふ一語をもて解かれ得む。
女に取りては男は手段ぞ、目的は常に兒なるよ。
然らば男に取ては女は何ぞや。
げにや眞の男は二樣のこと、危險と遊戲とを欲りす、されば女は、いとも危險なる玩弄具として、眞の人に求めらる。
男は戰のために敎へ育てらるべし。女は戰士の鬱散のために敎へ育てらるべし。其他一切の敎育はたわ事ぞ。
果物の甘さ過ぎたるも戰士の好むところにあらず苦みあるこそ實にこよなき女にぞある。
女は男よりもよく、小兒を取扱ふに巧なり。然も男は女より更に小供らしきよ。
眞の男の心の中に、あどけなき小兒隱れ居るを知らずや。行け、汝女子共、行きて男の心の中より、そのあどけなき小兒を引き來れ。
あはれ、女は未だ曾てあらざる世界のもろもろの德によりて輝ける寶石の如く、純粹にして美しき玩弄具たれ。
星の光の美はしきが、汝の愛に輝けよ。汝の希望をして『妾は超人を產みたし』といはしめよ。
勇氣をして、汝の愛の内にあらしめよ。汝の愛をもちて、汝の畏敬する人に襲ひかゝるべし。
汝の名譽をして、汝の愛の内にあらしめよ。凡そ、女の名譽とするところ、この外にあらざれば、汝の愛は、汝が愛せらるゝより更に益々大なるべく、その愛劣らず後れざるを以て、汝の唯一の名譽とせよ。
女、男を愛するとき、男、女を恐るべし。げにや女は男のために一切を犧牲に供へ、値あるもの此の外になしとすればなり。
女、男を惡むとき、男、女を恐るべし。げにや男はその心の底に、唯だ猛惡あるのみ。女に至りてはそこに卑劣殘忍を藏すればなり。
女はいかなる人をこよなく憎むや。――かつて鐵、磁石に語りて曰く。『汝は我を引付くれども、我を引付くる强さ持たざることあるとき、我はこよなく汝

を憎く思ふよ』と。

男の幸福とするところは『我欲す』にあり。女の幸福とするところは『彼欲す』にあり。

女、男に從順にして、その完全の愛を遂げなば、彼等は一整に考へむ、『見よ、今この世界は圓滿しぬ』と。

げにや女は從順なるべく、その皮膚を捨て丶深淵を求むべし。女はかの淺き水の上、漂々風に追はるる泡にして、皮相は彼等の氣質なり。

されど、深きは男の氣質ぞ。その流は彭湃として地底深き深き洞穴に轟けり。女は男の力いかに大なるかを推し測れども、彼等の無能、などて其偉大の眞相を覺り得む。

かくて老女は我に答へね。『ツァラツーシュトラは幾多いみじきことを語れり。殊にいとうら若き少女の爲に敎へしよ。

『あはれ奇しきよ、ツァラツーシュトラは女を識れること少なきに、然も女につきていふとの當れるは。かれ女に組し易しと思へるが故か。

『やよ又我に小さき眞理あり。汝願くば、此の眞理を携へ行け。われ今歲老て此を持つに堪えず。

『この眞理は、汝深く包み藏せよ、その口堅く閉ぢよ。然らざれば、叫び出すこと世にも聲高ならむ。

我はいひぬ。

老女よ。我にその汝の小さき眞理を與へよ。

こ丶に老女語りて曰く。

『汝、女の處に行くならば、汝の鞭をな忘れそ。

かくの如くツァラツーシュトラは物語りぬ。（完）

寸鐵物語（つゞき）

阿多廣介

◎官設の女學校は元來國庫若くは府縣費を以て設立されたる者なれば、校舍其他の設備に付ては申分はない、且つ其校長たる人は多年實地敎育事業に當り

教員は男女高等師範學校卒業生か若くは文部省檢定試驗に及第して表面の資格を備へた人を以て組織されてある然し多くは鰻上りの連中で温しいから女學校向きと云ふ方らしい從て敎育方法等萬端が御役所流に整理されてあるけれども主義方針に於ては平凡だ私立の女學校は校長が自ら資本を工夫したものなれば校舍や設備は未だ不完全は免れない然し苦心慘憺の決果であるから寧ろ多とすべしだ且つ其の德望と手腕に至りては中々官設連中の及ぶ所でない從て生徒敎養の方法に於て自ら其の校長の主義方針に基き教員も其指揮に服して從事せるものなれば獨特の所がある固より前述の營利一偏より割出したる學校は論外である。

◎德望手腕を有せる校長の設立されたる女學校は益益盛大に赴くやうだ利益的の學校は永續しないのは當然のことだか陶汰の理法は爭はれぬものなり。

◎三輪田女史の學校は自著女子の本分女子處世論の主義を以て立ち下田女子の實踐女學校は其名の如く又女史遊說の持論に背かず女子の職業を授け所謂恒產を作り恒心を養成する方法を取れり棚橋女史も亦今春東京高等女學校を設立されたが其目的は人の妻たるものを養成するにありと簡單明亮に宣言された女史は女道叢話と名くる自著を近々發表さるゝ筈であるが十六版を發行したる女子の本分と拮抗するであらう且つ東京高等女學校も三輪田高等女學校と共に隆盛になるのは決して疑はない西澤之介氏は又一種の國粹主義を以て日本女學校を設立せられてあるが日淺きも六百名以上の學生を收容し中々多望である且つ同氏は更に此學校を女子大學とするの計畫あるとのことなるが同氏の手腕と及び一種の主義は必ず協贊者の力によりて成効するであらう。

◎江原先生の東洋英和女學校は摸範的の政治家敎育家たる先生の才德によりて總攝せらるゝものなれば中々完全にして且つ盛大である東京女學館の如き若くは其他宗敎家の設立されたる女學校も少くないが總て校長職員に於て一定の主義を持し德望手腕を

有せらるときは皆成功して行くやうだ孟子の所謂王何ぞ必ずしも利を謂はんとは實に此の事だ。

◎日本に離婚者の多い原因は種々あるやうだ次號より列擧することにしませう。（つゞく）

諸人種の挨拶法

菅原倭翁

挨拶と云ひ作法と云ふ、是れもと親愛と敬禮の意を表するに在て、日本人の頭を下げ、西洋人の手を握るなど、其形式の種々異なれるは單に習慣によるものと知るべし、その動作の異なれるを見て笑ふべくんば、軍人の擧手し僧侶の合掌し、神官の拍手し、耶蘇宗の『アーメン』を唱ふるなど一として奇ならざるはなく、又可笑からざるはなし、今その最も珍らしきもの二つ三つ掲げて一笑を博せんかな。

アイヌ人は男女その作法を異にせり、男子は先づ兩手を摺り合せて拜むが如くし、次に物を戴く如くに兩手を額の邊まで上げること二度、それより双方の手を頬に當て下方になで下して其まゝ鬚を握り終に手を放すなり、以上の動作に伴ひて『イラムカラプテ』と云へり、又女子は右の手の人差指にて自己の鼻の下を横撫でするを禮となせり。

ヒンヅウ人は、貴人に對して兩掌を合して額の邊に上げ、次に双方の手を體の側面に垂れるなり、略式には右手のみにて右手を額に當て次に體側を垂下す婦人には禮なし。

アウストリヤ土人は、來客に接すれば客の胸と我が胸とを抱き『ウーウー』と唸る。

阿非利加ダホメ人は、貴人の前に出つれば腹這ひになりて塵埃を被ると云ふ。

印度のトダ人は足を頭に戴くを禮とし、フイジイにては互に體の香を嗅ぎ合へり。

南洋バンクス嶋は彼我互に右手の中指を摘み急に引きて音を出させるを禮とし、亞弗利加のバコタ人は貴人に遇へば仰向に倒れて『キナボンバ〳〵』と云ひ

ながら轉げ廻るなり。

アラビヤ人は、高下によりてその動作を異にせり、その簡なるものより擧げんに。

一、右手を胸に當つ、
二、右手を唇及び額に觸る、
三、頭を少し前に傾け、二の如くす、
四、身體を少しく前へ傾けて、二の如くす、
五、右の手を土に着けて、二の如くす、
六、先方の手に接吻す、
七、先方の袖に接吻す、
八、先方の衣服の縁に接吻す、
九、先方の足に接吻す、
十、先方の居處の敷物、又は其前の地面に接吻す、

ニウジイランドにては『タシギ』と云ふとあり、久振に合會せしもの之を行へり、各自席の如き衣服にて面を覆ひ目のみ現し、豚のやうに唸りながら段々と近寄り、終に鼻と鼻との押合を始むるなり、此間長きは三十分に及ぶと、

西藏人は左右の母指を立て臂を張り、體を前方に傾けて舌を出すを禮とせり。

小兒の樂園

紅綠子譯

昔々、此の世界が未だ幼稚であつた時に、父もなく母もない太郎といふ子がありました、太郎は獨りで淋しいからといふので神さまが矢張兩親のない外の子を遠い國から送りました、太郎と共に住ひ其友達となり其手助となる爲めに送つたのです、此子の名は御花といふのです、御花は太郎の家に入つた時に一番最初に目に付いたのは大きな箱です、それで御花は戸口を跨ぐと直ぐに太郎に尋ねました。

『太郎さん、此箱の中に貴君は何を入れてゐるんです』

『僕の好な小さな御花さんや、其れは秘密です、そして其箱の事は何人にも問ふて下さるな、箱は安

全に保存するために此に置てあるのです、何が中に入つてあるか僕も知りません』

と太郎は云ひました。

『併し誰が此箱を貴君に與げましたか、そして其れは何處から來たのです。』と御花は問きました。

『それも秘密です』と太郎が答へました。

『いやな事ですね、貴君は如彼見つともない箱が其處にあつても良んですか。』と御花は叫びました、

『そんな事考へるのは御止しなさい、私共は外へ出て他の子供と面白い遊戯を爲ませう。』と太郎は慰めました。太郎とお花の生きて居た時代は數千年前で、只今の世界は其時と比較ると大相に違つて居ます、其時には凡ての人は皆々な小兒でした、そしてもう危險といふ事はないから兩親がお保育をする必要もなかつたのです、衣服も繕ふ事も入りませんし飮んだり食べたりするものが澤山ありました、何時でも何か食べたいと思ふ時には食物が木に生つてるのを見付けるのです、小兒等は朝に起きて見ますと其日の夕飯の花が木に咲いて居ます、又た夕刻になりますと翌日の朝飯の柔らかい芽が木に萌えて居ます、ほんとうに樂しい生涯でありました、何の働をする事もなく苦勞することもなし、只だ戯れ遊び踊つたり跳ねたり、小兒の話をする聲や、鳥の様に歌ふ聲や、又は喜んで笑ひ出す叫び聲の外は朝から晩まで何もないのです、それで又た不思議なのは此の小兒等が互ひに喧嘩をしない事です、又泣いたり騒いだりする事もないのです、此の世界が始まつてから此中で一人も家の隅に離れて行つて拗たり邪けたりする事がないのです。此んな時代に生れたらどんなに愉快な事でせうか、實に只今は悪むべき小さな羽根の生えた怪物の「苦惱」といふものが蚊の如く無數にありますが、此の時代には其んなものは少しもなかつたのです。だから小兒の心の中で一番大きな不平といふのは只だお花が此の不思議な箱の秘密を知る事が出來ないといふ丈け位のものでありました、此不平は初めには「苦惱」の只だ薄い影の様であ

りましたが、一日増しに生長くなりまして、暫らく
の中に太郎とお花の家は他の小兒の家よりも日の光
りも薄くなつた様に見えました。
『何處から其箱が來たのでせう』と御花は自分で
言い續けて居ました、そして太郎に向つて
『一體其の中に何が入つてるのでせうか』　と
聞きました。
『いつでも貴孃は箱の事ばつかり言つてるんですね』
と太郎は言ひました、太郎はモウ此問題に倦き倦きしたのです。
『お花さん、貴孃は何か他の御話しをして下さい、さあ行きませう、私共は行つて無花果を集めて木の下で其れを夕飯に食べませう、貴孃が食べた中で、一番甘い一番汁の多い葡萄の生つてる蔓を僕は知つて居ます』
と太郎が言ふと、御花は焦心さうに
『貴君は何時でも葡萄の事ばつかり言つてるのですね』
と叫びました。



イーサワ

『そんなら外へ出て友達と面白い事して遊びませう』
と太郎は言ひました、太郎は此時代の他の小兒の様に矢張大層温和しい子でした。
『妾は面白い事が倦きました、面白い事なんか無くとも構ひません、そして妾は今まで面白い事をした事がありません、此厭やな箱のために妾は氣を奪られて考へてるのです、其中に何があるかお話し下さらなければいけません』と拗ねたるお

花は答へました。

『僕が五十度も百度も繰返して言つた通り僕は全く知りません、知らないのに如何して話されますか』と太郎は少し激としました。

『貴君は其れをお開けなさい　と御花は太郎を横目で見て言ひました。

『お花さん貴孃は何と考へてるんですか』　と太郎は決して開けてはならぬといふ條件付で預けられた箱のために、非常に驚ろいたる恐怖の心を顔に表はしたので、お花は最早言ふても駄目だらうと思ひました、けれどもお花は未だ箱の事が氣に懸つて口に出さずには居られません。

『そんなら此箱が如何して此處に來た丈けでも聞かして下さい』

『それは貴孃の來る少し前に、戸口に置いてあつたのです、大層利巧さうな人で、其れを置く時に笑はずには居られない樣に見える素振の人が置いて行つたのです、其人は奇態な外套を着て、そして半分は羽根で作つた樣な帽子を冠つてるから翼を持てる樣に見えます』

『如何な杖を持て居ましたか』　とお花は言ひました。

『あゝほんとうに變挺な杖でしたよ、棒に二匹の蛇が捲まつてる樣で、僕は其れを生きてる蛇かと思つた程に上手な細工でした』

『妾は其人を知つて居ます、』　とお花は叫びました『他の人では誰も其んな杖を持て居ません、それはクイックです、彼人は箱と一所に妾を連れて來たのです、だから此箱は妾のために置いて行つたのに相違ありません、多分妾の着る奇麗な衣服と貴君と遊ぶ玩弄具と二人で食べる甘美ものが入つてるのでせう』

『さうかも知れません』　と横を向きながら太郎は答へました。

『併しクイックが歸つて來て私共に話すまでは、貴孃も僕も箱の蓋を開ける權利はありません、何と

沒分曉い子だらう』と言ひながら家を出る太郎を見ながらお花は呟やきました。

『妾は最う少し彼人が話せる人なら良いけれど』

お花が此に來てから太郎は初めてお花をも誘はずに單獨で出て行きました、彼は一人で無花果と葡萄を探して又たお花の樣な人でなしに他の仲間と如何な事でもして遊ばうと思つたのです。彼は箱の事を聞くのは死ぬ程倦き〳〵したのです、そしてクイックは何故に彼の箱を御花の目に留まらない所に置て行かなかつたかを恨みました。於花は一生懸命に箱の事ばかりを言ひ續けて居ます、箱、箱、箱、箱の外は何も言ひません、恰も箱の爲めに魅まれて居る樣です、此箱は於花も之れに躓き太郎も同じ樣に躓いてそして彼等の四本の足に怪我しなければ、此家に置く事が出來ない程大層大きく見えて居ました。

扨て憫れなる太郎は、朝から晩まで箱の事を聞くのは厭でありました、殊に此んな幸福な日の下に世界の小さな小兒等は惱みなどを少しも知らなかつたのですから、此んな時に如何してよいのかも知りません、ですから聊かの惱みも其時には大なる惱みであつたのです、丁度私共が大なる困難に出逢ふ時の樣に。

太郎は出て行つた後にお花は箱をながめて立ちました、彼女は百度も千度も箱に向つて『いやなもの、いやなもの』と呼びました、併しお花はそんなに言ふても此箱は實に美くしい箱で、どんなお座敷に置ても立派な飾物になるのです、奇麗な木で造つて。其の表面は黒く美くしい木目があつて、其上にお花の小さい顏が映る程磨き立てゝありました、小兒は鏡が不用いから、お花は只だ此の鏡があるために箱を厭がるといふのは不道理話しです、椽と角は最も驚くべき巧妙な、彫刻があつて、椽の周圍に美くしい男と女の繪と又一段と美くしい小兒等が花と小枝の入り亂れて居る中に凭りかゝり、或は戲れ或は歌つてる繪がありました、此等の種々のものは恰も花や小枝や人間の形が一括めに束ねられたる美くし環

の樣に見えるほど精密に寫されてありました、併しお花はもつと近く寄つて其れを見詰めて其處の點に手を付けると此繪の前に見た樣なものは何も見えなくなります、實は其中の美くしい顏が其れを横から見ると醜く見えるのでありました。

凡ての中で一番美くしい顏は蓋の眞中に浮彫になつて居るものです、其處には黒い滑々した磨き立てた木と、額に花環を以てる一つの顏が眞中にある外何もありません、お花は幾度も此顏を眺めました、そして用があれば何時でも此口が笑ふ事が出來たり、又勝手に眞面目になる事が出來たり丁度生きてる人の口の樣になる事が出來さうに見えました。其の顏容は一體に活々として仕事を爲さうな面持で、用あれば何時でも彫み付けられた脣は開いて話しをする樣に見えました、口許りが物を言ふならば恐らくは此樣な口でありませう。

『恐がりなさるなお花さん、箱を開けたつて惡い事がありませうか、あの憫れなる頑固な太郎の事なんか御考へなさるな、貴孃は太郎より御利巧で、もつと十倍ほども御强いです箱を御開けなさい、そして貴孃は何か奇麗なものを見付けるか御覧なさい』

といひました。お花は箱をあけますか、また開けたらどんなものが入つて居りませうか、これからが面白い〳〵御話になります。（つゞく）

米國通信

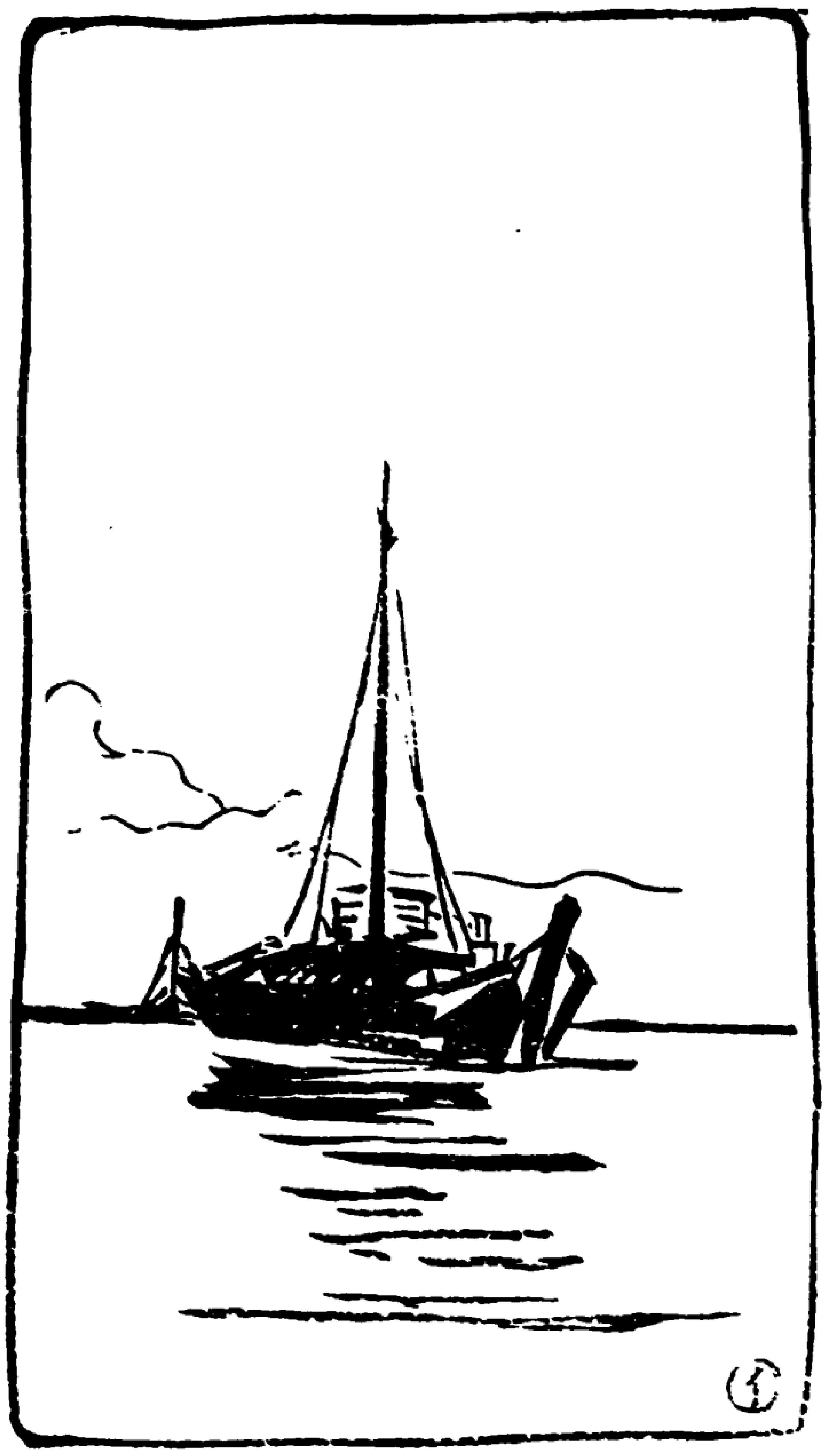
シャトルにて　澁谷馬頭

本女學生の上陸拒絕

◎九月八日に當港へ着きました日本郵船會社の伊豫丸の乘客で一人の女學生が御坐ました。二宮てい子さんと仰しやる方で御坐います。此地に御留りになるのでなくて、遠く東の方ボストン指して御出かけになるので御坐います。そのボストンには二宮さん

を保護してくださる米國教師が御坐います。また留岡と仰しやる方も御出でございます然るに困ります事には、それが若い御婦人の一人旅と申しますので、移民官から上陸拒絶と云ふ嚴命を被りましたので御坐います。

◎どう云ふ御都合で御坐いましたのか、二宮さんはボストンの某學校、または某教授、または留岡さんへの、紹介狀を御持ちなされなかつたのでございます。其紹介狀を御持ちになりまして、それを移民官に御見せになりますれば、移民官はそれを信用して其まゝ上陸を許可してくれます事もあります。或はボストンの方へ電報で照會して見て上陸させますやうな事になります。二宮さんは他の乘客が先きを爭うて上陸してしまひましたと跡に一人取殘されなすつて誠に御氣の毒の至りと我々までも思ひやりをしました次第でございます。



◎半月の間茫々たる太洋の中に旅して御坐いますれば誰も誰もかすかに島かげを見てさへ嬉しくてたまりません。況んや既に港に着きましては一刻も早く上陸したいとあせりまする、それが上陸する事かなはず、再び其船で送りかへされると申しますのは唯船賃を損するばかりではございません。非常な不愉快を精神に與へまするわけで御坐います。男子でも上陸拒絶にあひまして泣々本國へ戻される者が時々御坐います。尙更御婦人方は御乘船の前にそれらの手ぬかりの御坐いませんやうに萬事御注意なさらなければなりませせぬ。

◎さても二宮さんは一旦は上陸を御あきらめなされなければならぬ有様に、しをれかへりなされました(?)が、幸に當地に二宮さんの父君とやらんに御知合ひの方が御座いましたので、其方がいろ／＼移民官に掛け合ひまして、其方の保證――シヤトルには留め置かずに直ちにボストンの方へ出立させると云ふ保證で、漸くの事上陸拒絶の命を取消されましたのは目出度き次第でございます。

◎狡猾な手段で人の妻だとか何とか申立て丶難なく上陸を許されて上陸してからはすぐに女郎をすると云ふやうな云ふにも忍びないやからも少くはございません。現に此シヤトルの町の中で女郎の數々ございます中に日本女郎が大部分を占めて居ますのはまことに呆れまする次第ではございませぬか。

△米國女學生の寄宿舍

◎先回通信の續きを申上ます。女學生の内幕話は此程出版になりました米國男女學生氣質とか申します川上清氏の著書に大さう面白く書いて御座いますから、どうぞ御一覽を御願申ます。で私は簡短に寄宿舍内の舞踏會の事を申上ます。

◎ワシントン州大學の女學生の寄宿舍では大抵毎週の土曜日の晩に舞踏會がございます、又祝祭日の晩には勿論御座います。舞踏の稽古は上流社會の人たちには必用でございますと、云ふ事を御承知なければなりませぬ。しかしそれは日本に於てではございませぬ。

◎毎週土曜日に學校は休業(日曜も勿論休業)でございますから、其朝から女學生の姫君たちは今晩の舞踏の用意をさ／＼怠りなしで御坐います。白粉をぬるやら繪具をつけるやら衣服の塵を拂ふやらアイアン(火熨斗)をかけるやら大混雜でございます。さて晩餐の時刻になりますと來客(男學生)一同と食卓を圍んで食ひ且つ談じて暫く時を移します。米國女子は一般に多辯でございます。其代りには一般に交際上手でございます。いろ／＼御世辭やら滑稽やら賑賑しく食事も濟しますと其あとで舞踏に取かゝりま

す。

◎舞踏の方法、男女學生互に手に手を取りあつて、幾組にもなりまして、はね廻りまする有樣は普通の夜會のそれにかはりません。午後の九時と云ふに舞踏は仕舞ひまして御客たる男學生は一同其舍へ引き上げます女學生も各其部屋へ入ります。樂んで亂れないと云ふ風は誠に感心の至りでございます。

◎學校で許可してございますか、又は默許でございますか、其邊はたしかめませぬが、舞踏終つて興盡きず、をり〳〵は夜を更かし、十時も過ぎ十一時にもなり『こよひはいたく更けぬるを』など女の方より云ひ出づれば『女郎花多かる野べに』など云ひつゝ男の其まゝ旅寢するもあるときく。『名にめでゝおれるばかりぞ』なんて御坐いませう。



昨今の料理

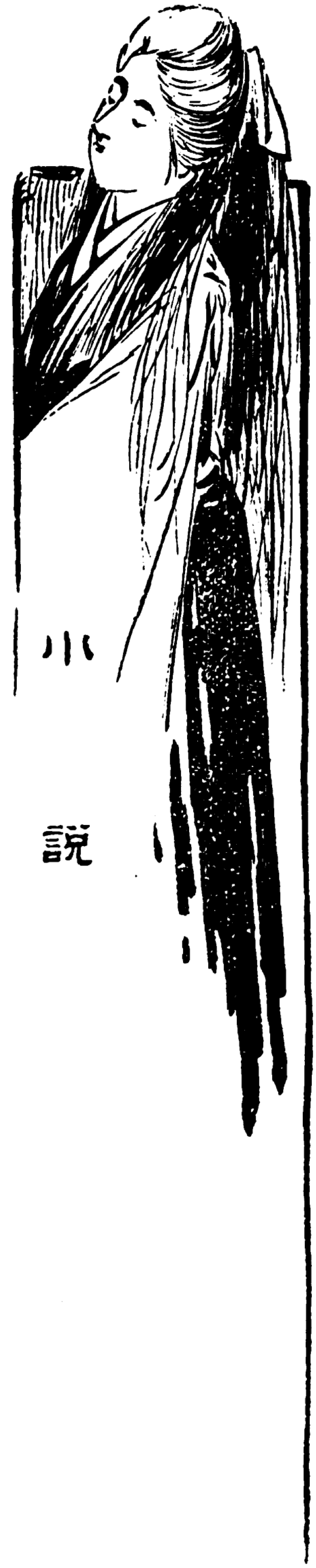
松茸飯

松茸のすぼんだのを撰んで石付を去り總體の皮を剝いて細に庖丁し、淡い鹽水で洗つて笊へ揚げ、飯を一升炊くとすれば酒五勺醬油五勺で松茸を煮、その煮汁を米を仕掛た釜の中へしたみ込んで程よく炊き上げ、飯櫃へ移す時前の松茸をかき交ぜる。

（注意）飯は食膳第一の品だから、贅澤らしいがなるたけ良い米を選び、グズ〳〵しないで一氣呵成に磨き上げ、清水になるまで何遍も水を代へて能く流したら、半日程水へ浸して置くがよろしい、そして米一升なら水一升三合程の割合で釜へ入れて能く沸騰せ（水ばなり）浸して置いた米を笊へ揚げ水を切つてその中へ投げ蓋をして七分程煮て火を引き、六分ばかり蒸して板の間へ下し、尙七分程經つて飯櫃へ移すと、ふつくりした好い飯が出來る。

吳々も言いて置くが米を磨ぐ時グズ〳〵してゐると米が碎けて風味も體裁も惡くなる、それから磨ぎ上げた米を水へ浸して置くのは風味を善くすると、長く保たせるとの爲めで、半日浸して炊いた飯は盛夏でも五六時間は長く保つ、

少し小言めくが、炊飯を水仕女へ一任にして奧樣は一向構はぬと云ふのは心得違ひも甚しいので、飯の不出來は副食物の不味よりも不快なもの、のみならず庖房を與る者の最も耻辱とする所である、若し此不出來の飯や誤て虫芥等を混じた飯を客へ出してもしたら奧樣は何と辯解なさる、切に望む所は少くも飯だけは奧樣自身で炊き水仕女は我庖房の助手だと云ふ意思で、充分責任を持つてやつて戴きたいと云ふ一事であります。



貴夫人

廣津柳浪

（下）

日暮の里諏訪神社の後の狭き阪を半腹から左へ、足下危ふき路を辿つて居るのは、斯波義敦伯に夫人の多嘉子、今一人の紳士は、舊藩士の高山堅吉と呼ばるゝ醫學士で、今日しも伯爵夫妻が貧民窟視察に隨行せしむ可く、俄かに召されたのでありました。

伯爵は早くも彼方の木蔭に草の家を認めて、『多嘉子、彼家が貴女の話した子供の家ぢやらうね。』夫人は直ぐに答へかねて、遙かに崕の上を見上げられると、例の茶店の欄が、木の間に僅かに認められました。

『私も此處に下りましたのは、今が始めで御在ますから、』

伯爵は覺えず笑出して、『はゝはゝゝ。此は賴にならぬ案内者殿ぢやな。』

『でも、彼處の茶店から見下したばかしで御在ますもの。』と、夫人は微笑を含みながら、『先日茶店から見

えました家が、多分彼家で御在ませうよ。』
『これはあかん。』と、伯爵は打笑ひながら、高山醫學士を見返り、『高山、お前を案内者にお頼み申さう』
高山醫學士も微笑を含んで、『私も學生時代には、度々日暮里近傍を散歩致しましたが、此崖下は一向不案内で御在ますが、』
『いや、同じ不案内者同士としても、お前の方がまだしも頼になりさうぢや。』
『尤も、道灌山からの歸道で御在ましたが、路に迷ひまして、藪やら崖やら滅茶苦茶に歩き廻りました事が御座りまするで、或ひは此崖下も歩いた事があるかも知れません。』
『今日は滅茶歩行は遠慮して貰はんければならぬが……さア、前へ行て貰はう。』
『御免を。』
高山醫學士が前に立つて、行く事未だ十歩ならざるに、前路に一人の幼兒の佇立んで居るのを認ました。
『彼處に子供が見えます。』
『成程。』と、伯爵は見るより、此が親に育まるゝ子かと、襤褸を身に纏うた子供を目成られました。
『彼通で御在ますもの、何か救へるものなら救つて遣りたいと、私は熟く思ひましたので御在ます。』
『左樣ぢやね、如何にも不便ぢや。』
子供は伯爵等の近付くのを、鋭い眼に凝乎と見て居ましたが、今は明かに人々の面顏を見得らしく、忽ち夫人へ對つて、兩手を胸に置き、首ばかりではあるが屈られるだけ頭を下げたのは、深く敬意を表したものと見えました。
夫人は覺えず聲を逸ませて、『御前、彼子供で御在ますよ、先日見受けました親孝行の子供と申ますのは』

『如彼でかね。』

『はい、母親が病氣に罹つて居りますさうで、父親が其の、』

『うむ、何か左樣ぢやさうなが、兎に角高山に其母親を診察して貰ッた上の事ぢやね。』

『左樣致したいので御在ます。』

夫人が件の男の兒の前に立れた時、男の兒はまたもや前と同じさまに頭を下げました。夫人は塵埃を被つた樣な頭を、汚しとも思はず美しい手で撫でゝ遣りながら、

『お前さんの御母さんの御病氣は、何樣容子ですかね。』

子供は夫人の語を解し得なかつたのか、唯顔を見上げてばかりで、何とも返辭をしませんでした。醫學士は傍から、『母親の病氣まだ治らないかね。』

『うむ。』と、子供は首肯きまして、『もう不治へんだッて、一同が云ッてるんだ。』

『まア可哀相に。』と、夫人は涙含んで、『高山さん、早く診て遣つて下さい。救へるものならば、何卒手を盡して下さる樣にね。』

『はい、承知致しました。』と、醫學士は子供へ對ひ、『私が母親の病氣を治して遣るからね、お前の家を敎へてお呉れ。佳い兒だねお前は。』

子供は醫學士の顔を熟く見上げて、『叔火さん御醫者かい。』

『左樣だ、私は醫者だ。』

『佳い御藥持つてるかい。』

『種々持つて居るよ。』と、醫學士は提げて居た鞄を揚げて見せた。

子供は嬉しげに莞爾〳〵しながら、『御薬呉れるんかい。』
『うむ、母親の病氣治る薬を、お前に澤山上げやうぢやないか。』
『左樣かい、嬉しいな、嬉しいな。』と、子供は夫人をも忘れて了つた樣子で、いそ〳〵と前に立つて、
『おいらの家は此方だよ。』
一同子供の後に尾いて歩を進めた。
伯爵はいたく感せられた樣子で、夫人の腕を抱へながら、『飾らない人の心の美しさには、私も實に感服しました。』
『此子供の樣に、可哀相な兒が、此蛭の間に五十人近くも居るのださうで御在ます。貧苦の中に、些も教育を受けないで、世間からは新平民だからと、全然除物にされて居るので御在ませう。何と云ふ不幸な人達で御在ませう。私は此人達を救ふ事が出來ましたら――其中の一人でも眞實救ふ事が出來ましたら、私は人の道の幾分かを盡し得たものと思ひますは。』
『左樣。私も至極賛成ぢや。』
『私はまたお願ひ申します、御前、多嘉子に人の道の幾分を盡させて下さいます樣に、私一生の御願で御在ます。』
『よろしい、承知して居る。』
伯爵と夫人と斯く語合ひながら歩を運ぶ中に、前に認めた草の家の前に來ました。子供の家は此處でも無いと見えて、醫學士を促しながら尚は前へと進むのでありました。
後に思ひますと、此草の家が此部落での第一の大厦、比較的に家の内なども整頓して居るのでありまし

た。けれども、伯爵と夫人との眼には、人が住得ようとは、見受けられぬでありました。入口の土間にきれぎれの蓆を敷いて、つぎはぎの袖無を着た老婆が背を丸くして、差入る日影に甲羅を曝して居ましたが、眼でも悪いのか、皺の中に眼鼻の萠んだかと見ゆる顔を上げました。けれども、あらぬ方を見て居るのは、僅かに足音を聞得たものらしく見えました。

夫人は氣の毒げに見遣つて、『東京の中に、彼樣人達が他にもありますか知ら。御前、不便な老女ではありませんか。』

『老人を見ても、氣の毒でならんね。』

『彼樣人達も救つて遣りたう御在ますね。』

『無論の事ぢやね。』

其處を過ぎて十數歩、また一軒の草の家の前に出ました。此家は前の家よりも遙かに劣つて居ました。十六七歳の少女の、腰には僅かに湯具を纏うたのみ、身には袖無のはぎ〳〵の襦袢一枚、乳から腹をも露出しにしたのが、家の前に立つて居ました。

『まア。』と、夫人は呆れて、手巾で顔を被ひました。

『娘ぢやね。』と、伯爵も呆れて、覺えず歩を止めました。

娘の面貌は、意外にも美しかつたのであります。色は白いが、蒼味を帶びて而も汚が見えました。

『佳い容量を持ちながら、』

夫人が凝乎と娘を見ました時に、娘は婦人の天女とも美しさ、輝くかとも見える服装に、終に其身を羞ぢたものと見え、突然家の中へ駈込んで了ひました。

『御前、哀れな人達ばかりではありませんか、私は此人達を救ふのが、私の職務の樣に思はれますよ』
『如何にも不便ぢやね。』
何時の間に集つたのか、十數人の子供──男女打混りて、中には當歳の子を負つた廿歳前後の女も見えました──が、伯爵と夫人との周圍を取卷きました。
『旦那、何でも可いから遣つて呉んねえな。』と、異口同音に叫ぶのであります。
『お神さん云ふんだよ。』と、彼孩兒を背負うた女が指圖して居ました。
『お神さん、遣つて呉んねえなッ。』
夫人の袖に手を掛けんばかりにして左右前後からせがまるゝので、夫人も此には當惑して、覺えず伯爵の腕に縋り付きながら、
『御前、御覽遊ばせ。此樣不幸な人たちが、此通集つて居るので御在ますよ。御前も不便だと思召して、何卒御力をお貸し遊ばして、私もう他に御願は無いので御在ます。』
『よろしい、私も極力貴女を扶助けて、貴女の希望を遂げさして上げよう。私も契つて、此人達を救濟します。』
『何卒。』と、婦人は手巾で嬉涙を押へました。
『何でも可いから、遣つて呉んねえなッ。』
子供等はまた〳〵喚き立てるのでありました。
伯爵は子供等へ向ひ、『よし、よし、お前方へ何なりと上げるがな、今少うし待つて呉れる樣にな。』
『其樣事云はねえで、旦那、お呉んねえな。』

今度は伯爵へ附き纏ふのでありました



『よし、よし。』

伯爵は笑顔を作りて、頻りに首肯き

ながら、婦人の手を曳きながら進まれました。

親孝行と呼ばれ、泥棒の兒と罵らるる彼子供の家が其か、今しも高山醫學士が、其低い軒を潜つて外へ出て來ました、其時伯爵等は其家の前に到着しました。

此を家と云ふ可くんば、犬小屋にも人は住み得るでありませう。いや、大家に飼る丶犬の家には劣つて既に倒潰れた家の軒を、一方は崖に倚掛け、一方には木竹などを幾處とも無く建て丶僅かに倒れぬまでに支へたのでありました。内には床なく、地上に直ちに酒薦の破れたのを敷き、入口の外は光線達かず、陰々として一間奥を見ることさへ難いのでありました。



「此でも住はれますかね。」

夫人が伯爵に囁かれた時、醫學士は如何にも殘念の樣子で、

『殿樣、御前樣、殘念な事には、既に死んで居るので御在ます。』

夫人は覺えず『えッ、あのッ……もうお前さんが手を盡して下さつても、』

醫學士は苦笑をしながら、『もう冷たくなつて居るので御座ます。』

『まア、氣の毒な。』と、夫人が家内へ進入らうとされたのを、醫學士は遮りまして、

『御覽遊ばすのは宜敷くありません。』

伯爵も夫人の腕を執へて、『多嘉子、見ないがよろしい。』

『ですけれども、』

夫人が尙は伸上つて、家の内を見ますと、奥の方に黑いのは、布團を被せた死人らしく、骨まで痩せた手が白く見えました。其布團の端には、五歲ばかりの兒がすや〳〵と眠つて居るのであります。十歲ばかりの女の兒が、三歲ばかりの兒を懷いて、死屍の枕頭に坐つて、きよろ〳〵光る眼で此方を見て居ました。

『御前、御覽遊ばせ。』と、夫人は涙に咽ぶのでありました。

『貴女は此方にお居で。』

伯爵は其處に集つた人々――今は子供ばかりでなく、屈強な男女、老人なぞも混つて居る人々に對ひ、自分と夫人、其に醫學士をも紹介しまして、今後此部落を救濟する爲に、畢生の心力を盡す可き事――施療施藥は病院を建て、子弟敎養に學校を設け、行々は授產の法をも講じたいと思ふ事どもを演述されました。

伯爵演述の主意を、能く耳に入れ得たものがあつたらうか。其は幾人も無かつた事は、私かに嘲罵の聲を漏した者があつたのにも知れて居ます。けれども、伯爵が兜袋を探ッて、幾枚かの兌換劵を、彼等の手の上に置かれた時には、一人として眞實喜悅の色を、其面に上さぬ者はありませんでした。

醫學士は獨、此部落が能く救はれ得るであらうかと危むのでありました。

翌日直ちに初音町――彼岸の上なる――に高山醫士の出張所が設けられ、彼親孝行の子供の同胞は其處に引取られました、一月の後には、男女の敎師三人から成立つた私立學校が開かれました。云ふまでもなく伯爵夫人の盡力に依るので、一週兩度は必らず自身見舞るゝのでありました。

數月の後、私立日暮里小學校、日暮里施療院は木造ながらも建築されました。

伯爵等は相談役、家令扶等の異議を斷乎として排拆して、三ヶ所の別莊を賣却し、年々五千圓を此救濟事業に支出する事にしたのでありました。

夫人の滿足は此上も無いのであります。けれども、東京の邸内ばかりでなく、舊藩地の間に於る夫人の人望は、全く地に落ちて了ひました。

夫人は舊藩地の窮狀を知らず顏に、新平民を救濟なされるとは、何と云ふ本末の誤り方であらうと云ふので、態々總代を上京せしめたほどでありました。

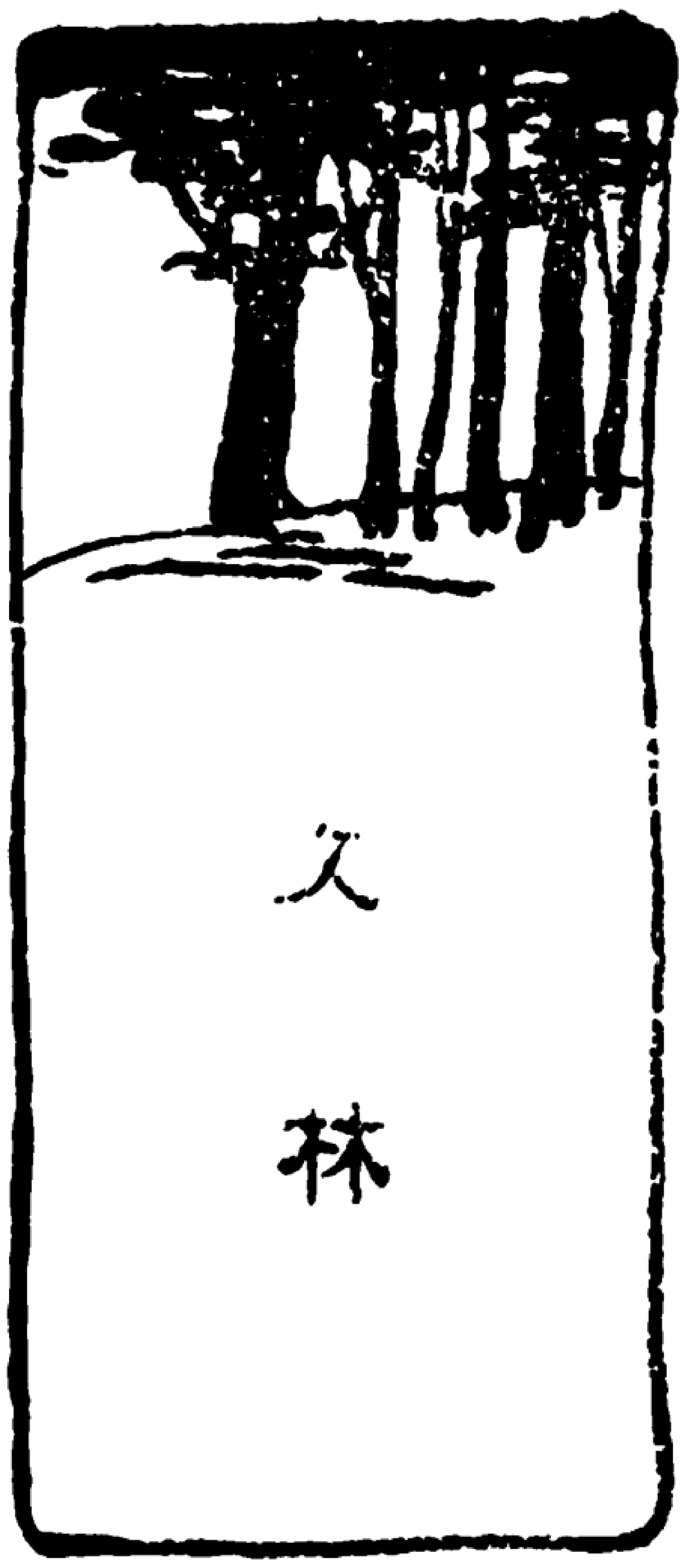
けれども、夫人は勿論の事、伯爵も斷乎として舊藩臣の異議を却け、一意件の救濟に從事して居られると申します。

（完）

秋の食物

栗

一升二十錢位から飛切三十五錢位△料理法、栗は今が眞盛り味も最も好い時ですが之れは甚だ手數の掛る品でありますが其代り一種の風味があるので料理法も栗飯甜栗キントン扨ては羊羹等ですが之等は大抵御存知でせうから玆には一種風變りな料理法の而かも澤山手數の掛らないのをお話しませう先づ栗は大粒を撰びまして上皮を取り澁皮のまゝ水に浸しアクを拔いて一升に就いて味淋一合上酒二合三盆白三十匁食鹽を少し入れ醬油で煮上げ色を付けるのですが澁は煮て居るうちに大抵裂けて取て了ひます、之れはお酒の肴にもお茶菓子にも最も妙です。それからキントンですが之れは水で煮てアクを取り水を好く搾つて味淋一合酒二合と三盆白で煮て擂裏漉しにかけるのです、これならば甚麽な素人方にも譯無く出來ます



エバンジュリン(つゞき)

ロングフエーロー氏作

河越てる子譯

(四)

樫の大木の梢高く
神秘を示せる寄生木の
影も崇高き廣野原
テチーの川邊に程近く
一つの家は立ちにけり
今しも牧者は家を出で
駒にまたがり悠々と
喇叭ふきたてながむれば
群羊はさながら白波の
寄するが如くに集ひ寄る
此勇ましき男こそ
今は昔のアカデヤに
名も高かりしベッシルが
富み榮えたる有樣にて
牧者ははるかに彼方より
我家をさして進み來る
聖の群集の見えつるや
狂はん計りに驚きて
直に馳せてぞ迎へける
泣み笑ひみ人々が
古を語る樂しさを
よそに佇むエバンジュリン
ベッシルは其れと心附き

「アッチャフヮラヤを來しとかや
逢はざりつるかゲブリェルは
汝を待ちわびて今日爰を」
「去り給ひしか今日爰を」
ベッシルの肩に寄添ひて
少女はヨヽと泣き伏しぬ
翁は聲もさわやかに
「な悲みそ少女子よ
アデーヤスの街にて
騾を賣らんと云ひつるは
果てなバオザークの山の上に
獵へと登る筈なるに
愚なる子よ一向に
汝を慕ひてたらちねの
親さへ後にはるゞゝと
人やりならず出にけり
されど喜べ少女子よ
出しはたゞに今日なるぞ
朝日と共に立出て
明日なん後をば追ひ行ん」
人々又も打興じ
問ひつ問はれつ來し方や
身の行末を語らひて
ベッシルが宿の成功を
喜びたゝふる其様は
グランドプリーの昔にも
いや樂しくぞ見えにける

《つゞく》

雁

山本細柳

萩の下葉のいろづきて
いとゞ夜長くなりしより

大空わたるかりがねの
こゑはすゞしく響くなり
花さく春もうしと見て
北なる里にかへりしに
うしと見し世をしのびいでゝ
かへりはこしかかりがねよ

月のひかりはさえさえて
露も色あるさよ中に
なれがなさけのこゑきけば
夜寒のとこのひゆるかな

いづれうらみのたえざるは
生あるものゝならひぞと
思ひさだめてひとたびは
翼のつゆをはらへかし

人にいたはりあらぬ世に
雲井のよそといひながら
こゝろもさむるながこゑに
われもとびたつ思ひかな

さなかなしみそかりがねよ
葎のやどのうたびとは
さらぬも物のかなしきに
かよわき胸のさけもせむ

荒鷲を題によめる

下田春與

北のうみやとはつしまねに
はねはふりかゞなくわしは
あらぶるや忌しきとりか
ゆゝしくはあらぶるとりか
そらかけるたつをもとらへ
地にはふとらをもひしぎ

しきしまのやまとしまねを
おのが巣とうかねらふらし
しがまけのやまとの小太刀
其のたちははきもはかずも
しがまけのむらたの火つゝ
そのつゝはとりもとらずも
いけどりにいとらへふせて
日のもとのしまねに飼はれ
おれまてやつこ。

月前雁

笠木鴬里

すみのぼる月をかすめて山もとの
霧にかくるゝかりの一つら

同

くりかへしくりかへしても見つる哉
月きよきよのかりのたまづさ

紅葉

うすくこく時雨にそめてやまひめの
にしきおりだす賎はたのやま

虫

我がそでの露をよすがにきり〴〵す
こよひは寝屋のうちに鳴くなり

述懐

果敢なくも波まにくだくつきかげの
いつまどかなる我身なるらん

時雨

筑波山峰のうきくもふきおろす
あらしとゝもに行く時雨かな

殘菊

霜深かきあかつきごとの寒けさに
おち葉をかづく白きくのはな

教の庭

十一月一日兼題

正三位子爵 黒田清綱先生撰（代撰菊池武則先生）

浦千鳥

天

浪まくらこよひわかしのうらかせに
なきわかれゆくともちとりかな

東京市赤坂區青山北町六丁目四十五番地 岩谷淺子

地

此あさけけふりはたえてしほかまの
うらさびしくもなくちとりかな

本郷區東片町四十三番地下田方 清水はるみ子

人

つきさゆる磯のまつはらしも見えて

埼玉縣入間郡川越町 横田秋子

ちどりなくなりいそのまつはら

甲

三河 永井さい子

風はやのみ保のまつはらなみこえて
さむきゆふべにちとりなくなり

下野 若林十四子

夜はいまかふけ渡るらむあかしかた
ほの／＼見えて千とりなくなり

東京 甲藤若子

浦ちとりなくこゑちかくきこゆなり
おきのしらすにしほやみつらむ

兵庫 駒井登雄子

なにはかたふけゆく月のかけさえて
あし邊さむくもちとりなく見ゆ

東京 敷島うた子

あまの子か貝ひろふなるうらわには
すみなれてなくとも千とりかな

大和 栗山たか子

竹しはのうらのあさしほみち／＼て
しまやまかくれちとりなくなり

大和 栗山俊子

すまのうら松ふくかせにたくひきて
なくや千とりのこゑのさむけき　東京　山田靜子

須磨のうらかよふゆめ路の中たえて
うらさひしくも千とりなくなり　東京　山田ふみ子

更けゆくや打よるなみのおとさえて
うらはまつたひ千とり鳴くなり

乙

あらなみにともよふ千鳥つきかけの
きよきうらわにゆきかへりなく　伊豆　佐藤春子

小夜ふけてうらかせさむき波の音に
こゑうちそへて鳴く千とりかな　伊豆　佐藏敬子

うきねするあかしの浦につきさえて
なにを千とりのよたゝなくらん　香川　大山豊子

夕しほのいまかみつらしうらちとり
うちみたれてもなきさわくかな　香川　林靜子

須磨の浦ゆふつきかけのはれわたり
こゑもさやかに千とりなくなり　長野　小泉みつし子

をちこちに友よふ千とりこゑたかし
あかしのうらのつきの夜すから　肥後　佐々小琴子

浜まくらとまもるつきのかけさえて
うらさひしくも千とりなくなり　名古屋　木下鶴子

きよみかた浦こくふねのおとたえて
かたわれつきに千とりなくなり　秋田　和田りつ子

いたく夜もふけひの浦になくちとり
つまやこふらんともやよふらん　宮城　杉田哲子

すかたみのかゝみの浦にきて見れは
ちとりもかけをうつしてそなく　熊本　田代綾子

なみたゝぬかたやいつことむら千鳥
そてのうらわをゆきかへりなく　秋田　古瀬陸子

月ふけてすまやあかしのおちかたに
うらつたひなくむらちとりかな　筑前　芦屋ふさ子

いはなみの玉ちるうらのあらいそは
このはとみえてちとりなくなり　筑前　三木さと子

ふけぬるか庭の木からしおとたえて
すまのうらわにちとりなくなり　福井　平田そう子

すみよしのまつにふきたつ浦かせに
ともなしちとりこゑたてゝなく　東京　大枝膚子

もしほやくうらのけむりも消はてゝ
さえゆくつきにちとり鳴くなり　攝津　大岡幸子

はろ〳〵とかきりしられぬ浦なみを
むれてかよふはちとりなりけり　肥後　岡山登壽子

此ゆふへふしのねおろしさむかりし
田子のうらわにちとりしはなく　東京　篠田圓子

夕つくよみちくろしほにともちとり
こゑちかつきぬすみの江のうら　東京　杉田繁子

琴うらのしほかせさむくふくろよに
しらへあはせてなくちとりかな　東京　山口琴子

浦つたふあまのをふねにおはれつゝ
ゆくゑさためすとふちとりかな　東京　安井京子

風あらくゆふなみたかき須磨の浦の
まつの葉こしてちとりなくなり　東京　安井あや子

なれもまたすみやわふらん浜まくら
よとこのうらに千とりしはなく　埼玉　前野ふさ子

いそやまに三日つきおつろ夕しほの
とほつ千潟にちとりなくなり　埼玉　横田音羽子

うら〳〵のいさり火くらく汐むかふ
かた洲のあしに千とりなくなり　埼玉　横田やな子

吹く風も身にしむはかりさゆる夜も
千とりのこゑはこほらさりけり　茨城　富好椿子

このあさけ鹽くもりしてはまちとり
すかたはみえすこゑのみそする　陸前　前田河千年子

おきとほく聲はきこえてはま千とり
うらわもいまかしほのみつらむ　陸前　前田河みさを子

風さむみねさめてきけはよるなみの
ふけゐのうらにちとりなくなり　東京　青木たま子

しらなみのよせてはかへるすまのうらに
こゑうちそへてなくちとりかな　松山　梯京子

ほの／＼とあけゆくみれは玉くしけ
ふたみのうらにちとりなくなり　伊豫　梯秀子

船ひともいくよかゆめかさますらん
あかしのうらに千とりなくよは　伯耆　樋口つる子

遠こちのうらに千ちとりなくこゑは
しほのみちひやつくるなるらん　肥前　岩田春子

冬の夜のふけゐのうらにつきさえて
おきのしら洲にちとりなくなり　東京　大町律子

みちのくの千賀の浦はになく千とり
をしまのあまのねさめをやとふ　東京　岩谷梓子

浦とほくうちなかむれはあかしかた
ありあけの月にちとりなくなり　大阪　桝田益子

ふしのねのおろしもさゐて三保の浦
まつはらさむくちとりなくなり　東京　牛山素子

丙

玉くしけふたみのうらの小夜千とり
あかつきかけてなみになくなり　沖繩　仁保しま子

須磨のうらつきの出しほに風はやみ
ちとり鳴きゆくあはちしまやま　横濱　米原琴子

さえわたるつきはくまなく更るよの
うらかせたちてちとりなくなり　筑後　武田龜子

しかの浦つきのてしほのよるなみに　武田外代子

すまのうら松ふくかせにうちよする
ともよひかはしちとりなくなり　筑後　鐡山増代子

二見の浦つきすみわたる浪のうへに
なみかとみれはちとりなりけり　肥後　内藤富子

ゆふまくれ野坂のうらのしほあひに
ともよひかはしちとりなくなり　肥後　佐々有隣子

なみのおとのしはし凪たるうらかせに
むら／＼ちとりなきわたるなり　長野　山本基子

ゆふまくれなにをまつほの浦ちとり
こゑもさむけになきもするかな　長野　山本直枝子

さえまさる小夜の浦わにはまちとり
ともよひかはすこゑあはれなり　横須賀　岩橋佗子

月かけもうらへこほれはたゝよはす
ちとりのこゑにさえまさりけり　東京　小杉きよ子

月かけのきよきうらへにともよひて
なくねもこほるさよちとりかな　東京　小杉うた子

夕しほのいまみちくらししはうらの
いそへにむれてちとりなくなり　東京　河田いし子

くもはれてつきの出汐にうら千とり
なきかはしつゝともさそふらし　北見　中川伊代子

浦さひて千とりむらかる羽おとさへ
いとゝ身にしむふゆのよはかな　横須賀　上田[illegible]子

もちのつき見ましとうらに杖引けは
ともよふ千とり音をのみそ鳴く　長野　所孝子

あきかせは芦の葉ほそうおとつれて
さひしきうらにちとりなくなり　三河　堀田伊勢子

須まのうらいその松かせおとふけて
千とりなく音そいとそ身にしむ　丹波　大槻さの子

しほかまの浦のけふりにまよふらん
いくたひちとりゆきかへりなく　羽後　佐藤かつ子

たびひとの笠ふきかへすうらかぜに
なみもみだれてたつちとりかな　羽後　三浦さわ子

浦ちとりちかくなくれのきかぬまは
かぜにみだるゝなみかとぞみる　羽後　三浦ふさ子

うかひける月のよふねのゆきくれて
うらさびしくもなくちとりかな　羽後　三浦せつ子

みやびをかあき夜の海のふてさだめ
かへらんときもなくうらちとり　信濃　小林芳子

小夜ふけて羽おともさびしひな千鳥
いつこにおやをたづねゆくらん　信州　小林よし子

須磨のうら松ふくかぜのおとさえて
こゑさむけにも千とりなくなり　秋田　小嶋いわ子

村ちとりきよみがせきをたつこゑて
たこのうらはにこゑのみぞする　出雲　吉田ちざ子

夕日かけまつにのこりてみほかさき
みえつかくれつちとりなくなり　出雲　岩倉頼子

うき沈みなくれもあはれともちとり
とこのうらわになみやたつらん　宮城　大槻初音子

かぜあらみなみうちさわく床のうらに
ゆめもくだけてちとりなくなり　宮城　大槻慶子

うら人もくだけてものやおもふらむ
いはうつなみにちとりなくよは　陸前　鈴木千代子

玉くしげふたみのうらのあけがたに
なみかぜさむくちとりなくなり　陸前　畳原つる子

千賀の浦いそまつこしにつき見えて
こゑさえわたるむら千とりかな　陸前　鈴木しき子

舟ひとのこゑのたえたるふゆのよの
すみえの浦に千とりなくなり　陸前　秋山もと子

ちとりなく聲にたびねのゆめさめて
まくらにたかしすまのうらなみ　熊本　田代艶子

行くふねを見おくる岸に月いでゝ　薩摩　松原崋子

うらかぜさむく千とりなくなり

かぜさゆるうらわのちとり聲さむく
ともよびたてゝなきわたるかな　東京　山田秋子

すまのうら沖のいさり火かすかにて
木の葉とみしはちとりなりけり　東京　荒井千代子

月さえて田子のうらかぜみにそしむ
つまよふ千とりこゑぞさびしき　東京　荒井幸子

田子の浦かぜのまに〳〵とふ千とり
こゑさむけにもきこえぬるかな　東京　荒井滿武子

初秋のいろうらさびしすまのうら
あはれをしるやちとりなくなり　東京　荒井幾久子

うちひさす和歌の浦わのともちとり
なく音もこほるよさむなるかな　東京　松村あさ子

まほかたほはるかに見ゆる浦けしき
なみうらゝかに千とりとびかふ　東京　荒井せい子

浦かぜにふきよせられていそかげに
つばさぬらしてなくちとりかな　東京　神戸すゑ子

はるけしき波はるかにうらちとり
さつとむれたつおとのさやけさ　東京　荒井あさ子

田子のうらうちいでゝみればかすかなる
おきのしらほにちとりとびこふ　東京　荒井こと子

舟ひとのねぬよのとこのともちとり
うらつたひするこゑぞさびしき　肥後　德永多瑠子

浦かぜのふくにつけてもさよちとり
なみのまに〳〵みだれてぞなく　肥後　德永廣子

世をうみのあまがうき身を哀れとや
すまのうらわにちとりなくらん　肥後　德永萬壽子

つきみんとちかしひ友をまち居れば
須磨のうらはにちとりしばなく　伊豫　小野米子

ゆふされはうら風さむみはりまがた
いそわの千とり夜たゞなくらむ　東京　積山きやう子

志賀の浦やしほみちくらし眞砂地に
たち居さだめずちとりなくなり　東京　積山きやう子

浦なみのよる〳〵なるゝとも千とり
ゆきかへりてやあとしとふらん　和泉　稲原すみれ子

よをさむみ沖のいさりびかげきえて
うらわさびしくちとりなくなり　秋田　古瀬惟子

かせさむみ浦つたひしてよもすから
ちとりは我をねさせさりけり　秋田　古瀬登子

しほたきのけむりの末にいそがれて
かすみかなかをうらちとりゆく　尾張　白井よし子

すまの浦はまのまつかせおとさひて
ゆめちのすゑに千とりなくなり　河内　竹内敬子

まつかせの音もさやけくきこえつゝ
須磨のうらわにちとりなくなり　大阪　小山英子

ねさめしてきけはあはれそ優りける
よるもふけぬのうらのちとりは　三河　服部正子

田子の浦ちとりなくねにゆめさめて
むかしおもほふゆふへさひしも　東京　林艶子

なみ風のおとのよさむにかゝり火も
たけはよるなりうらのちとりも　三河　河合ぬひ子

なく千鳥こゑさやかなりちぬのうら
ゆふなみちかくよせきたるらし　東京　林環子

こきはつる浦のしほかせおとふけて
ふなまとさむくちとりなくなり　東京　下田しけ子

すまの浦やむこふ淡路のしまかけに
ゆきつかへりつちとり鳴くなり　攝津　大岡花子

志賀の浦や比良のねおろしあるゝ夜は
おりたちかねて千とりなくなり　攝津　鹽見文子

須まの浦やありあけの月にかけおちて
とほさかりゆくむらちとりかな　攝津　森本三知子

あし北の野さかのうらのしほあひに　肥後　右田藤子

おもふ事なるとの浦のともちとり
ともよひかはしちとりなくなり　鳥取　大塚信子

さゝなみやしかの大わたこほるよに
こゝろをなにによせてなくらん　静岡　竹内みゝ子

時つかせいまやふくらむうらとほく
ともよひかはすうらちとりかな　東京　河合象子

わたつみのとこよやしのふ水のえの
あさるちとりのこゑのちかつく　東京　金原玉城子

ちかの浦のくまなくてらす月かけに
うらしまとほくちとりなくなり　三河　鵜野くわ子

すみなれし浦わのなみのあらけれは
こゑもへたてぬともちとりかな　大隅　添田あき子

うちよする波にあさるか浦ちとり
ゆきつかへりつちとりなくなり　大隅　添田みつ子

ゆくもありかへるもありき浦ちとり
たち居さためすなきわたるなり　東京　安井じゆん子

朝あらくいはうつなみに飛ひまとふ
なみにゆられてたち居さためす　東京　安井みし子

立つも居もおなしこゝろに住のえの
須磨のうらわの千とりなくなり　松山　上原のふ子

月さむきすまのうらわの船とまり
うらみなけにもなくちとりかな　山口　村上操子

すみよしの浦わのなみにつきふけて
ねさめをとひてなくちとりかな　長野　岡田千穂子

浦風をうけてたゝよふおきつなみ
まつはらちかく千とりなくなり　下野　戸田りか子

うら風をさむしとうけてゆくふれの
くもか千鳥かなみかよするか　下野　村田かれ子

月清きあらいそなみにともよひて
おきあひとほく千とりなくなり　下野　菅沼濤子

うらのひかたに千とりなくなり

よをこめてみなとふきこす濱かせに
うらつたひゆく小夜ちとりかな　下野　菅沼淑子

さよふけて風もなきさのうらちとり
もろこゑにこそなきしきるなれ　下野　菅沼德子

雲はれてつきの出しほになるみかた
ともよひかはし千とりなくなり　下野　壬生みと子

月かけのきよ見かうらも小夜ふけて
なみまにわたるともちとりかな　下野　壬生きよみ

二ツ三ツしらほうかへるあさなきに
千とりのこゑのきりにきゑ行く　若松　川邊柳子

いは浪のくたくるおとにうらちとり
ともよふこゑもかすかにそきく　若松　高橋操子

しも衣かたしくそてのうらふれて
たまものすそに千とりなくなり　若松　川島謙子

淡路しま月の出しほにともよひて
うらのひかたにちとりなくなり　神戸　岡野まさ子

枯あしのほわたをゆきとそらめして
うらさむけにも千とりなくなり　埼玉　前野壽賀子

山おろしいともさむけき夜もすから
和歌のうらわに千とりなくなり　水戸　酒井すゑ子

いとさむく須磨の浦かせ吹く夜半も
かはらぬこゑは千とりなりけり　水戸　酒井すゑ子

つきみむと浦のまさこちわれゆけは
きみまちませと千とりなくなり　陸前　前田河千年子

しまちかくなみかせわたり十はかり
吹きはなされしうら千とりかな　三河　秋野みつ子

小夜更てつきかけきよくすみそめの
ころものうらにちとりなくなり　東京　山田もと子

ゆきくれて須磨にひと夜をあかし潟
うらなれてなくともちとりかな　東京　山田せん子

よもすからなきて明石のうらちとり　下野　佐藤季子
こゑきくあまももしほたるらむ

こゝろなきあまのねさめを音つれて
なくねさひしきうらちとりかな　東京　椎野薫子

風あらきうらわのなみにこゑそへて
ともにみたるゝむらちとりかな　東京　椎野ぬき子

よるなみにこゝろならすも友千とり
たちわかれつゝうらつとふらん　東京　椎野鋭子

うちよするなみの花さくうらかせに
みたれなからもとふ千とりかな　東京　椎野秀子

冬きぬとあしやのうらのたつなみに
こゑさひしけにちとりなくなり　下野　山中つぎ子

かりのこすあしのかれ葉に浪こえて
うらかせさむくちとりなくなり　東京　牛山素子

しほ風の身にやしむらしともちとり
うらつたひするこゑのさむけさ　松山　梯たけ子

汐風のふきあけのうらのつきふけて
なみのたちゐにちとりなくなり　大隅　稲恒やす子

よひのまのゆきけははれて月かけの
きよみかうらに千とりなくなり　大隅　稲恒政子

あびきふねまつよふけぬとなきたちて
うらのとまやをとふちとりかな　大隅　山田よれ子

あられふるかしまの浦のむらちとり
こゑもみたれてよたゝなくかな　東京　後藤きよ子

てり渡るゆみはりつきのかけさむみ
矢さしのうらにちとりなくなり　東京　松山操子

ふきおろすふしの嶺かせおとさえて
田子のうらわにちりとなくなり　三河　服部萬子

かゝりたくけふりの末にうちむれて
なくねもさむきうらちとりかな　三河　本多きさ子

ふる雪のふしのねおろしさむき夜の
田子のうらわにちとりなくなり　東京　三好珍子

せきもりのねさめしあとは遠けれと
　ちかくちとりのうらふれてなく　東京　山本茂子

浦千とりかきりなくこそとこしへに
　きみがよちよとなきわたるかな　下野　若林とし子

夜やふけぬいそうつ浪もおとたへて
　須磨のうらわにちとりなくなり　東京　谷川きよ子

冬の夜のなみのうきれのわびしさに
　ちどりなくなりありあけのつき　大分　野中みち子

あはぢしまかたむく月にかげみえて
　すまのうらわにちどりむれたつ　肥前　山田龜子

小夜ふけて月かげこほろ須磨の浦の
　なみにさむけくちどりなくなり　奈良　川中石子

鳴海かたしほみちぬらしうらちとり
　鳴くねちかくもなりにけるかな　羽前　佐藤清子

さすらへの友ならなくにうらちとり
　ぬれし羽かひのほすよしもかな　羽前　佐藤きよ子

女鑑兼題豫告

	歌	文
十一月十五日	落葉	菊花を贈る文
十二月一日	遠山雪	冬の家庭
十二月十五日	寒月	歳暮

十一月一日兼題

華族女學校教授　井上頼圀先生撰

野戦演習を観る

長野縣北佐久郡南御牧村　松澤まつ子

某野に行はるゝ陸軍野戦演習を観んとて、九月某日の朝まだき、伯父君に伴はれ出で立つ。時しもあれ、はるか彼方の空より、ほづゝの音のひびき來つるに、さては、早、戦始まりしよと、けはしき道を勵まされつゝ、やう〳〵にたどりつきつ。人の波打よする中を押分け〳〵はるかに望めば、さだかには、得分ねども、東軍ときゝつる、白き帽子の一隊を、黒き帽子かふれる西軍、前後より烈しく挾み撃つらん様なるに、あな東軍あやふしと口々に呼はる折しもこそあれ、左手の森影より、俄に、東軍むら〳〵と起りて、味方に力を加へ、勢するどく撃ちたつるに、あはや、西軍たぢろぐらむと、思ひきや、かへつて一層の勇をふるうて、是に應ずるものから、こゝに目ざましき戦は開かれつ。天地もどよむ大砲小銃のひゞきは暫くも、たえ間なく。幾百の軍勢あるは進み、

あるは退ぞき、あるは本の葉の如くちりみだれ、あるは風の如く影をかくし、あるは思ひがけざる處より、あらはれ出で丶襲ふなんど。あはれ大將の君の御むねには、如何なる深き謀や、秘しつらむ、中々に拙き女の推しはかるべくもあらねど何れも只一筋に、君の御爲、御國の爲と、彈丸雨飛の其中を、事ともせずに、立ちはたらく、あつぱれ、勇々しき戰の、いつ果つべくとも見えわかぬ折しもあれ數聲のラッパ空にひゞくと諸共に、あな、さしもに、すさましかりつる戰は全く終りぬ。さてそれより、彼方の山、此方の限より一定の場所に打集ひ來つ、隊長の號令の下に、姿勢正しき、横隊をぞつくられつ、審判官は、やゝ小高き處より、何やらん、言ひ渡しつる樣なりしが、やがて、勇ましきラッパの音につれて、隊伍みだれず本營へと引取りぬ。

あはれこれをみてもたらちねの御親の、敎を守り、己がつとめをいそしみて、御國に事起りなば、武士をして内のうれひ無からしむるやう、せまほしやなど思ひつゞけられつゝ、やどりに歸りつきしは、星影空にきらめく頃なりき。

人

肥後國菊池郡城北村 佐々有鄰子

十一月一日は日曜なれば、學友三人四人と朝霜ふみわけて、今般の大演習のために出發せらるゝ、野戰演習を觀んとていでたちぬ。日影まばゆく大野原にさしにほへるに、東方の草むらより天地も轟わたるは、無煙大砲なるべし。西方の田面より豆煎ごとく響けるは、是も無煙の小銃也。騎馬の兵士は南北に馳せまはりて、なにをか傳令するが如く、折々ラッパの聲の聞ゆるは、兵卒の進退をしめすなるべし。おもひがけなきもり蔭より、白帽隊のあらはれ出たるは、いかがやとおもふうち、やがて銃音のきこえぬ。是もひとつの兵卒なるべくおもはる、野中の小川を隔てゝ、兩岸より打いだす銃聲は、乾坤もくだけて、おびたゞし。砲聲の拭へるごとく止みぬれば、參觀の男女どもこゝかしこの畠畔に集ひて、晝飯を仕ふ成らん。妾どもの一群もおなじ飯を物する。をりから數聲のラッパ耳を貫きてきこゆ。いかにも勇まし。これなむ演習の野戰隊の歸陣なす用意とおぼえたり、さすがに大野原も、人影まれになりぬれば、夕日傘をさしかさし、友人をともなひ、吾家に歸り來りて、互に語りし、今日のあらましをかくはものしぬ。

優等

肥後　德永廣子

野戦演習ありとて、父にしたがひ親しき友等と立出ぬ。其夜は市中の家に宿泊す。翌朝はやく滊車にて、田原坂に着にけり。此所に進軍の一隊あり。これぞ野戦砲兵ときこえける。馬上の將のしきにしたがふ勇ましき兵卒のふるまひ、明治十年の戦況しのび出られぬ。今日は宇土松橋あたりの戦いとはげしかるべくきゝつれば、曉方に出立ち、軍隊の後より、行くほどに心も銃聲にうばはれてすさまし。稲かりとりし田中に、數多の砲臺あり、したがへるは砲兵ならん、野中に數百名みゆるは歩兵、兩眼鏡をもてるは士官なるべし、うちはなつ小銃のおと、大砲のひびき耳をつらぬきぬ。日限ある演習さへかくあるを萬一日露にかかる事もあらば、實戦如何ならんと、女ながらも國家を顧みつ。日くれて遠く火光のみえつるは、なにやらんと問ければ、將士の露營とぞ答へける。支那北京城の戦爭には、忠義の道を一筋に、山も川も駒に鞭うち、いさしく、外國兵に先だちて、北京城を乘とりし、將士もましますなるらんと、奥ゆかしくおもひ侍る。如是の演習をみることは千載の紀念なるべければ、宿泊せし家にかへりつき、父は友人と一杯くみかはしますかたへに侍りて、見聞の千分一を記す。

本郷　篠田圓子

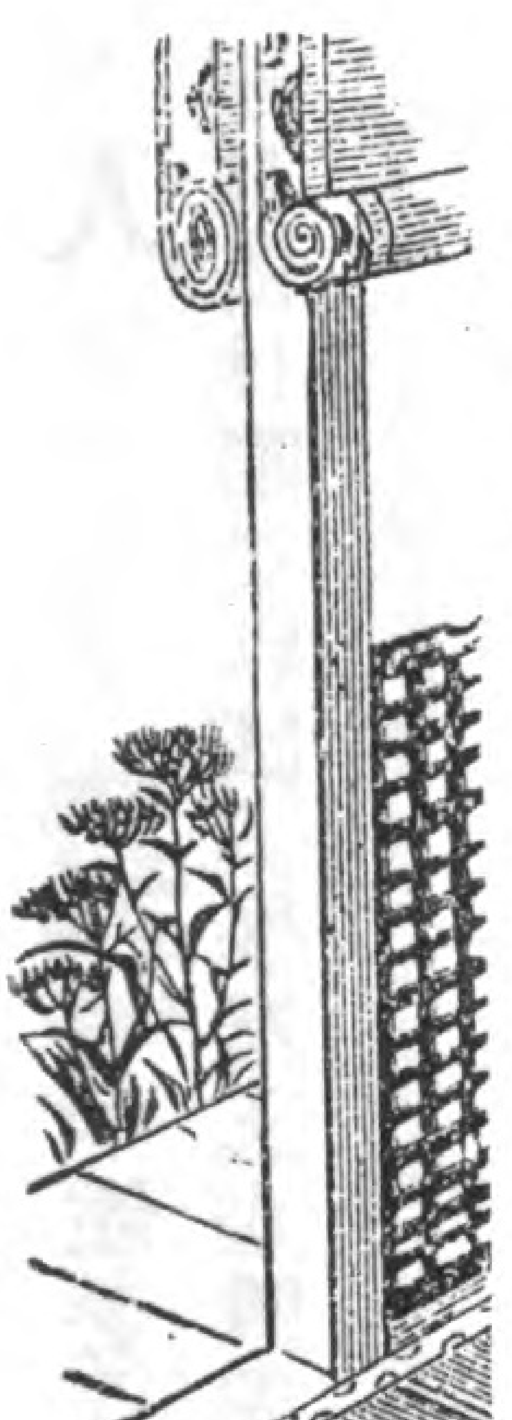
女の身としては、稍つゝましき業ながら、近郷に野戦演習あればぜひ物せよと、人のそゝのかすまゝに是も參考の爲と、遂に、其の意に任せたり。都に在りし折パノラマてふ物は見し事あれど、其れにもいやまして、すさましき有樣なるも、理なりけり。實彈こそ放たれ、砲の音遠近に起り或は吶喊の聲將校の士卒をはげます聲など天地にとゞろき渡りて、見る人の心も自ら勇み立ちぬ。演習にてすら、かくあるものを、況んや先つ年もろこしにありし戦ひはそも如何許りなりけむ。そのいたつきの程、思ひやるだにあはれなり、あはれ太平の御代にありても、我が大君の大御心のくまなくて、國のみ固め露おろそかならず、常に文弱に流れはてぬやう、武術を鍛錬せしめ給ふこそ、畏くも嬉しかりけれ。己も女ならざらましかば、せめて兵士の群になりと入りて、國恩の萬分の一だに報ゐまつらむ物を、否女なりとも國恩を報ずる道なきにあらず。いでや今より一際勵みて、我が業の奥深く進み入らむと、只管心の勇み立ちたるも今日目のあたり演習を見し賜物なりと、嬉しさの餘り後のおもひでにかくなむ。

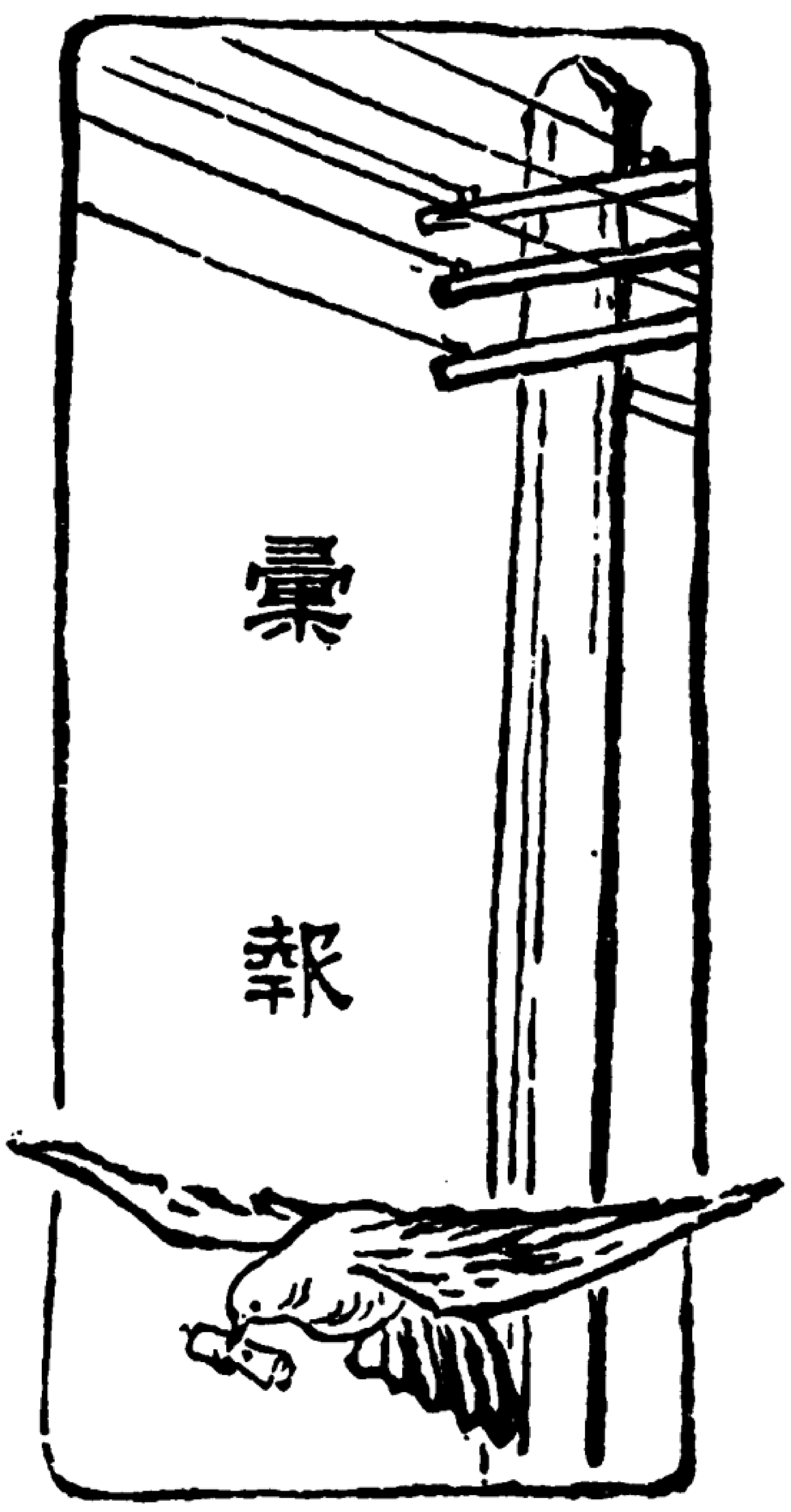
松山　ゆづる女

ばら〳〵と打ち出す、大づゝ小銃の音、いなゝく駒の聲など、ま近く聞ゆるは、野戦演習なりけり、いざや末頼母しき我弟に、武士の伎倆を觀せばやと思ふものから、伴ひて我家の後なる廣野に馳け行きぬ。見渡せば、今しも戦の最なかにて、南北に分れたる兩軍頻りに敗けじおとらじと擊ち合ふさま、實のいくさかと、想はるゝばかり、げにも雄々しき振舞なるよ。かくて暫しのまに、南軍は擊退せられて、皆ちり〴〵に亂れて、遂に遙なる森かげに隱れ果てたれば、こなたのつはものは、死すとも退かじとのさまを、見せて、喇叭の聲勇ましく、南をさして進み行きける。あなおもしろの此演習や。

げにも勇ましきは、丈夫なるかな。一朝事起らば、忠君愛國の眞心もて一命をも顧みず、立働くなるべし。あゝ其時よ、かよはき女なりとも、いかで安らかに過さるべきや、戦時の義務として、傷兵の看護をだに、及ばん限り盡さばやとの、念むら〳〵と湧き立ちぬ。

（紙面の都合により優等の分のみを掲ぐること〻なしぬ幸に諒恕せられんことを乞ふ。）





○東宮と老婆と老夫　皇太子殿下には屋島御成の砌廿丁近き山路を御登降とも御徒歩なりしに些かも御疲勞の御模樣見受け參らせず、御登山の途中弘法大師食はず梨の舊蹟に御小休あらせられし折柄孫女の火傷平癒祈禱の爲當人其弟を伴て茶店に憩ひ居たる老婆に目を着け給ひ、其娘は怪我にても致せしか名は何と申すぞとの御尋あり老婆畏りて高松に住む細谷龜太郎(老婆の男)の娘くにえと申し當年七歲に相成りますが東京にて空氣ランプに觸れ體より右の手に掛けて火傷致させましてござると御答へを申上げゝれば、勞り遣はせとの御言葉あり又其男の子はとの御尋ねに、是は秀雄と申し當年四歲に相成りますと申上げけるに、可愛の者なりとあり、老婆御辭誼致せと云へば秀雄は敷居の際に兩の手をつきて敬禮なせしに、腰掛けさせよとの有り難き御意ありければ老婆坐ろに感涙に咽びけり又殿下は茶店の老夫(潟元村山本森藏)に向はせられ、食はずの梨の由來を御尋あり、委細に言上申せしに殿下には野人の朴訥なる狀を愛でさせられ更に又ぢいよ是より絕頂までは何程あるぞとのたまふに、七丁程でござりますと申上げたれば大に笑はせられ、そはえらいなと仰ありけりとなん

○女子高等師範學校規程改正　文部省令第三十二號を以て女子高等師範學校規程中に改正を加へられたるが其の要は第二條文科の科目中「家事」を「音樂」に改め第三條理科の科目中「地學、國語、家事、圖畫」を除きて「音樂」の一科を加へ第四條技藝科の科目中「國語」の一科を除きて「物理及化學、裁縫及手藝、圖案、音樂」の各科を加へ第四條の次に

前三條の科目中音樂は學習困難なりと認めたる生徒には之を課せざる事を得

の一項を添へ尚ほ第六、十、十二の各條は左の如く改正されたり

第六條　文科、理科、技藝科の修業年限は各四箇年とす

第十條　女子高等師範學校の卒業生又は之と同等の學力を有する者にして第二條乃至第四條に規程したる科目中の一科目又は數科目を專攻せんとする者の爲に研究科を置く

研究科の修業年限は一箇年乃至二箇年とす

第十二條第三項を左の如く改む

選科生の在學期間は四箇年とす但し特別の事情ある者に就きては學校長に於て本文の期間を伸縮することを得

本令は三十七年四月一日より實施さる

○東洋女學校　佛教家にして文學博士なる村上專精、同文學士和田鼎、同村上龍英の諸氏發起となり大隈伯、渡邊子、井上兩文學博士等朝野の學者紳士の贊成を經て一大女學校を創立する由資金は凡そ十五萬圓の豫算なりと其趣意書に曰く

夫れ我國古來の德教たる近世二百年間士人以上に在ては頗る儒教に據る者ありと雖ども溯りて千數百年間貴賤上下に通じて普れく感化を及ぼせる者を求むれば夫れ唯佛教の一途あるのみ而して其の化の及ぶ所遺傳の久き浸染の深き其勢力牢乎拔く可からざる者あり之を以て苟くも之に據て之を導くときは俗を易へ風を移すも亦甚だ難しと爲さず是れ固より男女を論ぜずと雖も女子に於て尤も更に其の然るを見る然れども現今佛教各宗の情態たる久しく眞諦に偏倚して俗諦に疎濶なりしを以て未だ遽かに其要求に應ずること能はざる者に似たり是に以て世或は儒教を主とし或は基教に資て以て之が教養を爲す者ありと雖も概れ舊陋に泥まざれば新奇を衒ひ眞に國情民俗に契當すること能はず其の甚しきは知識愈々進みて言行愈々社會に逕庭し感化益々深くして動靜益々家庭に軒輊するが如き者あるに至る人生の一大恨事豈復た之に過ぐる者あらんや

我等自ら揣らず此の闕典を補充せんが爲めに茲に東洋女學校を創立し其の智能は尤も社會に切實なる常識の發達を主とし其の德器は尤も家庭に順應せる精神の化育を要し新奇を衒はず舊陋に泥まず智能相資けて以て健全なる淑女を淘冶するの一大鱗備と爲さんと欲す

○令孃の手藝慈善會　華族女學校教師ウエストン孃並びに松平子爵夫人(久子)に依て計畫せられたる貴婦人連の手藝慈善會は昨卅一日午後二時より華族女學校前ウエストン孃宅にて開會年末慈善市の爲に手藝せし後明治女學校長巖本善治氏の講話ある筈なりと云ふ

○女子裁縫高等學院の展覽會　去る十一日より開かれたる同學院生徒の製作に係る中古時代の諸服裝及和洋服裝其他小細工參考製作品等の展覽會は觀覽人非常に多く十三日まで三日間約一萬五千餘人に上り頗る盛會なりと云ふ因に製作品は總計四百二十種の多きに上り殊に中古時代の法衣其の他の諸服裝は參考として頗る有益なるものなりと

○岡山高等女學校卒業式　岡山高等女學校にては既載の如く去月八日午前十時より同校講堂に於て本科第一回、技藝專修科第二回卒業證書授與式を擧行せり來賓は檜垣知事、白阪視學官、酒井第六高等學校長、各縣立學校長及び敎頭、木下山陽高等女學校長其他父兄等廿餘名にて一同着席するや國歌を二唱し次に校長勅語を捧讀し終つて卒業證書を授與し本科卒業生總代岡村照、技藝專修科總代黑泉小茂之を受領し次に星校長は本年四月に卒業授與式を擧行する筈なりしも講堂其他校舍の建築中なりしを以て今日迄延期したる理由及び本科生四十三名技藝專修科生二十四名に對し證書を授與する旨を述べ其より各卒業生に向ひて訓誨する所あり其れより檜垣知事祝詞を朗讀し小野御津郡長は父兄として各敎師に謝辭を述べ續いて前川玄泉氏亦同じく各敎師に向ひ祝詞を朗讀し最後に卒業生惣代矢吹幾代子の答辭ありて卒業生一同は感謝の唱歌を在校生一同は螢の光りの唱歌を齊唱し式を終り來賓一同には別室に於て茶菓を饗せり檜垣知事の朗讀せし祝詞は左の如し

茲に本日をトし岡山縣立高等女學校第一回卒業證書授與式を擧行す抑も我邦の女學敎育は從來甚だ幼稚にして高等普通の敎育を受くる者實に寥々たり然るに時勢の促す所漸く進んで之が敎育を修むる者年一年多きを加へ今や將に男子の敎育と相併進せんとするの機運に向へるは洵に國家の爲喜ぶべき現象なりとす惟ふに諸子は多年本校に在りて女子に須要なる敎育を受け螢雪の功空しからず能く今日の光榮を荷ふを得たり希くば將來誓て本校薫陶の主旨を體し益々淑德貞操を涵養し以て良妻賢母たるの實を擧げんことを一言を叙して祝辭とす

明治三十六年十月七日

岡山縣知事正五位勳四等　檜垣直右

又卒業生の姓名は左の如し

▲本科卒業生

大野穂野、川上敬子、周藤茂夫、前川敏、柳原壽代、掘龜、牧野靜、小野秀代、泉千代、難波幸子、根岸松世、本郷壽次、近藤千英、岸野小長、原田文子、佐藤濟、大河原美津、中野政、笠石きそよ、岸田生實、北川きよの、矢吹幾世、片岡遊かの、吉田小春、松田鐵野、山本仙子、笹原貞、友野花、國久以加、小崎壽美代、香山操、竹下仲、岡村照、松田小三、小出恭、杉生¥子、三村靜、赤木順、橋本小信、前田直子、栗原熊、菊畑文子、岡田近惠

▲技藝專修科卒業生

原小富士、坪田龍、太田かめの、矢部幾久世、田中嘉代、安田秀、土井原梅代、松村壽代、岸本琴、田川靜、吉田濟、田中京、村上八重野、遠藤松、河原經代、小箕小辰、田中鶴野、宮宅光技、栗泉小紫、安井とらの、相田多美、宮島敬、大賀寅、原田八重野

○感ずべき貞婦　熊本縣阿蘇郡南小國村大字赤馬場穴井藤三郎の妻イト(四十一)は去明治十三年の頃今の夫藤三郎の妻となりしが同家は元より富めると云ふにあらねば夫婦とも日傭稼ぎなどをして漸く家計を立居たるが稼ぐに追ひつく貧乏なしとて夫婦二人が勉强の結果多少の貯金も出來たれば去十九年の頃水車業を起して益々奮勵し漸く負債をも償却して一家は之れより幸運に向はんとする折り柄不幸にも夫藤三郎は不治の病氣に罹りしかばイトの愁嘆大方ならず神佛に祈願を籠め一方には醫藥を勸むれど病氣は日増しに重り行くのみにて更に少して効驗もなければイトは日夜心を痛め病夫の看護は素より怠たらず朝は早く起きて駄馬を曳き近村の花客を廻はりて米穀を自宅の水車に運び晝は精米製粉の業を勵み夕べには又それを花客の家に運び行き其得たる賃金を以て醫藥の料となし或は滋養物を勸めて夫の心を慰めるなど斯くも貞節を盡し居るにも拘らず兼て短氣の夫は尙イトに對して不足を云ふことあれどイトは少しも夫の心に逆ふことなく唯夫の病氣全快を祈り居たれど一向に其甲斐なく去三十三年頃より病氣は次第に重くなりて遂に起臥さへもまゝならぬ身となりしかばイトの悲みは一層にて日夜看護に怠りなかりしが近隣の人々もイトの貞節に感し別に病夫を容るべき一棟の家屋を買ひ與へたれば其喜び云はん方なく夫の云ふまゝに、之を背負うて別室に容れ看護の傍ら業務を怠らず夫は兼て煙草を嗜むも煙管を握ること叶はねば其望むに任かして吸ひ付て喫せしめ

其他二便の通ひ入浴に至るまで何から何まで甲斐々々しく十餘年間一日の如くなれば之を見聞く人々皆感せざる者なしと云ふ

○正直なる少女　日本橋區本町四ノ十三藥種商中川卯八は此頃一人の番頭を伴ひ淺草觀音へ參詣し夫れより裏手の噴水を眺め暫く鬱を晴さんと傍の共同椅子へ主從にて腰を懸けしが其際卯八は番頭に持たせし半外套を敷かせ四邊の飛沫などに見惚れ居り軈て興盡き主從は其場を立去り歸途仲見世迄來り初めて右の外套を置忘れし事を思出し驚いて以前の場所へ來て見るとハヤ影もなき故堂前の巡査派出所へ屆けんとすると一人の身扮賤しき少女が自分の外套を拾ひ巡査に屆け居る處なれば卯八は直に其旨を巡査に話して外套を受取り此際番頭は懷中より三十錢出して右の少女に禮として與へ立歸りしが此少女と云は淺草區田町一の七十七人力車夫折原源助(四十)の長女きの(十四)と云ひ源助は妻きよう(三十一)との間に長男由太郎(八つ)次男喜四郎(五つ)と右のきの及び次女きさ(十二)三女さい(八月生)と云ふ五人の子供ありきようは去八月以來病床にあれば源助の稼にてはナカ〳〵七人の家族を養ふ事出來ず爲めにきのは家の貧苦を見るに忍びず小箱に形ばかりの飴菓子を入れ前記噴水のあたりにて情ある人の憐みを乞ひ居りしが此日圖らずも右の外套を拾ひ貧苦に育ちしに肖もやらず正直に派出所へ訴出でしものなるが卯八は如何にもきのが殊勝なる志に感じ其翌日一人にて源八方を訪ぬると見る影もなき貧苦にて殊に母親は病苦に惱まされ居るとて哀憐の情に堪えず金一圓を惠みて歸宅せしが母親の病ひは血の道と聞き藥を十日分贈りやり尚一二度自身に見廻り遣りしが源助は此界隈にての正直者なれば卯八の親切なる志を感謝し居るとは貧乏人に肖合はぬ心掛と云ふべし

○殊勝なる女學生　德島縣德島町三森秀雄方に寄宿せる高等女學校第三學年生中津愛子(十五)は兼てより慈善の心に富み之れまで殊勝の行爲ありしことは屢々なるが此程同家へ始終出入りする紙屋町齋藤友

吉の妻セキ(六十)と呼ぶ老婆が來り種々雜談の折柄突然ウーンと叫ぶと共に其場へ卒倒したるを以て家族始め側に居合はしたる愛子は急ぎセキを抱起し種々介抱の末漸やく蘇生したるにより充分に勞はりやりし上一先づ自宅へ送り届けしが此友吉一家は赤貧洗ふが如き手許にして既に市役所より救助を受け居る程なればセキの病蓐に打臥すことゝならば忽ち友吉方の糊口に窮するならんと甲斐々々しくも愛子は自から粥を煮立て之れを態々紙屋町のセキの許へ持參して何角と言慰め幾らかの小遣錢まで惠與して歸宅したるは誠に感ずべき行爲なりとて何れも嘆賞し居れりといふ

○大日本圖案協會大會　同會は去る十日午後二時より上野鶯谷の伊香保樓に於て大會を開きたり來會者は同會理事平山英三氏初め役員は勿論會員帝室技藝員荒木寛畝、宮川香山等を初め七十餘名なりし懸賞當選圖案は女鑑表紙(國光社の懸賞)薩摩燒陶器圖案(前田健次郎氏懸賞)の二題にして女鑑表紙圖案一等賞磯村茂信二等賞永澤時基三等賞渡邊香涯外に褒賞三名、薩摩燒陶器圖案は二等賞十二町貞吉三等賞同人四等賞磯村茂信、奥村乾昇夫より役員選擧に移り引續き餘興として東次郎一座の狂言素袍落墨塗の二番を演じたるが次で井手理事の挨拶にて宴會に移りたり又役員は理事商議員等の改選にして大抵前任者重任となり又參考品として出陳せしは農商務省東京高等工業學校等より圖案又は寫眞類秋元本會長より蒔繪物面類其他數點飯田新七氏より友禪模樣西村總左衞門川島甚兵衞の二氏よりは織物類等數十點なり本號の本紙表紙は則ち前記一等賞當選圖案を描寫したるものなり

○都市的敎育の模範

我が都市の敎育が一般町村に比し進歩せることは勿論なるも都市には富豪あり貧民あり階級頗る錯綜し居れば此等の子弟を集めて一種の學校に網羅し同一の敎育を施すの可否は實際講究を要すべき問題なるが内務省の調査せる處に依れば神戸市に於ては他の

都市に率先して此教育法に意を用ゐ居れり元來神戸は其北方に兀禿たる赭山あるが爲に市は毎年其用水の減乏に苦しみ殊に一昨年の旱魃に逢ひて水源涵養の急務を認め植樹の計畫を立てしが小學校も亦區有の原野に植樹を爲し四十年計畫を以て二百五十萬圓の基本財産を造成せん計畫を立たり又市は各小學校が市住民教育に關し如何なる注意を有するかを調査せんが爲め昨年中各小學校に於ける作文を稽査せるに記事文の數遙かに書柬文の數より多く其の記事文の種類も日用に適切なるもの少く殊に書柬文に於て遊覽勸誘文の如き種類多かりし事實を發見し遂に市内各小學校長を會同し市住民の教育資料に關する調査を遂げ材料を家庭的、鄉土的、社會的、國家的の四種に分ち之を尋常高等の各學年に配當せる教授細目を調製せり又更に特種教育に意を用ゐ市内に實業補習學校三校を設置し修業期を六ケ月とし學科を甲乙丙の三科に分ち商店の丁稚小僧及び工業者の徒弟を收容し一學期を終了するも直に實際に應用し得べき組織と爲し又半日學校の必要を認め本年度より三個の貧民學校を開始せり尚ほ學校と家庭との關係を密接にする爲め各小學校に於ては祝祭日紀念日等には生徒の父兄を招待して双方意思の疎通を圖り家庭と學校教育との齟齬扞格なからんことを勉めつゝあり其成績大に看るべきものありとなり

○夫婦の柔術修業　赤坂區青山南町二丁目の醫師託摩武彥(三十)氏は妻眞機子(二十)との間に二男一女を設け眞機子は殊の外强壯なるも武彥氏は質羸弱なるより夫婦にて柔術を習はんと去る四月頃より客間を道場に充て赤坂署の巡査部長松井某を教師に賴み晝となく夜となく稽古を勵みければ今や眞機子は夫に勝る柔術家となりしが今回自宅に一棟の擊劍道場を設立し其新築披露として過日區內の有力者家族等を招待し擊劍及柔術會を催せしが氏は今後斯道に志ある男子は勿論夫人令孃の爲無報酬にて教授すといふ

(以上本月廿三日〆切)

○新刊批評

◎女子立志編（加藤眠柳氏著） 四號活字二百三十頁の小册子なれども婦人にして小說家、詩人、新聞記者、科學者、著作家、美術家、學校敎師、看護婦等となりて成功したるものゝ傳記を平易に記述したれば女學隆盛の今日最も必要なる讀物といふべし 卷頭にはナイチンゲル女史及び小說家ストー女史の肖影を挿揭せり （定價金參拾錢内外出版協會發行）

◎運命開拓策 成功雜誌社に於て出版せる世界成功文庫の第壹篇にして米國成功雜誌主筆マーデン氏の著述に係るアーチテクツ、オフ、フエート、チワ、ライジング、イン、ゼ、ウオールドを摘譯せしものなりといふ譯者の緖言に曰く 何物をも有せざる不過の靑年をして其品性を高からしめ 其精神を練磨せしめ處世の道を講ぜしめ勇往邁進の氣象を養成せしめて以て眞正なる 成功の堂奥に達せしめんとにあり、と文勢奔活一讀惰氣を覺醒すべく眞に其の言ふところに背かずといふべし（定價金參拾錢本郷區弓町一成功雜誌社發行）

◎天眞爛熳（福島四郎氏著） あどけなき幼年幼女の一口噺しを集めたるものにて 讀めば讀むほど興味ありて罪なき兒童の可愛き口振の目前に動くが如き心地するなり天眞爛熳と稱し、、、こどもと 題せしは良に其實を表せるものといふべきなり （定價金十三錢婦女新聞社發行）

◎書生の旅（矢野滄浪氏著） 著者が其の郷里なる豊後の一漁村に歸りたる途上に於て見たること、思ふたること、感じたること、を縱横自在勝手氣儘に記述したるものなれども 猶ほ亂雜蕪穢の草野に一條の逕路を辿るが如く思索一貫して 文致亦凡ならざれば一讀し去つて普通紀行文以上の快味あるを覺へざるを得ず（定價二十五錢東華堂書店發行）

◎日本民族將來の活動界（成功雜誌社著） 南北亞米利加や布哇や支那や、朝鮮や南洋諸島等に於ける職業及び渡航の案内記にして雄飛を海外に試みんとするものゝ 一讀すべき小册子なり雜誌『成功』第三卷第一號の附錄として 發兌せるものなれども單に此書のみにても購讀するを得べし其價は金十五錢なり（成功雜誌社發刊）

◎新男爵（有本礎水氏著） 不幸なる可憐の少女に配するに有爲の年少才人を以てせしはたゞ普通小說の 叢事に過ぎずと云ものもあるべけれど其間に變幻の妙あり出沒の巧みなるところありて 局面幾回か變じて層一層自然に快感の生じ來るを禁ずる能はざるは 著者手腕の凡に似て却て凡ならざるところあるが故なるべし 秋の夜長のつれ〴〵に讀み去り讀み來り人生の無常に泣きて 涙の露を拭ひあえぬ女生もまた少なからざるべき歟 （定價金參拾五錢京橋區山下町隆々堂發行）

◎新潮（尾崎紅葉氏編輯） 甞て讀賣新聞に揭けたるものと秋聲會員の俳句とを編纂したる册子にして天文、地理、時候等に 分類しあり斯道を嗜む人に取りては興味を 感ずる少なからざるべし （定價廿八錢富山房發兌）

◎護國經現世篇（三輪信次郎氏著） 代議士三輪信次郎氏が現今日本の國狀に對する意見を陳べたるものにて經國の 大文字と評するは未だしと雖も鑿々能く時弊を穿ちたるところありて 一讀痛快の情を起さしむ文字穩健にして所論急に迫らず 緩に流れざるは當今坊間に流行せる悲憤的文字とは全く趣を異にするものあり（非賣品）

○新刊書目

婦女新聞	一八〇	東京牛込區東五軒町	同新聞社
商家の友	一九	同京橋區南鍋町	時事新聞社
女子の友	一四四、五	同神田區鎌倉町	東洋社
婦人と子ども	三卷一〇	東京女子高等師範學校内	フレーベル會
慶應義塾學報	七〇	同芝區四國町	同發行事務所
うらにしき	一二二	同本郷區	尚絅社
をんな	三卷一〇	同麴町區下二番町	大日本女學會
むさしの	二卷一〇	同赤坂區福吉町	東洋文學會
大日本婦人教育會雜誌	一五八	同表町	同會事務所
六合雜誌	二七四號	同芝區四國町	日本ゆにてりあん弘道會
新聲	拾編四	同神田區錦町	新聲社
東京經濟雜誌	三〇三、四、五	同京橋區彌左衛門町	經濟雜誌社
成功	二卷六	同本郷區弓町	同雜誌社
音樂の友	四卷六	同下谷區仲徒士町	樂友社
大八洲雜誌	二〇七	同神田區三崎町	大八洲館
國學院雜誌	九卷一〇	同麴町區飯田町	國學院
家庭雜誌	七	同京橋區新湊町	由分社

女子新聞	四〇	同南鍛冶町	同新聞社
佛教文藝	一卷九	府下北豊島郡巣鴨村	佛教社
護國經現世篇	三		
慈善時報	八	福井縣福井市毛矢町	福井縣私立育兒院
四日市學事通報	三三	四日市高等小學校内	私立教育會
天眞爛漫	全一册	東京市牛込區東五軒町	婦女新聞社
日本婦人	四七	府下豊島郡澁谷村	帝國婦人協會
中央公論	十八年一〇	東京市本郷區駒込西片町	反省社
婦人世界	二九	大阪市南區末吉橋通	浪華婦人會
女子立志編	全一册	東京市神田區南甲賀町	内外出版協會
運命開拓策	同	同本郷區弓町	成功雜誌社
日本民族將來の活動界	同		同
書生の旅	同	同神田區裏神保町	東華堂
愛國婦人	四〇	同麴町區下二番町	同發行所
文藝古海	一	京都府龜岡町呉服町	同發行所
圖案	一		圖案協會
文華	一卷一二	東京市京橋區南紺屋町	文泉館

締切期限毎月十五日

繪畫募集廣告

募集規定

一應募繪畫は日本畫たると西洋畫なるとを論せず、又流派材料の如何を問はずと雖も、成るべく時期に適合せんことを要す

一其の素畫なると着色畫なるとは應募者の隨意なりと雖も、用紙の大さは、縦六寸横四寸に過不足なきを好しとす

一應募繪畫は某畫伯に囑托し嚴密調査の上、其中より一等二等の二種を選拔し、當選者へは本社發刊の書籍を贈呈す

一締切期限は毎月十五日とし、當選繪畫は、翌月十五日發兌の女鑑口繪に挿入して發表すべし

一應募者は左記の切符に住所姓名を記入し、繪畫に貼付し、女鑑編輯局に宛て送付すべし

府縣　市郡　區町村　番地

國光社

女鑑編輯局

御注文の節は女鑑廣告に據りたる旨御附記被下度候

女鑑

明治三十六年十一月一日發行　毎月二回一日十五日發行　第拾參年第廿壹號　明治廿五年三月十二日第三種郵便物認可

を持てる親、娘を持てる夫、妻を持てる子、母と云ふ女、女見よ

姉妹を持てる兄弟は繰り返してく此廣告を讀み玉へ讀みて記憶し玉へ日本國に中將湯と云ふ靈藥あることを

女鑑之愛讀諸君よ、諸君の知り邊に於て若しも子宮血の道さん前さん後の諸症にて種々の藥を用ひても其効なく困難する人あれば試みに此中將湯を服ませしめよ……百發百中……

中將湯の名譽

產科婦人科專門諸大醫の賞贊を得たるのみならず畏くも上宮樣方の御用を蒙るに到る誠に本劑の名譽と云ふへし

高木兼寛先生（東京）醫學博士慈惠病院長
櫻井郁治郎先生（東京）產科婦人科專門醫學士櫻井病院長
木村順吉先生（東京）產科婦人科專門ドクトル
朝山義六先生（横濱）婦人科專門獨逸ドクトル
佐伯理一郎先生（西京）產科婦人科ドクトル
緒方正淸先生（大阪）大阪緒方病院婦人科醫長ドクトル
小林山卿先生（大阪）產科婦人科專門ドクトル
柴田耕一先生（名古屋）愛知病院婦人科醫長醫學士ドクトル
大月文先生（福井）ドクトル婦人科專門ダランエト、ハーマルー

右の外三十餘名の大醫諸君より最も名譽ある稱賛を忝ふしたれども略す



●十年の血の道三週間に全治す●

子宮病血の道產前產後の長き患ひ●下腹子宮腰足引つり痛み●下腹より胸先へ差込み或は正氣を失ひ●息切し動氣強く腰より足先へ冷込み●手足しびれ●浮腫●

月經不順

年頃になりても月經なき人●逆上頭痛眩暈甚しく●又物事を苦にし氣分惡しく常にふさぎ勝の人殊に子宮出血白血長血帶下にて久しく患ひ身體衰弱せる病にても全治すること請合なり（論より證據早々試みよ）

定價		郵税料
五週間	二圓	十五錢
三週	一圓廿五錢	十錢
二週分	八十五錢	六錢
一週分	四十五錢	四錢
三日分	二十錢	二錢
一日分	七錢五厘	二錢

●中將湯は各國藥店にあり無は本舖へ申込あれ●東京市は配達し●遠國は配送すべし本舖へ御注文の御方は病人の容體詳しく申込あれ●切手代用一割增の事

本舖　東京市日本橋區通四丁目七番地（電話本局千九十七番）津村順天堂本店

本舖　大阪堺筋邊町北入（電話東二百七十八番）津村順天堂支店

東京築地國光社印刷